昭和36年11月1日発行（毎月1回1日発行・第13巻第11号）昭和24年2月3日第3種郵便物認可　昭和34年12月11日国鉄東局特別扱承認雑誌第692号

月刊 キリスト



11

愛にもとずく政治　長谷川 保
降臨節のことば　深津文雄
現代夫婦論　高見沢潤子
信仰に生きる 傷つける者よ、ここに泉あり
原爆の傷は今日もうずく　佐古純一郎

作品集 1

定価 200 円

評論

表現・文学・信仰……国谷純一郎

太宰治論……斎藤末弘

『長い谷間』の「うめき」について……佐古純一郎

小説

天来……青山立郎

眼鏡をかけたおおむ……阿部光子

まつり……石井宏

彷徨……柴岡信夫

死顔……菊田義孝

深き淵より……由武妙子

テレビ・ドラマ

神聖なる牢獄……椎名麟三

発行所　たねの会

発売所　教文館

東京都中央区銀座四ノ二

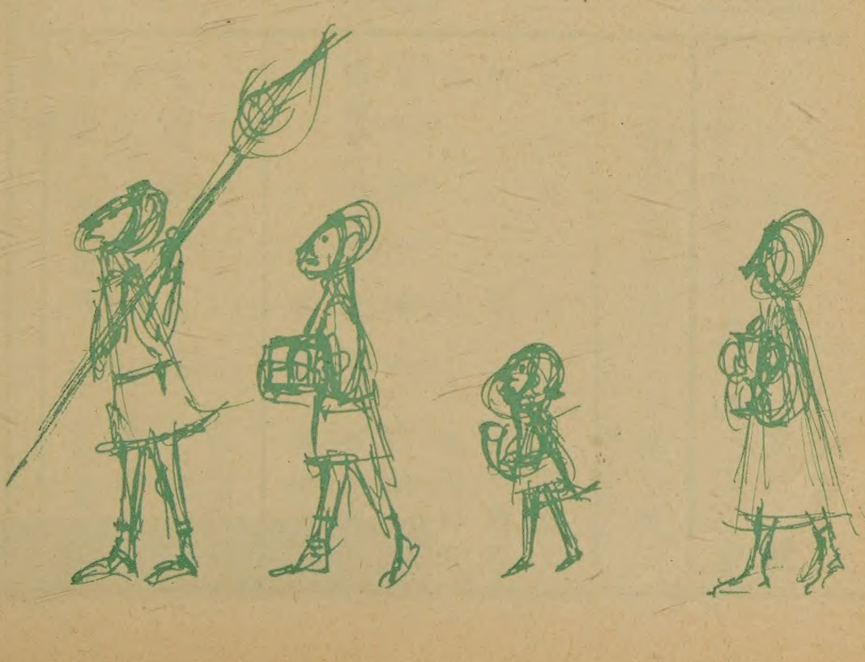
振替東京一一三五七





表紙・藤城清治　カット・山中春雄

11月号・目次

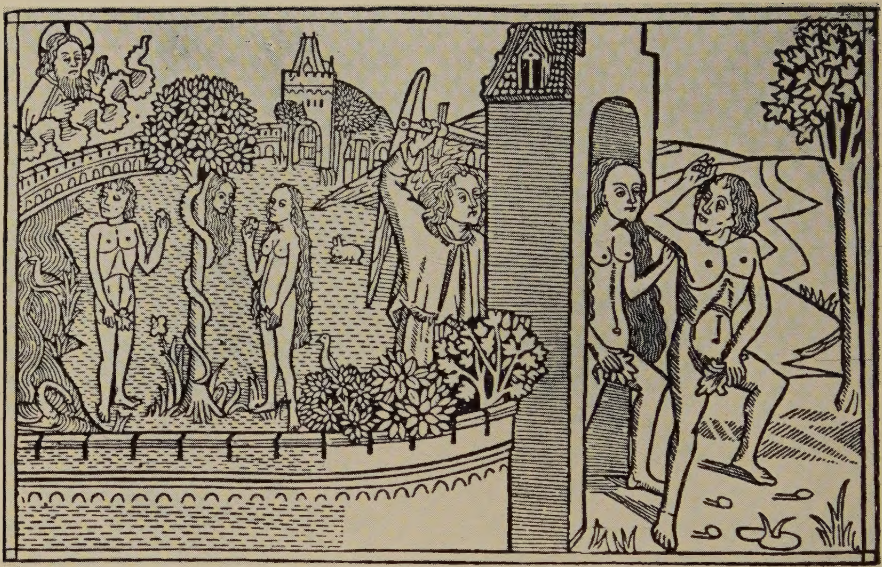


聖書のさしえ（11）

辻　成史



1. 「園のマリヤ」M・ションガウアー，1480 年，銅版画



3



4

3.　「堕罪と楽園追放」“ケルンの聖書”より，1478年頃，木版画

4.　「種蒔く人」“キリストの生涯についての霊的釈義”より，1485年，木版画

古代ローマの遺跡が紺青の空の下に輝くイタリアで、無数の天才たちがその技を競い、万能人の誉れを目指して華麗な人間劇を展開している時，アルプスの北側では、まるでひたひたと押寄せる大水のように、宗教改革前夜の動きが音もなく、しかも恐るべきエネルギーをもって始まっていた。ルターは偉大であり、またルターを支持した諸侯も、勇気と決断に満ちていた。しかし、これらの宗教改革の立役者たちを動かし、励ましたほんとうの力は、実は名を知るよすがもない、大小のドイツ農民に宿っていた。彼らは頑丈な体軀に、いささか粗野な、しかし真面目さにあふれた面立を備えていた。彼らは深遠なスコラ学の教義を理解する力は持っていなかったが、しかし、自分の耳で聖書を聞き、許されたものは自分の目で読み、そして自分自身の心に信仰を保っていこうという情熱と意志に燃えていた。労働の後の、夕べの一刻に、父から子に、子から孫にと、数々の聖書の物語が素朴な舌と現実的なたとえをもって語られていったことであろう。法王使節も気づかずに通り過ぎてしまったような貧しいが、しかし頑丈この上もない村の教会では、たくましい声で衆讃歌（コラール）を歌う農民たちの心が、だれも気づかぬままに恐るべき力で一つ一つと結ばれていったにちがいない。

14 世紀から 15 世紀にかけて、続々と生み出された木版•銅版の聖書のさしえ、一枚刷りの聖画には、あのイタリアルネッサンスの気高い趣味と麗わしさは見られないが、素朴なリアリスムと――何よりも見落としてはならないことは――この上ない聖書のことばに対する忠実さがあふれているのだ。彼らドイツの民衆にとっては、聖書は、美しき理想の世界ではなかった。聖書は彼ら自身が目の前に見出すべき現実の出来事、そして、彼ら自身に対する語りかけであった。彼らは「実存的」などという用語は知らなかった。しかし、字の読めない農民の手から手へと受け継がれて来た聖書の「絵とき」によって、彼らは、キリストの苦難と救いが、まさに自分たちのためであったことをまざまざと読みとったに違いない。



2. 「説教を聞く民衆（洗礼者ヨハネの説教部分）」
L・クラナッハ，1516 年，銅版画

月刊 キリスト・11月号

巻頭随想

古今捲かず江山の画

今泉 真幸

『神学問題に触れず政治問題を避けて』との注文、そのつもりで執筆しましょう。わが国過去の思想地盤とキリスト教というのが、昨今多少の問題となっているが、われわれ明治時代のものにとっては（わたしはちょうど満九〇才）、儒教・神社崇敬・各種の仏教とは、舷々相磨すの経験をしてきているから、文献だけに基づく研究にはどうもものの足りなく感じられる。

過去の思想全般にわたることはむろんできない。各種の仏教にわたることもできない。昨今ちょっと禅宗ブームの気色も見える。それについて随想を吐こう。インテリの社会では、禅寺詣がたいへん流行のようだ。相国寺の長得院などでは、絶えず外人の止宿者や参禅者がある。禅宗といっても、明治維新以降は、俗人間では臨済宗が流行したものだ。山岡鉄舟・鳥尾得庵・北垣京都府知事など、明治時代の傑物に臨済者が多かった。しかし昨今は曹洞宗が優勢なようだ。元来寺数からも信者数からも、曹洞のほうが多いのである。わたしは実状を知らないが、臨済のほうはとかく奇矯な言動をなし、野狐禅に陥る弊があるが、曹洞のほうは地味な修行を重んずるという評者もある。禅宗ではなんといっても坐禅が第一だ。とくに曹洞ではそうだ。研究や問答はダメだ。まず坐れ、坐ればわかる。坐らなければ門外漢だ。

ところが坐禅は元来仏教独特のものでない、印度諸宗教諸教派共通のものだ。釈尊以前にもあり、釈尊以外にもあった。彼は開悟以前に盛んに坐禅をやり、また坐禅中に開悟した。開悟したから覚者だ、すなわち仏陀だ。われわれも大いに坐禅して、彼と同様の開悟をすれば、われわれもすなわち仏陀だ。否、彼と異なった開悟をし、彼以上の開悟するかもしれない。しかし開悟した以上は覚者だ、すなわち仏陀だ。そうなると殺仏殺祖だ。釈尊を超越し達磨を凌駕する。

禅宗では、釈尊開悟の境地に没入すればいいので、釈尊開悟の内容（教説）は変更してもさしつかえない。それで経典の文字にとらわれる必要はない。釈尊の精神を把握すればりっぱな仏教徒だ。そこがインテリ向きのところだ。五六十年前のこと、ある牧師が（当時共観福音書を重んじヨハネ伝を排斥する気風の時）ヨハネ伝を重んじ、余はイエス教信者でない、キリスト教信者だと公言した。その人は今は宗教者ではあるがキリスト者ではない。

坐禅は宗教的理想境にはいる方法手段とすれば、坐禅は剣道・柔術・茶の湯・活け花と同様、それをやっても必ずしもキリスト教の背教者ではない。熱心なキリスト者の実業家で、剣道の師範を頼まれて、警察署へ一週数回行っていた人もあった。牧師でかなりの柔術の達人もあった。わたしの先輩牧師で、嵯峨天竜寺の毒山和尚に師事して、三年間坐禅を修行した人もあった。

坐禅を徹底的にやって、殺仏殺祖の境にはいっても、なお釈尊を本尊として、これを渇仰崇敬礼拝している以上は、禅宗はどこまでも仏教である。なにをやっても、イエスを本尊として、これを主として渇仰礼拝するものはキリスト者である。仏の三身説を（釈尊の直接の所説ではあるまい）キリス



猛威にめげず活躍

9月16日、本土を襲った超A級といわれる〝第二室戸台風〟は、同日午後1時すぎ阪神地方で猛威をふるい、大阪の中心部中之島一帯で、最大風速 50.6m、平均 42m を記録した。このため、阪神一帯は広範囲にわたって大きな被害に見舞われた。

写真は、台風通過後、ただちに出動して災害救助に当たる大阪・京都・神戸・名古屋YMCAの合同救援隊。キリスト者医科連盟の協力で無料診療が行なわれている。

下は、市内大和田町の惨状。



させられました。聖書はそんな書物なのでしょう。それだからこそ聖書なのでもありましょう。それゆえ、いつも新しい読み方を心がけたいものです。もちろん、それはただ新奇ということではありません。

いつか東根に行けたら、今度は彼とそんな話をしたいと念願しています。

（農村伝道神学校教授）

キリスト教徒の平和運動

榊原　千代

中国へ幾度か招待されたことのある、ある進歩的インテリ婦人が最近中国から帰って来ての話、「最近の中国は、三日見ずば刮目して見るべしといったような再建ぶり、だれも彼も活気に充ちて働いていて、なまけている人なんか見られません。次から次と工業化が進捗し、町も村もいよいよ清潔になり、ききんが広い範囲に起こっても、人民公社のおかげでひとりの餓死者もない」という話。それにしても、毎日何百人というレフュジーが香港に流れこんでくるのは、どういうわけでしょう、と聞きました。その婦人はそんなことがあるか、といいたげなけげんな顔をして、「それは前から香港には貧乏人が多い。中国にはひとりのこじきもいません」とのこと。「でも、逃げて来ているのは事実ですよ」とわたしは、この目で見てきた実状を説明しました。納得したようでもないその婦人は、さらに続けて、中国は戦争を欲していない、平和主義だと言うので、そんな中国がなぜ核兵器まで持とうとしているかと言い返しました。彼女はこの世界に帝国主義が存在するかぎり戦争は不可避なので、中国が尨大な軍備をしていることは事実だし、四、五才ぐらいの子供でさえ、「アメリカ帝国主義と闘う」といってます、という答えです。

わたしたち夫婦は、アメリカで小学校に招かれ、日本の子供たちの話をしました。子供たちは大喜び、女の校長は「どうか子供たちがいろいろな国のことを知り、なんの偏見も持たず、それぞれの国に親近感をもち、豊かに成長してほしい」と言ってました。前の話と対象して、興味深い。

先日、日本に来られた中国YWCAの幹事のかたと牧師が、YWCAの歓迎会で、アメリカのスピーカーに対しては、きわめて冷やかで拍手一つ送らなかった、反米的な空気が、その身辺にただよっていたという。敵をも愛せ、という教えにたつ中国のクリスチャンの苦しい立場が身につまされる思いです。

八月号中川晶輝氏の「なぜ戦争に反対するか」という論文のところどころ、戦時中の日本および日本のキリスト者ということばを、今日の共産圏諸国とそのキリスト者ということばに置き換えて、そう見当違いでもなさそうだ、と興味深く読みました。

唯物論に立って国家社会が人間に優先する国、その巨大な力の前に個人など、いとも小さく無力でレジストひとつできない存在、そんな社会にわたしたちの国をしたくありません。

戦争末期、アメリカのキリスト者は、これ以上日本軍国主義が国民を苦しめないで、無条件降服をするよう、それにはまず、われわれアメリカのキリスト者が、神にアンカンディショナル・サレンダーをすることができますようにと集まって、熱心に何日も祈り続けその長い祈りの最中に、日本降服が報ぜられたそうです。

なにか日本のキリスト者平和運動者に問題を提供し、考えさせるような話ではありませんか。

（青山学院理事）

ト教の三位一体論に相当するという人もあるが、わたしにはそう思えない。法身は神にあたり、報身はキリストにあたり、応身はイエスにあたるであろうが、三身の中には聖霊にあたるものは見出せない。

（日本聖書協会理事）

すいかの食べ方から

興梠　正敏

この夏山形県を少し歩いて、なかなかくだものの多いことを知ってうれしく、またたのもしく感じましたが、その節、山形と新庄のほぼ中間にある東根（ひがしね）という町で聞いた話が忘れられません。教会は民家の部屋を借りてはじめてまもないささやかなものでしたが、そこの集まりに来た青年が話してくれたのです。「すいかというものは噛んで食べてはいけない、舌でおさえて味わうのです、種を出すことはありません、みんな食べるほうがいいのです」少し早口の山形弁で聞きとりにくかったのですが、そういう意味だったのは確かです。すいかにも種が無いといいのにと思っていたわたしには、ちょっとしたショックでした。ぶどうの種をのみこむ話は甲州の人から聞かされていましたが、彼はさらに、「あれはあの柄ごと食べるんですよ」というのです。「あの実のついた、枝の先の所ですか」とわたし。「そうです、その証拠にはぶどう酒を造るときあそこも入れると味がよくなるんです」という次第。すいかの種をたくさんのみこみながら、母校の農学校の先生が教えてくれたと、彼は言うのでした。それ以来、思いだすたびにいろいろの人に聞いていますが、どうもだれも感心してくれません。しかし、さればとて、あの朴とつそうな好青年の話を無視する気にもなれません。来年はひとつすいかの種をのみこんでみるかなと、思ったりするわけです。

それが実際できるようになるかどうかは別として、そんな食べ方もあると知ったのは、よかったと考えています。たとえば聖書の食べ方（読み方）にも、全然違った努力やくふうのあるべきことを教えられたからです。というのは、わたし自身の聖書の読み方、学び方のマンネリズムというようなことを、このごろしきりに反省させられていたからでもあります。すいかの食べ方の話から、のどにつかえたものが、すうっと通った感じがすると言えば、おおげさですが、そんな気がしないでもないのです。聖書は常に新しく学ぶべき書物と知っていながら、またそうしているつもりでもありながら、なおいつか、一定のわくを出ない読み方をしている自分に気づいたわけです。

正直なところ、わたしは、単純にありがたがって読む仕方にも、原語をいじくってえらそうにする読み方にも、学者のあまりにも緻密な分析的研究にも、それぞれついて行けないのですが、また、それぞれの方法に頭を下げなければならないと感ずるのも事実です。こんな深い意味もあるのか、こんなおもしろい味わいもあるのか、こんなことも書いてあったのかと気づくようなことが、いつまでたっても続いて、けっきょく自分はろくに読んでいなかったのだな、と思い知らされることがずいぶん多くあります。信仰を無視した人の読み方からも、目を開かれることは決して少なくありません。わかっているようなつもりでなく、全然新しく、真剣な求道心をもって読み直すならば、思いがけない新鮮な意味を学ぶことができるに違いありません。少なくとも狭く小さく固まった読み方を打破しなければならないと、しみじみ考え

は彼らなりに理想の人を心に描いているようです。この理想的な人間像をいつも前面に掲げさせて、それに向かって人間形成をするよう指導することが教育でありまして、ここにダイナミックな教育のわざが展開するのでありますが、それがだんだん成長するにつれて、この理想像が揺れ動いてきます。感動したり、絶望したりしながら、文芸に、思索に自分たちのあるべき姿を模索し、「なんのために生きるべきか」ということを哲学し、体系づけようとします。

旧約聖書の中の「伝道の書」というのをみますと、「ダビデの子エルサレムの王」とみずからを名乗っている筆者が、「人はなんのために生きるか」ということを求めて人生探求をした記録がしるされています。彼はすべての真面目な若者が一度は必ず試みるように、それをまず知恵をもって探求しようとし、その富と権勢を駆使して世の学者たちを動員し、「心をつくし、知恵を用いて、天が下に行なわれるすべてのことを尋ね、また調べた」とあります。ところが、「わたしは日の下で人が行なうすべてのわざを見たが、みな空であって、風を捕えるようである」といい「知恵が多ければ悩みが多く、知識を増す者は憂いを増す」ということを発見したと申しております。

そこで彼は享楽の中に若さを燃焼して、そこにリアルな生の姿を味わいつくそうと、快楽の中に身を投じました。「人の子は天が下でその短い一生の間、どんなことをしたら良いかを見きわめるまでは、愚かなことをしようと試みた」と申しております。しかし、それがむなしいことは享楽の最中、自分の魂の中をふき抜けてゆく白々しさによってとっくに感じとっていました。

そこで彼は今度は大きな土木事業を起こし、その仕事に没頭することによって生きがいを見出そうとしました。「こうしてわたしは大いなる者となり、わたしより先にエルサレムにいたすべての者よりも大いなる者となった」しかし「わたしはわが手のなしたすべてのこと、およびそれをなすに要した労苦を顧みたとき、見よ、皆、空であって、風を捕えるようなものであった。日の下には益となるものはないのである」と申しております。

彼は知者も愚者も一様に忘れられてしまう日がくるし、勤勉な者も怠け者も同じように死んで、労して残したものはいっさい、自分の知らないものが、何も労しないでその手に納めてしまう。全くばかばかしいと絶望します。こんなふうに考えたら、けっきょく「人はなんのために生きるのか」わからなくなり、したがって、生きることになんの意味も興味も感じられなくなってしまいそうです。

ところがここにもう一つたいせつな問いがあります。それは「人はいったいだれのために生きるのか」という問題であります。このことがわかると「なんのために生きるか」ということもハッキリしてくるのです。

だれでしたか「人間は十代のときは自分のために生きるが、二十代になると家族のことを考えて生きるようになる。三十代になると社会の人のため、四十代で国のため、五十代にして世界のために生きるようになる」といった人があります。ある口の悪い人はこれに加えて「六十をこえるとあの世のために生きるようになる」と申しました。

人間がはたしてこんなふうに世代ごとに生きる対象が変わってゆくものかどうかわかりませんが、ちょっとおもしろい見方

伝道説教

生きるということ

山北多喜彦



毎日をいろいろなことに追われて過ごしている人も、何かの拍子に、「生きる」ってどういうことなんだろうと考えることがあります。このことは昔から、世界中どこの国の人も考えてきたことのようです。中でも「人はどう生きるべきか」ということと、「人はなんのために生きるのだろうか」ということがだれにでも考えられてきたようです。これは毎日を漠然と過ごすのでなく、「生きる」ということを少しでも自覚的に考えるようになると起こってくる問いであります。

でも普通一般の人は「なんのために」ということよりは「どう生きるか」ということのほうに心をよせているようです。「なんのために生きるかなんてことは、生活にゆとりのある人の考えることで、自分なんかは『今日をどう生きるか』ということのほうが切実な問題である」などという人もあります。しかしそれでも「人間はなんのために生きるか」ということを考えておれば、困ったときには困ったなりに「そのわたしが今日をどう生きたらよいか」ということがおのずから示されてくるでしょう。そんなわけでこの「人はなんのために生きるか」ということは、人間に生きる目標を示すという点でもたいへんたいせつな質問といえるでありましょう。

ところが、これがなかなかむずかしい問いであります。小さい男の子をつかまえて、「きみ大きくなったら何になるの?」といってきくと、「力道山」とか「長嶋」とかいいます。彼ら

な楽な道ではなく、アンドレ・ジイドが紹介したアリサのえらんだ「狭き門」からはじまる険しい道であります。わたしたちには、そこに救いがあり、永遠の生命があるとわかっても、そこにはいることとは、「駱駝が針の穴を通るよりもむずかしいこと」なのであります。

ところがわたしにはできないことを神がさせてくださると聖書は約束しています。ヨハネの第一の手紙に「主は、わたしたちのためにいのちを捨ててくださった。それによって、わたしたちは愛ということを知った。それゆえに、わたしたちもまた、兄弟のためにいのちを捨てるべきである」（三・一六）とあり、また「わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛してくださって、わたしたちの罪のためにあがないの供え物として、御子をおつかわしになった。ここに愛がある」（四・一〇）としるされています。さきに申上げましたように、十代には自分のために生きることとしか知らなかったものも、二十代、三十代と世代を重ねると、家族、社会の人、日本を、世界を愛する人となるという人がありますが、それはごく限られた人々のことで、わたしどもの本性には、そういう心はありません。ところが、そのわたしたちがキリストを知るようになると、本来は、わたしたちになかった心が芽ばえてきて、夢想もできなかった生活をする人となるようになると教えられています。

神は、本来ならば、その罪に対する罰として亡ぼしてしまうべき人間を救おうとして御子キリストを世におくられました。わたしたちは、キリストを知れば知るほど神のお心がわかってきて、じっとしておられなくなります。「わたしたちは、神がわたしたちに対して持っておられる愛を知り、かつ信じている。神は愛である。愛のうちにいる者は、神におり、神も彼にいます」（ヨハネ第一、四・一六）とあるとおりであります。つまり「自分のために生きる」ことしか知らなかった者も、キリストを知り、「キリストのために生きる」ものとなることによって、「神におり、神も彼にいます」といわれる者となり、前には自分にもち合わせていなかった性質（神の愛）を、おのがうちに宿し、それに生きることによって、家も、社会も、国も、世界も、ほんとうの意味において愛しうる人となるのでありましす。「六十を超えて神のことを思う」のでなく、キリストを知り、「キリストのために生きる生活」が早くはじまればそれだけ早く、その人は直ちに社会のため、世界のため生きる人となるのです。

伝道者パウロはロマで殉教の死をとげる前にピリピの人に手紙を書きおくり、その中で自分の生涯を回顧し、いま死を前にしての心境を語って「わたしにとっては、生きることはキリストであり、死ぬことは益である」（一・二一）と申しました。彼は、「自分はだれのために生きるか」ということがハッキリすると同時に、「自分はなんのために生きるのか」ということが明確になり、それには「どう生きたらよいのか」ということが確定して、確信をもって自分に備えられた道を歩み、喜びと讃美をもって生涯を終ったばかりでなく、今もなおすべての人人に「わたしに倣いなさい」といってよびかけているのであります。これはすべての人がまじめにきき、そのすすめに従って試みるに価することであります。

（日本基督教団三崎町教会牧師）

であります。たしかに十代の少年少女は自分中心にものをみる傾向があります。まだ人生経験が浅いのですから無理もないことですが、自分以外のことを考えにくいようです。親は自分を幸福とするために生き、友だちも自分を楽しませてくれるためにおり、世界も自分のためにあるとでも思っているのでないかと思われるほどです。だから自分の思うようにならないと、死んだほうがいいなどといい、またほんとうにそう考える人もいるようです。

ところがこれは十代の少年少女にかぎらず、二十代になっても、三十代、四十代になっても、いつも自分中心にものを考える人がいます。七十、八十になると、もう自分だけのことしか考えられない「我利我利亡者」などとよばれる老人もいます。「自分のために生きる」というのは、世代だけの問題でなく、その人の生きる態度なのです。いつか石川達三という人の書いた『自分の穴の中で』という小説をみますと、「ひとのため」なんていいますけど、けっきょくこの世の人間はみんな自分のことだけを考えて生きてゆくのだと思わされるようなことが書いてあります。そのことはずっと以前に、有島武郎という人が『惜しみなく愛は奪う』という本の中で、人間なんか愛するなんていうけれど、本性は愛でなく、自分のためだけに生きぬこうとするものだといっています。ところがそれではそういう生き方をして、それで人間は幸福になれるのか、というと、けっきょくは孤立し、自分のつくった穴の中で孤独で、ミイラのようになって死んでゆくのだといっています。人生とはそんな寂しいものなのでしょうか。そんなことのために人間は生きてゆかなくてはならないのでしょうか。

これに対してレオ・トルストイが、「人間は利己的なものである。それによって自分で自分を不幸にしている。しかしだれかひとりでもいいから（たとえば自分の大好きな人でもいい）その人のためなら自分は死んでもいいと思うくらい、自分というものを投出してまで愛したいと願うようになったとしたら、そこに彼の救われる望みがある」というようなことを申しております。ここにはその人が「自分のために」生きようとしていたことから「ひとのために」生きようとする人に変わった点を指摘しています。そして、そう変わったことによって、その人は自分の穴の中で、ミイラにならないですむ「救いの望み」が与えられるというのです。しかしここに注意しなくてはならないことは、「救われる」と断言しないで、「救われる望みがある」といっていることです。というのは、愛の中には「愛する」とはいうものの、実は、さきほど有島武郎の指摘した「惜しみなく奪う」愛があるからです。そういう人は「自分のために」生きていた人間が、「ひとのために」生きるようになったとはいえないのです。そういう愛に生きることによって、その人は相手を傷つけるばかりか、自分自身をさえ滅ぼしてしまうようなことになりかねないのです。ひとを愛する、自分は求めないで、相手を幸福にし、相手を豊かに生かす、その中に自分も生きてゆく生活。いうなれば「惜しみなく与える愛」。ここに「愛される相手」にとっても、「愛する自分」にも救いの扉が開かれるのであります。しかしそれは実際にはなかなかむずかしいことなのです。家庭においてすべての夫婦が互いにそうありたいと願い、そう心がけるのですが、欲する愛の行為はなしえず、かえって願わざる結果のみを醸成しているのが現状です。「愛する」ということはありのままの人間が、鼻うたまじりで歩けるよう

ただあなたにだけ、そしてまったくあなたに、結びつけたまいましたゆえに、躍る心をもってあなたを讃美します。アーメン。

羊

わが羊はわが声を聞き、われは彼らを知り、彼らはわれに従う。
（ヨハネ伝一〇・二七）

ヨハネ伝の著者は、「彼はおのれの国に来りしに」と言う。イエスは、この自然の中で、異郷にいるように生活したまわなかった。自然は神のみわざであるから、彼の故郷であった。また、彼は、人間と、彼らが疏遠な者であるかのように、交わりたまわなかった。彼らとの間に共通のものがないかのように、交わりたまわなかった。なぜかと言えば、父なる神は、彼らに生命を与え、彼らを養い、装いたもうのだからである。神は、人間にそのみことばをも与え、それによって彼らは神を知る。また、その律法をも与え、それによって彼らは神に仕える。彼らは、傲然として神から離れ、あるいはしぶしぶ神に仕えるにすぎないけれども、彼らはやはり神の子らなのである。そして、神のみことばが人間に聞かれるとき、神は「今から汝はわがものである」とは語りたまわない。神は「汝はわがものであった。わがものであったからこそ、汝はわが呼びかけを聞き、わが声を聞き分けたのである」と語りたもう。それゆえイエスは、ご自身を、羊の所有者になぞらえたもうのである。イエスは、人間を今はじめて獲得したもうのではない。人間はもともと彼らのものなのである。この事実がイエスに静かな確信を与え、そのような確信をもって、イエスは、すべての者と交わりたもうのである。彼は人間をみもとに引き寄せるために、技巧的手段を用いようとはしたまわない。また、羊がその羊飼の呼びかけを知らず、その声を他の者の声と聞きちがえるかのように、人間の賛同を得ようとしたまわない。人間が、イエスに対してそのような内的な準備を持っているのは、人間が神に創られたものとして神に結びつけられているからである。

　それゆえに、人間は、神につかわされて人間のもとに来たり、神のみ心を告げるかたをも、自分の所有者として知る。イエスがわれわれに出会いたもうまでは、われわれは、自分が待っているものがなんであるかを知らない。われわれが知っているのは、ただ自分が何か自分には欠けているものを待っているということだけである。しかし、イエスが現われたもうとき、われわれにとって秘密であったものが明らかとなる。知られぬ神に対する憧れに代わって、召したもうキリストに従う信仰が現われる。

　われわれキリスト者がたずさわるいっさいのことは、イエスの確かな平安にあずかる。われわれは、他の持物を強奪することはできないし、強奪すべきでもない。われわれにできること、また、なすべきことは、良き羊飼の声を、その羊たちに聞かせることである。われわれは、創造者のような力で人間を変えることができるかのように、ふるまうことは許されない。神に対するわれわれのすべての奉仕は、神の働きに包まれているのであって、われわれの奉仕は、この神の働きを前提とし、神の働きによって完成されるのである。したがって、われわれの行なういっさいのことは、われわれが足を踏み入れることのできない秘密に包まれている。しかし、この秘密は、人間とのわれわれの交わりに、無比の深さを与える。パウロが「われらは神と共に働く者なり」〔コリント前三・九〕ということばで表現しているような、無比の深さを与える。

　驚嘆すべき主よ。あなたは、わたしどもに、羊飼の呼び声を聞く耳を与えてくださいました。それは、彼がわたしどもを呼びたもうときにはいつも、その場所へ、彼に従ってゆくためです。あなたは、わたしどもを、その所有物として、彼に与えたまいました。それゆえに、み名は讃むべきです。アーメン。

＜思いと祈り＞



シュラッター
井上良雄訳

あとなる者は先に

あとなる者は先に、先なる者はあとになるべし。（マタイ伝二〇・一六）

ペテロは、他の者が無力で自分のしたようなことができないのを見たときに——すなわち、いっさいをすて、自分をイエスから分離するようないっさいのきずなを絶ち切ることができないのを見たときに、わたしにはそのごほうびに何をくださるのですかと尋ねた。それに対して、イエスは、神は汝の奉仕に十分に報いたもうであろうと答えたもうた〔一九・二七—三〇〕。われわれを苦しめる忍従、われわれに損害を与えてなんの祝福をも与えないような犠牲——そのようなものを、イエスは知りたまわないのである。彼にあっては、愛がいたずらに働くということはなく、奉仕が報いなしに捧げられるということもない。

ところがそうなると、われわれのおもわくは、はげしく動き出す。われわれは、次のように言う。「それでは、われわれの態度が、神さまの働きに影響を及ぼすというわけだ。われわれは自分の行ないによって、神さまのたまものにわくをきめるのだ。それならば、われわれの間に一つの序列をきめて、それぞれの行ないにふさわしい地位をきめることはできないものだろうか。」——そこで、ペテロは自分が第一位を占めるのだと考えた。しかし、それは彼だけではない。他の弟子たちも、同じように考えたのである。われわれとても、いったいそれと別の考え方をするだろうか。それゆえにわれわれは、信実な医者を必要とするのである。すなわち、われわれのための神の約束の偉大さをわれわれの貪欲が禍に変えてしまわないように守ってくださる、あの人の心を知りたもうかたを、必要とするのである。

きみが先なる者なのかあるいはあとなる者なのか——そのようなことを語るのは、きみ自身ではない。それを決定するのは、隠された神の判定であって、それは、いっさいがあらわになるあの時に、はじめて明らかになるのである。先なる者があとなる者のところに墜落することもあり得るし、あとなる者が先なる者のところに上がって来ないなどということもありえない。高い才能がわれわれをどのように高いところに引き上げても、そのためにわれわれが罪を免れることもないし、われわれがどのように深い罪に陥っても、神の赦しがそのような罪に対しては無効になるなどということはない。あとなる者の罪や無力は、神の恵みの豊かさの前には消え失せるし、先なる者の虚栄や自尊は、神の真理の光の中では消え失せる。

それでは、われわれは何をなすべきなのだろうか。きみは、みずから自分を測ってはならない。右手がすることを左手に知らせてはならない。神が示してくださるみ心を仰ぎ見る単純な目を、持ち続けなくてはならない。そして、自分を他の人の主にしてはならない。きみは、自分のはかりで量って人にその運命を分け与えることはできない。人はきみのものではなくて、その主を持っているのだということ——そのことを、忘れてはならない。

御父よ。わたしどもは光の中に立っております。それは自分自身を知り、またお互いを知るのがわたしどもではなくて、あなただからです。わたしどもは、あなたが与えてくださる光によって、自分の行為を審くことができ、みことばに示されるままに、奉仕と犠牲を捧げることができます。しかし、正しく審き恵み深く報いたもうのは、ただあなただけです。あなたが、わたしどもを、

て亡びねばならないからである。かれの王国こそ永遠につづく。傷める葦をおることなく、ほのくらい燈心をけすこともせず、めしいは見、みみしいは聞き、あしなえは立ち、おうしの舌はものいい、癩病人はきよめられ、しいたげられたもののうえに福音がなりひびく。このメシヤは、おおくの人にかしずかれるために来るのではなく、かえって多くのものの足をあらい、すべて疲れはてたものの重荷を一身におい、ついには、おのが血をながして、大祭司としての贖罪をまっとうするために、やってくるのである。

かれは、この地上に都をもうけず、王座をもたず、冠もなく、王笏もなく、剱もおびず、戦人もつれず、ただ柔和なロバの子にまたがって、屠り場にひかれる小羊のように、見るべき姿もなく、威厳もなく、悩みと患いと憂いと苦しみをおうために、やってくる。

これが、あなたの王である。

降臨節第二主日の聖想

来たるべき救い

これら事が、おこりはじめたなら、
身をおこし、頭をもたげなさい。
あなたがたの救いが近づいているのだから……。
――ルカ・二一ノ二八――

主のご降臨を待望して、一週間がすぎたが、実際になにができたであろうか？　あるものは、何もできなかったと言うであろうし、あるものは、大いにやれたと言うであろう。だが、われわれはいったい、何をすべきなのか？

主の御降臨を待望する準備は、ただ一二月二五日におこなわれる宗教行事の用意をするということだけではあるまい。その日は、やがて来たり、やがて去ってゆくであろう。そのとき大きな期待が失望といれかわり、はりつめた緊張が倦怠とおきかえられるようなものを、永遠のメシヤの統治と関連させることは困難である。それはいわば、ニワカ芝居の舞台のように仮りそめな、いそいで組みたていそいで取りこわし、あとには何ひとつ残さない、まったく日常性のないものに終るであろう。

なぜ、メシヤの待望さえもが、こうもお祭りさわぎになりやすいのか？　それは、人間という動物が、たれもかれも陽気を愛するからである。では、なぜ、人間は陽気を愛するのか？　陰気がきらいだからである。では、なぜ、陰気がきらいなのか？　死に通ずるからである。では、そのようにして死は、避けられるのか？　いな、死は、かならず来なければならない。ここに、人間のとんでもない誤算があり、わがままがある。かならず、ふたつ一対になっているもの――喜びと悲しみと、健康と病気と、成功と失敗と、利得と損失と、生と死と――このなかから、一方だけを拾って、他方を見まいとする。これは、とんでもない身勝手であり、それはよいとしても、重大な誤算であり、希望的観測である。

来たるべきメシヤの王国は、ユートピアではない。われわれの身勝手なわがままが、そのまま、すっぽりと入れてもらえるようなものではない。彼はかならず来る。だから、われわれに準備せよといわれる。なんの準備をするのか？　人の子のまえに立ちうるよう、絶えず目をさまし、祈れ。その日、その時を、だれも知らない。思いがけぬ時、その日がワナのようにおまえたちを捕える。すなわち彼はおそるべき洞察者であって、われわれがワナをかけて待つ、特定の地点と特定の時点に、やってくるとは限らない。だから、たえず目をさまして、日常に備えしていなければならない。

たえず目をさまして――ということは、決して眠らないということではない。ねむり起き、食い飲み、めとり嫁ぐのは、ただしい日常生活である。目を醒まして――というのは、酔わずに、シラフで生きることである。酔わないとは、人生を陽気な半面だけでツマミ食いしないことである。シラフとは、現実を直視して、最悪の状態にそなえていることである。

降臨節のことば

深津文雄



降臨節第一主日の聖想

来たりたもう平和の王

見よ、あなたの王はあなたの所に来る。
彼は義なる者であって勝利を得、柔和であって、ロバに乗る。
――ゼカリヤ・九ノ九――

ひとがだれも、それと気づかぬ、あわただしい歳末に、教会のなかでは、すこしはやい〈新年〉がやってくる。それは、かれらが、心から愛してやまぬ主イエスの御降臨にそなえして、すべてを新たにして、待つからである。

待つということは、けっしてやさしいことではない。性急なものは、その道理をとびこえて、いっきに結論に達しようと、あせる。しかし、人生すべての重大なことがらには、準備がある。そして、ことの成否は、しばしば、この準備にかけられていることがおおい。だから、本気に待つものは、真剣に準備をする。準備がなければ、待っているとは言えない。

われわれが、いま待ちもうけているものは、いったいだれか？　それは、メシヤであるという。〈こうべに油をそそがれたもの〉、とりもなおさず、王者である。悪しく、強暴な、この世の偽りの王者にならされたわれわれは、王と名のつくすべてのものを排除しようとする。しかし、心から願っているものは、そののちに来る〈神の統治〉――不義なる権力を退け、憐みをもって永遠におさめる――その神の支配の確立と、その実現者としてのメシヤである。

このメシヤは、いつ、どこに現われるか？　かつては、ダビデの家にうまれた、ひとりの嬰児に、これを期待したこともあった。また、残忍なバビロニアをたおして、万民の解放を宣言したキロスに、それを見て歓喜したときもあった。マケドニアから立って、瞬時に世界を統一したアレキサンドロスの若さにこそ、それが望まれると考えたものもあった。シリアの圧政にたえずして、信仰のために剣をとったマカベアの勇士たちに、メシアの出現を期待したこともあった。しかし、それらは、ことごとく、悪しきものにかわる別な悪しきものであり、暴力におきかえられた新しい暴力であって、待ちのぞまれた神の支配とはほど遠いものであった。かくて、義の統治は、一部の空想家の夢とかわり、現実の歴史は、はてしなく繰り返す暴虐の交替にすぎないと考えられたとき、都をさがるベツレヘムの寒村、ひとしらぬ馬小屋に、夜半みばえなく、くだりたもう平和の王があるという。

これを洞察しうるものは、ひとの知恵ではない。王もしらず、博士もしらず、祭司もしらず、旅人もしらず、ただ深夜に醒めて群を守る牧夫たちに、告知するため遣わされる天使だけが知っている。その国はこの世のものではない。剣をもって立つものは、剣をもっ

さい」と言われた彼であってみれば、その和解もなしに、平和の春を待望することは、まったく無意味である。

気づかぬ所をさししめす先駆者に、ふかい感謝を言いあらわし、悔改めにふさわしい実をもって、ご降誕をまつのには、時はまだある。

降臨節第四主日の聖想

かくされた歓喜

わたしの魂は、主をあがめ、
わたしの霊は、救い主なる神をたたえます。
――ルカ・一ノ四六、四七――

主のご降誕はま近にせまった。それは年によって異なるが、今年のように、そのまま降誕祭前夜とかさなってしまいかねない。それほどに近い。主は、すでに戸のそとに、立っておられるのである。

しかし、近いということは、着いているということと、ちがう。もしも、ふたつの電極が密着してしまったなら、火花はおこらない。きわめて近い距離に、ふたつが対峙するとき、はじめて美しい火花がちる。いわば、メシヤを待望するものの信仰の極致が、ここに展開されねばならない。

洗礼者ヨハネは言った。「あなたがたの知らないかたが、あなたがたの中にたっておられる」と。これほど望み、これほど待ち、これほど学びつくされ、これほどわかりきったものが、いま、ここにいたって〈知らないかた〉であるとは、どうしたことか？

かれが、われわれの乞いねがっているものではなく、われわれの憧れもとめているものが、そこに到着していないとすると、それはだれのまちがいであるのか？　われわれは、どうしたらよいのであろうか？

しかし、このおそれは、十分にある。もし、この手違いがありえぬものなら、むかしベツレヘムのすべての扉は、かれのまえに開いたであろうし、かれは、その民から、捨てられはしなかったであろう。いまも、かれを待つものが、みな当てちがいをし、人ちがいをしているとしたら、近づきつつある歓喜は、いったい、どうなるのであろう？　おたがいが、近づきつつあれば、あるだけ、まちがった路線を疾走している恐怖は大きい。

もう一度、われわれは踏みとどまって、胸に手をおき、われわれが待っているかたがだれであるかを、かんがえなおさねばならない。かれの馬槽にかえるに玉座をもってしていないかどうか？　かれの粗布にかえるに紫衣をもってしていないかどうか？　かれの荊冠にかえるに王冠をもってしていないかどうか？　かれが与え仕えるものとして来たのに、それを奪い仕えられるものと、おきかえていないかどうか？

なぜ、人間の希望は失望にかわり、人間の歓喜は悲哀におわりやすいのか？　それは、かれが望んでいるところをかえて目に見えるものとし、かれの仕える歓びをかえて仕えられる幸いとしてしまったからではあるまいか？　かれとともに貧しくあろうとねがうものに、失望はありえない。かれとともに苦しもうとするものに、悲哀はありえない。

「見よ、わたしは主の婢女です」と、ひざまづいて言った聖母に当てはずれということは、一度もおこらなかった。彼女のへりくだった心は、いつも歓喜にみたされた。「わたしは、その靴のひもを解くねうちもない」と告白した洗礼者は、喜んで「わたしは衰えるであろう」と言いえた。われわれは、かれにあう前に、自分はこの人に対してなんであるのか、まず自己決定をしておく必要がある。

「わたしの魂は、主をあがめ……Magnificat anima mea」この香ぐわしい讃歌は、来たるべきものを知りえなくても、その来たるべきものに服従することを誓いえたものの、貧しい心にのみ湧きおこる永遠の歓喜を、言いあらわしたものである。

（ベテスダ奉仕女母の家館長）

メシヤの到来は、最悪の事態を通過してのちはじめて実現する。彼のまえに立ちうるものは、この終末を耐えしのんだものだけである。この世の陽気ぐらしのいっさいが剝奪されて、希望的観測のひとひらも残りなくなったとき、この世紀末的な断末魔と反比例してメシヤの光輝はかがやく。

この、人生の最底辺が天上につりあげられることが、まことの救いであって、この救い主に期待して、なお失望するということは起りえない。望むべくもないときに、望んだからである。

降臨節第三主日の聖想

道ぞなえ

荒野に主の道をそなえ、
砂漠にわれわれの神のために、大路をまっすぐにせよ。
——イザヤ・四〇ノ三——

まもなく主のご到来である。用意万端そなえはできたか——こう叫んでいる声がある。はやくも大王の先ばらいは門前に到着し、われわれの待望の誠実さを点検しはじめた。

お泊りいただくお部屋はこちらでございます。お掃除は最後にいたします。お使いいただく調度はこれとこれ。もう一度よく磨かせます。お風呂ももうわくころ、お食事の用意ももうできておるはず、チョット見てまいりましょう——と言いかけるわれわれをおしとめて、先駆者はするどいまなざしで、言う。

「そとへ出て見たか? みちがヒドク悪いが……」

これは、したり、だが、いまさらスコップを手に、おもてへとびだしているひまはない。そんなことをすれば、大王のご到来に、着かえさえまにあわぬ。第一、みちは自分の所管ではない。平素からくりかえし、たのんでいるのだが、なかなか直してもらえないのである。なさけないことではあるが、いまとなってはいたしかたあるまい。

人間が、自己のなかに閉じこもって、そこをのみ愛し、そこをのみ美しく磨きたてている、そのそとに道がある。塀を高くし、そこは見まいとするが、なんぴとからも隠れることのないもの。困ったものだと当惑しながら、その都度、そこを除けて通ってしまうものが道である。大王がご到来であるというのに、なぜ、その通路をなおそうとしなかったのか? それは、けっして悪意からではない。たんなる見落しである。しかし、そんなに重大で、また明瞭なことを見おとしてしまうという、そこに人間の善意のヒズミがある。

われわれが、せっかくの善意をもって待望しながら、見落されてしまっている重大な準備——それは、道ぞなえである。先駆者は叫ぶ、<主の道をそなえ、その大路をまっすぐにせよ>と。しかし、これは、おおごとである。しかし、平素から、こまったものだと言われながら、なかなか手のつけられなかったこと、それをこの機会に解決すべきではなかろうか? それこそ、大王の到来をめがけて、なすべきことであり、それを逸しては、なされずに終ることではなかろうか?

そのためには、まず、みんなが、自分のカラからぬけだして、大局からいっしょにものを見ることが、ぜひ必要である。そのうえにたって、これはワタシの畑だ、ここを切りとられてはめいわくだと主張しあうことを止め、高いところは削り、低いところは埋め、狭いところは広くし、迂回しているところはまっすぐにしなければならない。あるところでは、崖くずれをとめ、橋もかけねばなるまい。あるところでは、岩根をほり、ダイナマイトで切りくずし、

こうして、人々の悔改めと和解と、協力と慈悲によって、まっすぐな大路が出現し、美しい社会がうまれないかぎり、個々別々な期待と主張のどこに、大王をむかえ、大王をやどすことができよう。

「祭壇に供え物をささげようとする場合、兄弟が自分にたいして何かうらみをいだいていることを、そこで思いだしたなら、その供え物を祭壇の前にのこしておき、まず行って、その兄弟と和解しな

格子の袖の長いシャツを着てさわやかな陽ざしをあびている。気候の変化はささやかなところにも楽しくほほえましく新しく味わえるものだ。十年、二十年もいっしょに毎日同じ仕事をくりかえしている平凡な夫婦生活にも、常にこうした新しいささやかな喜び、楽しみを発見できるはずである。

夫婦生活はこんなものである。ごくささやかなことが大きな意味をもってくる。だからちょっとしたことを注意して発見すべきであり、またそれに喜びを感じるべきなのだ。小さな、つまらないことは小さな意味しかもっていないと考えるなら、たいへんなまちがいである。亀井勝一郎は、「人生の幸福というものはささやかなもので、このささやかなものを愛する人がほんとうに幸福をつかんでいるのだ」といっている。

幸福というものは向こうからやってくるものではない。与えられるものでもない。自分で発見するものであり、創り出すものである。幸福な夫婦、幸福な家庭はどうして発見し、どうして創り出したらいいのだろうか。

結婚

招かれていちばん気持ちのいいものは結婚式、結婚披露であろう。粗末な教会堂から一流の豪華なホテルまで、その外面的華やかさの違いこそあれ、みんな花嫁さんはきれいだし、集まる人たちもそれぞれおしゃれをし、にこにこして、希望にみちたふんいきの中で意義ある新しい門出を祝うことは大いに楽しい。わたしは、よく祝辞をのべさせられるが、相手がちがうのだからたいてい同じことをいう。わたしの好きなシャロッテ・ブロンテのことばをひく。「わたしたちがいっしょにいるということは、仲間同志でいるように楽しいと同時に、たったひとりでいるように自由だ」そして、

「あなたがたはこれからよい夫、よい妻になろうとして、夫のために全部を捧げよう、妻のためにはなんでもしてやろうとけなげな決心をしていることと思うが、そのまたいっぽうに、ひそかにかもしれないが、自分の思う通りの妻にしたい、自分の理想通りの夫にしたいと考えていると思う。しかしどうかおたがいに人格をもったひとりの人間であることを忘れないでほしい。夫婦は一体であり、喜びも悲しみもともにすべきであることはいうまでもないが、自分をその中に没してしまってはいけない。おたがいに相手は自分の半身だと思いこんではいけない。ともにある頼もしさと力強さを十分に感じながら、同時に個人ののびのびとした自由を感じなければいけない」

などと先輩者ぶって偉そうなことを言うのである。しかし、結婚の祝辞というものはいやなもので、あと一時間もすれば新婚旅行に出発するという新郎新婦は上の空できいているだろうし、会場の人たちはいまさらそんな夫婦訓話をきいたってはじまらないというような顔をしているので、話すほうがてれてしまう。それにこんな失敗もやった。わたしの友だちの娘の結婚披露で、なにかひと言いってくれ、なるべく娘をほめてやってくれと頼まれたので、わたしは正直にほんとうのことをいった。

「昨日お母さまから何かひと言H子のことをほめてやってくれと言われましたが、わたしはうそをいうことがきらいなたちですから、ほんとうのことしか言えません。ほめるというより、ありのままのことを言います。H子さんは頭もいいし、近代的センスは十分もっているし、お料理も洋裁も手芸もうまいし、子供はかわいがるし、ほんとうに申し分のない奥さんになると思います。きっとお母さまよりずっといい奥さんになるでしょう」

みんな笑ったし、すみのほうから拍手が起こった。わたしも何気

夫婦論

高見沢潤子

夫婦

家の裏には忘れられたような広い、もと畠やたんぼだった草原がある。緑の色と草のにおいが、仕事に疲れたわたしをよく慰めてくれたが、この夏から埋めたてがはじまった。もう一ヵ月以上、毎日毎日、ダンプカーが、次から次へと土を運んできてはあけてゆき、黄色いブルトーザーがそれをならし、ひろげてゆく。毎日毎日その音がうるさくってやりきれない。しかし、緑の草原がだんだんと土色にぬりつぶされてゆくダイナミックな埋めたて作業をみているのもおもしろい。朝早くから暗くなるまで、いったいいつ昼飯を食べるのかわからないくらい絶えず行きつもどりつ休みなく働きつづけであるが、ブルトーザーは土をならすだけでなく、ダンプカーが埋めたての柔い土にめりこんで動けなくなっているのを後からおして助けてやったりしている。わたしはひょいと、少しはうるさいが、平凡な夫婦生活を思ってほほえんだ。ダンプカーが夫で、ブルトーザーが妻のような気がしたのだ。単調なおもしろくもない仕事のくりかえしではあるが、性格の違った二つの力があわさり、助けあって続けてゆけば、しまいには大きな広い住宅地が創りあげられるのである。

関西には大きな爪跡を残したが、第二室戸台風が通過して、東京も漸く秋風がたち、空気が澄んで涼しくなった。夏の間、赤銅色のたくましい裸体で強い陽の下を運転していたブルトーザーの男も、

がる愛情というものは、何も別居したからといって消えてしまうものではない。かえってアメリカではクリスマスとかイースターとか誕生日だとかには、親類全部よりあったり、親の家に子供たち孫たちが全部集まったり、贈り物を贈ったり、親子の交流や肉身の愛情が深いような気がする。

わたしは、今までアメリカの奥さんは家庭的ではないと思っていた。家事をきらい、子供をうむのをいやがり、育てるのを好まず、外出ばかりしていると思っていた。もちろんこういう奥さんだっているだろう。しかしわたしのみた家庭の奥さんはみなこれと反対であった。ほとんど、中産階級の信仰の厚い堅実な家庭で、たいてい三、四人の子供があったが、家の中できりきりよく働き、子供の勉強をみてやったり、山ほどの洗濯物に片っぱしからアイロンをかけたり、自動車を洗ったりしていた。

アメリカは女の国で、女がいばっていて男が小さくなっているときいていたが、わたしのみた家庭では奥さんがいばるというより、旦那さんが親切でよく奥さんを助けていた。あくまでも家庭は夫婦のもの、家庭を代表するのは夫と妻とふたりだという感じをうけた。キリスト教国アメリカのバックボーンはこうした堅実な信仰の厚い家庭にあると感じて、わたしはうらやましかった。

去年の一一月、ケネディは当選第一声に「妻と私は、今から新政権と――そして新しい赤ん坊のために――準備にとりかかる」と言った。いかにもアメリカらしい卒直な正直な宣言で、わたしはりっぱだと思う。日本の男は、公の政権にまで妻や赤ん坊をもち出してなんて鼻の下の長い男だろうと思うかもしれないが、さもりっぱそうに、「一身をかえりみず、命をかけて」などとうその宣言をするよりずっと気もちがいい。ケネディは自分が大統領に当選したかげに夫人の力があったことを正直にみとめていたし、昔の人が言ったように、「身を修め家を整え国を治める」人なのであろう。

妻をあくまで対等にみ、人格的にみることは幸福な家庭をつくる第一条件である。

理　解

去年の『月刊キリスト』五月号に結婚問題の座談会が出ていたが、おもしろいと思ったのは、劇作家田中澄江さんが、夫の不貞は決して許せないと言っていたことだった。深津さんが、解決策としてやはり最初は許してやったほうがいいと思う、と言っても、頑として「わたしは許せない」と言いきっていた。わたしは澄江さんは田中さんをほんとうに愛してるんだなと思った。自分が愛している男が他の女に関係をもったらほんとうに許せやしない。亀井勝一郎氏は「浮気ばかりしている男も悪夫にちがいないし、家庭の暴君も悪夫にちがいないが、わたしはそれだけで必ずしも責めようとは思わない」と言ってずいぶん男に寛大であるが、わたしは澄江さんと同じように、妻の他に女と関係することは、それが一時的にもせよ、なにか妻に不満があるか、妻に対する愛情がうすくなったのだから、そんな夫といっしょにいることは決して幸福と思えない。妻にも家庭にも十分満足し、十分愛情をもっていながら浮気をするのは、そういう病気なので、問題はちょっとちがってくるが、わたしとしてはやはり許せない。「夫婦は一体であって、神が合わせられたものだから、はなしてはならない」と離婚をいましめている聖書も、不品行でなかったら、と条件をつけて、不品行の場合ならば離婚をみとめている。

「真の性愛は、第三者の介入を嫌悪し、必然的に一夫一婦を要求する。この主体的かかわり合いは、本能的結びつきをこえて、誠実と責任性ということによって保証される。故に結婚は聖なるものであ

ないユーモアが言えたのでちょっと得意だった。ところが翌日その友だちから、あなたはせっかくのきのうの結婚披露宴をぶちこわしてしまったと怒って電話がかかってきた。娘をほめてくれと頼まれたなんてよけいなことを言うから、そのあとでH子の友だちがH子の棚下しをやろうと待ち構えていたのに、それが言えなくなり、つまらないお座なりのことばしか出なかったと苦情を言われたし、拍手をしたのはシャンパンでいいきげんになったわたしの主人だ、おかげでわたしはいい恥をかいた、というのである。わたしはおかしいやら、あきれるやらでちょっと、ことばが出なかったが、とにかくていねいにあやまって電話を切った。たしかにわたしは軽はずみだったかもしれない。しかし、なぜ、軽いユーモアとして笑い流してくれないのだろうか。怒ったわたしの友だちにしろ、悪口を言いそびれたH子の友だちにしろ、案外、まだまだユーモアのわからない女の人が多いのには驚く。だいたい日本人は、結婚式とか講演とかいうと、しかつめらしく固苦しい祝辞や話をしたがる。笑うことは下品だと考えているのだ。笑わせるようなことをいうと威厳にかかわると思っているらしい。アメリカで、偉い聖書学者や神学校校長の講演をきいたが、五千人の聴衆を前にして、ずいぶんユーモアをとばして笑わせた。友だちの電話でわたしは一つの教訓を得た。夫婦生活にはユーモアが必要であるということだ。ユーモアのない夫婦ほどものわかりのわるい夫婦はない。日常生活に小さなユーモアを発見してゆくことは、ささやかなものを愛してゆく気持ちと相通ずるところがあるのだ。

そこへいくと、わたしたち仕事仲間の結婚は型破りが多くて気が楽だ。演劇関係のわたしの友だちの結婚披露は会費をとった。なにからなにまでご当人のふたりが定めて、それぞれの親にも結婚通知を出し、会費をとっていたのには、なにかユーモアを感じて悪い気はしなかった。やはり仕事仲間の結婚式では「ゴケツコンヲシュクス」なんていう電報は一つもない。「ホンパンユキマスハイオメデトウ」「シンコンニフレームインバンザイ」また「ケツコンシテモヤセルナ」はおむこさんがまるまると肥っていた場合だった。

家庭

夫婦というものは妙なものだ。わたしは夫婦ということを考えるといつも、神の偉大さと人間のどうしようもない愚さとを同時に思う。むずかしい人間の男と女が結びついて夫婦になり、家庭を組織する。夫婦生活も家庭生活もむずかしいのはあたりまえである。夫人をとても愛し、うるわしい家庭生活をしたといわれているあの偉大なるルターでさえ、「家庭生活はうまくいっている時は天国のようなものだが、まずくいくと地獄のようなものである」とこぼしている。夫婦だけでもむずかしい場所だから、そこに、舅、姑、親夫婦、息子夫婦などがいっしょに住んだら問題がおきないほうがどうかしている。

わたしはアメリカで三ヵ月の間に三一家庭のお世話になったが、ほとんどが夫婦と子供の家庭であった。老夫婦だけの家庭も五軒ほどあったが、子供たちはみんな別々に世帯をもっていた。寝室や居間に息子や娘や孫たちの写真を飾って、うれしそうに説明してくれた。広い家にたったひとりで暮している老婦人もけっこうひとりの生活を楽しみ、愚知など全然こぼさなかった。「人はその父母をはなれ、ふたりのものは一体となるべきである」と聖書にもあるように、家庭は夫婦ふたりだけでしっかりとささえるべきであり、若夫婦は精神的にも経済的にも独立して、新しい家庭をつくるのが原則だと思う。いろいろな事情で舅や姑といっしょに暮さなければならない場合にも、根本にはこの気持ちが必要である。親子の間につな

夫婦げんかはいうまでもなく、親子げんかも兄弟げんかもするし、怒ったり恨んだりねたんだり泣いたりするものである。ことに夫婦げんかは、第三者からみたらこっけいにしかみえないもので、夫婦げんかをしたことはないという夫婦があったら、彼らには愛情がかけているか、人間性が足りないか、おたがいに相手を知ろうとする情熱がないかである。

ただ、信仰をもっている人の救いは、おたがいに生きる意味を知っていることである。人間の罪を知っていることである。人間は男も女も、夫も妻も、神の前には同じ罪人として謙そんな気持ちで首をたれなければならないことを知っている、つねに感謝し、ざんげすべきことを知っているのだ。自分におかれた位置に意義を見出すことを知っているから、ある程度、その位置がどうにもならないような戦い、束縛、苦しみの場所であっても、あるもの——それはめぐみ、光、希望、価値、自由、選択、なんとでも言えるだろうが——を創造し、発見することができるのである。

ニーチェは「なぜ生きるかを知ってる者はほとんどあらゆる如何に生きるか（状態）にたえうるのだ」と言ったが、ただ苦しみにたえ、がまんをし、現状のままであきらめているというのとは全くちがって、苦しみを楽しみに、悲しみを喜びにかえるところまでいかなくてはいけないのだ。

わたしたちはひとりひとり意味をもって神々に創られたもので、それぞれちがう目的をもってこの世に生まれてきたものだ。自分の生活を、夫婦としての境遇を、なにも他の人と比較する必要はないのである。神より与えられた自分の場を、できるだけ真剣に、希望をもって生きていけばいいのである。どんな仕事でも、夫婦ともに助けあって働き、喜びを創り出し、ささやかな幸福を発見しそれが同時に社会のためにもなるならば、よい夫婦生活と言えるだろう。

夫婦たがいに人格をみとめあい、一個の人間であることを自覚し、欠点の多い、あつれきの多い生活を通しておたがいに成長しようという情熱は必要であるが、その情熱はただ自分たちと自分たちの家庭だけにそそぐべきではない。もちろんまず、自分たち夫婦の幸福を願い、自分たちの家庭の平和を願うだろう。しかし、それだけにとどまらず、その幸福をなんらかの方法で他の人へ分け与えようと考えることが必要である。これは信仰をもつ人が、神への感謝のために、少しの無理もなく実行すべきである。

夫婦間のあふれるばかりの愛を、家庭内のみちみちた平和を外へ、他人へ、社会へ注ぐことができるようになれば、これこそ人間の理想であり、人生の勝利者であろう。

きょうも朝からブルトーザーがうるさく働いている。四、五日前から二台になってますます能率をあげている。ダンプカーは相変わらず次から次へと土をはこんでくる。埋めたては毎日毎日ひろがってゆく。あと一ヵ月もすれば草原は全部埋められて、あちこちにいろいろな設計の新築の家がたてられるだろう。そしてその一軒一軒に、夫婦、娘、息子、犬や猫のいる家庭が、それぞれのちがう形で営まれるだろう。苦労をしたり、楽しんだり、失敗をしたり、心配したりしてそれぞれの人生を生きて行くだろう。しかし、その一つ一つの家庭、ひとりひとりの人間を、みえないところから常にあたたかい目でみ守り、めぐみ、導いてくださる偉大なるかたを、なぜみんなは気がつかないのだろうか。

（劇作家）

（高見沢潤子著『夫婦論』（仮題）女性と生活シリーズ、日本基督教団出版部近刊）

る」

とブルンナーは言っている。

しかし、現実の問題にぶつかると、人間というものは哀れなもので、どこまで人間は知ることができるだろう。わたしたち夫婦のことは本人のわたしたちがいちばんよく知っていることは事実だけれど、「知らぬは亭主ばかりなり」というのも事実である。わたしたちは夫婦だけでなく、親子の間でも兄弟同志でも、ただ自分の知っている限りのところで安心したり、怒ったり、許したり許さなかったりしているのだ。神の目からみたらなんとこっけいなことだろう。

愛しあうということは理解しあうことだ。相手をほんとうに理解するには愛情がなくてはできない。ほんとうに愛しあっているならば、無意識にも理解しあおうという情熱があるはずである。この情熱は恋愛時代にも夫婦になってからもたいせつなものだ。このためにおたがいに絶えざる努力をしなければならない。しかし、前に言ったように理解する、知る、ということには限界があり、愛情というものは、人間によって行なわれるものだから不徹底であり、はかないものだ。そして夫婦生活には幻滅が感じられ、破綻がやってくる。亀井氏は、結婚生活には一種のあきらめが必要で、夫婦破綻を経験しても、それを真剣にみつめる勇気がなくて、けっこうたのしくやっていられる、といっている。実際にはこんな夫婦が多いのかもしれない。グレアム・グリーンのように、「人間は、妻は夫を、恋人は情人を、親は子を決して理解することがないと事実を承認して、他人を理解しようということをやめてしまったほうがいいのではあるまいか」などとも言いたくなる。しかし信仰をもつわたしたちはそんないいかげんな生き方はしたくない。いいかげんなところであきらめの生活をすることは一種の罪である。

「あるところであきらめることで平安をえたくない。あきらめず、すてず、いつまでも追求して、その上でほんとうの平安と満足をえたい」

これは志賀直哉のことばであるが、この愛情と希望を含んだ真剣さは信仰に近い。ある文士が、トルストイが八十にもなって、夫人とうまくゆかなくて家出したのは不思議だと言ったら、ある文壇の大家が「そういう文士は、夫婦げんかをして細君の横面を一つはりたおして、それですべてが終ったように思うだろうが、八十才になっても奥さんと気持ちが合わないということで家出までする。そこが大トルストイが日本の文士なんかとちがうところだ」と言ったそうだ。人生にはこの真剣さが必要なのだ。このだいじな人生を、いいかげんなところで妥協して、自分をごまかして、心からの喜びもなく、希望もなく生きてゆくようなことをしてはならないのだ。といって夫も妻も自分の思い通りに好きなように、生きるためにすぐに離婚をしたり別居したりすべきではないことはわかりきったことである。最近はこんな離婚が多くなって情ないが、トルストイのように特殊な場合はさておき、夫婦というものは、そんなわがままから、別れたりいっしょになったりするものではないのである。人間が思いのままの好きな生活をするとき、必ずそこには戦いがあり、束縛がある。その抵抗を喜んでうけ、喜んで戦い、喜んで束縛されるべきなのである。その戦いを経験しなければ幸福は発見できないし、その戦いを通して人間は成長するのである。

発見とわかちあい

堀田善衛氏は、少年時代に一年ほどアメリカ人の牧師のところにあずけられたが、キリスト教徒にはなれなかった。牧師夫妻の猛烈な動物的な、夫婦げんかをみたからだと言っている。もちろんキリスト教信者だって人間の本能や感情がなくなるわけではないから、

はない。人生観がぐらついて、皇室という考え方についても、全く変わってしまった。非常な煩悶をしたわけです。

そのころ、その学校は、日曜日は早く礼拝をやって、礼拝を終ってから東京市内のどこでも、自分の好きな偉大な牧師のところに行って説教をきくというい き方でした。そこでわたしが行ったのが、内村鑑三先生の衛生会館。当時、内村先生はそこでロマ書の講義をしておられた。それから神田へ行って山室軍平先生の説教をきいたんです。大正一〇年ごろのことです。

そうやって人生を煩悶して聖書を読んでいるときに、たまたまわたしの大伯父が肺病で死にかかっている。わたしは、神保町の松崎という古本屋で内村先生の『来世と復活』という小さい本を買って、それを背のうに入れて、東京から浜松まで無銭旅行をして、こじきのようになって浜松にたどり着いてみると、大伯父は、わたしが行くまえに死んでいた。それで大伯父になんでもかでも読ませたいと思った『来世と復活』という本を、自分でいっしょうけんめい読んだ。そして目を開かれまして、はじめてわたしは信仰するようになった。

それから東京に帰って一〇月の第一日曜日の礼拝の最中に非常な大きな力を受けまして、そしておまえは日本に留まって日本のために働くんだ。こういう天の声をきいた。

そのとき、ちょうどブラジルから輪湖俊五郎というブラジル時報の主筆がきていまして、その人がわたしをブラジルに連れていくというんです。そしてある日、力行会の校長室にきてくれというので、まいりますと、永田校長と輪湖さんがいて、「ブラジルにいってくれ。ブラジルにも移民をしてだいぶ長くなり、たくさんの孤児や、老人や、やもめや、病人、そういう人たちができてきた。だれかがそれを救わなければならぬ。そういう人たちを専門に収容して保護する施設をつくりたい。しかし、これは一生涯を捧げなければならぬ。だからここへきて学生たちと長い間いっしょに生活し探していたが、それができるのはおまえだ。だからブラジルにいってくれ」と頼まれた。ところがわたしはその二週間前に天の声をきいた。「二週間前だったらいったが、実はこうこういうことで非常な力を得た。いまいくことはできません。」こういって断りました。それは残念だけれども、人生の最大のいいことだ。カーライルが「人生最大の幸福は天命を知ることだ」と言った。そう言ってくれまして、それからわたしは力行会の先生になった。

洗濯屋の先生に

どういう先生になるかというと洗濯屋の先生です。その当時、その学校の学生は金がない連中ばかりだった。貧農の子というような連中ですから、外国に行って勉強するにしても、移住して農業をやって金もうけをやるにしても、まともに船賃払っていけないわけです。多くの者が、たとえばサンフランシスコ、あるいはシャトルへ船員になって行きまして、そこで逃げちゃうわけです。そうやって逃げるときに、職業を持っていないと非常にあと困るというんです。それで、なにか職業教育をする必要がある。世界に共通の仕事というと、洗濯屋とパン屋と床屋。「洗濯屋に行って習ってこい。それでここで教えろ。」わたしは洗濯屋に行った。

行って小僧からいっしょうけんめいやっていると、そこへひどい肺病の、むかしの洗濯屋のお弟子さんが流れてきた。だれもきらって、その人を受け入れない。わたしはどうやら信仰を持っておったから、気の毒に思って自分の住んでいた屋根裏の小さいへやにその人を連れて行って、いっしょに寝たわけです。そして、わたしが肺病になりました。当時白十字会―クリスチャンの人たちがみんなで本郷肴町で診療所をやっていた―そこへ行って診てもらった。「だめだ、絶対安静だ。労働はやってはいかん」ということを言い渡された。

しかし、わたしはそのときに順天堂の坂を水道橋のほうに下りながら、「神さまの国の経済はそういうものではない。わたしはお招きをうけている。絶対死なない。」こういう確信を持って、とうとう一日も休まずに労働して、それから半年たって診てもらった。「だいぶよくなった。」そのまま労働し続けたん



＜わが信仰の生涯＞

愛にもとずく政治

――貧しいひとと病めるひとともに生きる――

（衆議院議員）　長谷川　保

ブラジルへ雄飛の夢

長谷川　わたしは浜松商業学校にいるうちから、日本では狭すぎる、もっと広い天地で活躍したいと思い、ブラジルか南洋に行って金持になるつもりでおったんです。それで、商業学校を出ると同時にはいったのが、日本力行会海外学校というところ。そこがキリスト教だったんです。

当時わたしの家がなかなかやかましい皇室中心主義の家でしたから、わたしもそういう考え方で、ヤソ教なんかいいかげんにしておけばいい、ただそこを通っておかんと海外に行くつてがないからというつもりだったんです。ところがそこにはいって三月ばかりやっている間に、わたしは人生がわからなくなってしまいました。金もうけして大成功しようと思っていたが、キリスト教の話をきいたら、どうもそういうことは、人生の大事なことで

ました。後に高倉先生がわざわざ浜松に寄って、わたしにもう一度勉強しろと言ってくれましたが、そうはまいりません。そこで、日基教会浜松伝道所は珍しいものになった。いっぽうではルター、カルヴィニズムによる政治に対する責任、いっぽうでは賀川豊彦さんの考えている消費組合主義による社会改造、これが結びついたわけです。

神さま、土地をください！

ところがそうやっているうちに、消費組合の店―わたしがやっている洗濯屋が店ですが、そこへひとりの年寄りがきまして、サメザメと泣いて事情を訴えた。その人の息子が東京に行って働いていたが、肺病になって帰ってきた。当時肺病といえば、みな死に絶えているときでした。ですから浜松市内で借家をして療養させるが、どこに行っても追い出される。家は貧しい木賃宿のような商人宿です。しかも母親が違う。幼い弟妹がたくさんある。貧乏で家におけない。どこに家を借りても一週間か二週間、せいぜい三週間もすると追い出される。転々として追われてまわって、浜松市内にとうとう行くところがなくなって、しまいには無住の寺にはいったが、そこも追い出された。そしておじいさんは、この子の五尺のからだを天地の間に入れてやるところがないと言って泣くわけです。

それでわれわれ青年たちが、この人をわれわれのところにつれて帰ろう。わたしたちはそのとき浜松市内広沢町というところに、一千坪の土地を借りて花を作り、その畑の一角にバラックをつくって、合宿して協同組合運動をやり、教会の伝道をやっていたわけです。浜松の教会というのは、みんな労働者なんです。みんなが財布をはたいて五〇円の金をつくって、そのバラックの一部分を病室につくりかえて、そこへその人を入れた。

そうすると、同じような肺病の人が四人集まって、しかもそのうちのひとりが大喀血をした。その喀血した血を畑のまん中の野だめに捨てた。わたしはそれが衛生にいちばんいいと思って捨てたわけです。たまたま隣の地主が見ていて、文句を言ってきた。「おまえたちは花を作るというから、土地を貸してやった。いつのまにか肺病患者をつれてきている。肺病患者を出すか、それともおまえたちが出るか。」それでみんな相談して、この患者を出せば自殺する。しかたがないからわれわれが出ようということで、患者をつれて次のところに行った。

お寺の境内の山を借りて、家を建てて移るときになって、また檀家から追い出された。それから、その次に土地を借りてそこへ移った。そのときには金もなにもなくて、みんなひどい生活をしたわけです。はきものを買う金がなくて、はだしで働く。消費組合のほうはうまくいかん。肺病のほうは貧乏人ばかりですから、患者の残飯を煮返して食べながら看病する。

ところがそういう人たちが、たちまち二三人も集まった。それで、また迫害が起こる。惨憺たる迫害。わたしは迫害する人たちに会って、「わたしどもは人道のためにやっているんだ。金もうけにやっているわけではないのだ。この人たちは、われわれが出せば自殺するほかないんだ。どうかかんべんしてくれ」と言って戦い抜いた。しかし、通路に杭を打ったり、あらゆる迫害を食いながら五年間がんばったが、どうしようもなくて、出ていくよりしょうがない。毎晩祈禱会をやって、「神さま、どうぞ土地をください」というお祈りをした。

「貧しい結核患者の楽園」

たまたま賀川豊彦先生が、ルーズヴェルトの招きを受けて、アメリカに行っておりました。いわゆるニューディールのときですね。賀川先生に手紙を書いて、「アメリカで金集めてください」と言ってやった。ところが、先生から「アメリカに金もらいにきたのじゃない、アメリカを救いにきたんだから、きみたちの請いに応ずるわけにいかん」という返事がきた。

それでしかたがない、毎日また祈っておりました。そして、賀川豊彦先生がアメリカから帰ってきて、「東京に出て来い」といってきたので、上京していって、いろいろ話をした。そうすると賀川先生がきいていて、「そ

です。
それから関東大震災があり、わたしは徴兵で軍隊に行った。それが大正一二年一二月。その一月まえに、植村正久先生から浜松で洗礼を受けた。そして一年志願兵で軍隊にはいって出るまでわたしはけんかです。「軍隊は女郎屋といっしょに人間の汚辱だ」と言ったんです。社会主義を少しかじっていましたから、平和主義、社会主義、キリスト教をもちだして、はじめからけんかして、まさに軍法会議にかけられ、陸軍監獄にほうり込まれるところまでやった。

そして、軍隊を出る直前にわたしは友人とふたりで、社会事業をやろうという決意をした。軍隊を出て東京に出てまいりまして、もう一度洗濯屋に通って、そして聖隷社という洗濯屋をはじめました。「その洗濯屋でもうけた金で、はじめは孤児と老人を養なう仕事をやろう」とそう考えたが、洗濯屋を離れて農場をつくりまして、実際はそこでいちばん先に肺病人の世話、腸結核のひどい患者の世話、行き倒れ人の世話、気違いの女の人の世話、こういうことをやった。

ところが、まだ洗濯屋の確立しないうちに、それをはじめたために、経済的にうまくいかないで、ついに二つに分けて、わたしは洗濯屋をやった。

青年共産同盟へ参加

そのころ、いまの日本キリスト教団の前身、日本キリスト教会浜松伝道所の伝道がはじまったわけです。そこへ行っておったんです。ところが日本楽器のストライキ——これは日本の労働運動史上、非常に重要なストライキです。このストライキが半年も続きまして、労使双方とも暴力化して、職工側はもうくたくたになってしまった。そのときに、浜松の教会全部が集まりまして祈祷会をやって、ついにその争議のあっせんに出るということになった。ところが、席上いろいろ議論した結果、ストライキをやる労働者は悪いという結論になった。そこでわたしは憤然として席を立って、いったい聖書のどこにそういうようなことを書いてあるかということで、ついに教会を去った。そして、行ったところが青年共産同盟。そこで、共産党の労働運動と政治運動をはじめたんです。

そして、まもなくわたしは日本青年共産同盟の常任中央執行委員になった。そして、やっておりましたが、すでにわたしの中にはいっていたキリスト教が、理論的にどうしてもあらゆる点で矛盾を感ずるんです。それは主に人間の問題です。たまたまある秋の日に、その日本青年共産同盟の幹部が集まって、ピクニックに行き、その帰途、ミカン畑でしたか、そのミカンをみんな争ってとったわけです。それでわたしは断じて許せぬ。労働者、農民が汗を流して作ったものをきみたちが盗む、この共産党のリーダーたちがそういうことをするなら、いつの日にいったい理想の社会がくるか。その利己主義というものを破壊しなければ、理想社会はこないんだということで大論争をしまして、ついに共産党を脱し、ふたたびキリスト教に帰ってきたんです。

帰ってきたときに、浜松の教会はほとんどつぶれてしまい、牧師も去っていました。若い者はみなわたしとともに共産党にはいっていました。それで東京神学社から夏休みの間、派遣されて伝道にきていたのが小塩力さん。小塩さんは教会を離れていたわたしの家にわざわざ飯を食いに来るんです。彼はなにも言わない。それで飯だけ食いに来る。それでわたしはいきづまって、いま言ったような状態でしたから、よし、教会にはいろうということになって、教会にはいった。それでわたしはこれはいかん、徹底的に一度勉強する必要があるというので、東京神学社にはいりました。

神学校へ入学

編集部　事業は一時おやめになって……。

長谷川　仕事はほかの人に頼んで……。東京神学社のそのときの先生は、高倉徳太郎先生。そこで、高倉先生についてカルヴィン、カルヴィニズムの勉強をしたんです。

ところが、一年ばかり勉強している間に、わたしが残してきた洗濯屋が、まだはじめたときの借金があるにもかかわらず、任せてきた人が軍隊にとられてしまった。それでわたしは帰らざるを得なくなって、休学して帰り

堂の維持費、四分の一をもって教職の生活費、四分の一をもって教会の中にいる貧しい人人、四分の一をもって教会の外および他国から流れてきた貧しい人々を救うことに使うということが書いてあるんですね。

またアカチュースという監督の話をカルヴィンがききまして、自分の教区の農夫が戦争になって捕虜につれていかれてしまう。あるいは飢え死にするというときに、教会のいろんな金の祭の道具を、とかしたり売ったりして、そして捕虜を買い返したり、飢え死にする人を救ったりした話がある。

それをある人々が非難をしたら、われらの神は食いも飲みもしたまわない。食いも飲みもしたまわないものが金の器を要するか。イエスは黄金を持って弟子たちを伝道におつかわしにならなかった。黄金なくして伝道におつかわしになったものが、黄金を必要とするであろうか。貧しき人々を教会堂より愛さなければならぬ。

ちょうどわたしどもの教会堂の近くは町のまん中で、当時防空壕を掘りたいが材料がないというときだった。昭和二〇年です。礼拝のあとで総会を開いて、ここにこう書いてある。この教会堂は近所の人々の、防空壕の材料に上げようじゃないかという話をした。それが満場一致で可決されました。みなで教会堂を崩しまして、大きな横穴の防空壕をつくった。その次の日に大空襲をうけまして、そして、五〇キロ爆弾がその付近に雨あられと落とされ、たくさんの人が死んだ。防空壕にはいっていた人も死んだ。ところがうちの教会堂でつくった防空壕は、すごく太い材料を使ってある。その中に五十何人はいっていたが、ひとりも死ななかった。その中に松本牧師親子もいた。だからほんとうに神さまの奇蹟はある。

三重苦の日本を救おう

敗戦したときに、わたしは一週間祈りました。そして日本をどうやって復興したらいいかということを考えた。そして修道院をつくった、その教会のみんなで。それはこういう修道院です。「日本が復興するまでわれわれはいっさいの報酬を求めない。これからの日本は、おそらくたいへんなことになるだろう。そのたいへんな日本の中で、おそらくいちばん先に飢え死にするのは、孤児や肺病患者、気違い、ばか、こういう人たちだろう。なんとしてもそれを助けようじゃないか。また日本の国民を励まして復興しようじゃないか。」

そしてちょうどわたしは、そのときにドイツのディアコニッセ運動のフィルム二巻を持っていた。一つは「街頭の十字架」という映画、一つは「ものいう手」という映画。後者はおしで、つんぼで、めくらであるという三重苦の捨てられた子供をディアコニッセの人人が拾ってきて、りっぱに教育し抜いて一人前の人間にするという記録映画。それを背負って、落胆失望している町々村々を、キリスト教の説教をしながら回って歩いた。「日本はちょうどいまめくらで、おしで、つんぼみたいになっている。しかし立ち上がれるじゃないか。ここに記録映画がある。デンマーク、スエーデンはどうして立ち上がったか」。

たまたまそのころ厚生省で「人口の約一割、六百万は昭和二〇年から二一年にかけて飢え死にする」という話をきいた。それで、これはもうこのままにしておけん。どうしても救わなければならぬということになって、そして教会が集まって相談をして、政治で救おうということになった。たまたま国会が解散されて、昭和二一年の四月に戦後第一回の総選挙が行なわれることになった。今までの救国運動がそのまま選挙運動に変わって、教会で推されてわたしは立候補した。そしてあの付近でわたしは最高点で当選した。

生活保護法の制定

それで国会に出てきて心血を注いだのは、生活保護法制定です。わたしは社会党の代表で、生活保護委員としてひとりで奮闘した。とにかく六百万の飢え死にを救った。それから第二回目の昭和二二年の総選挙に、街頭演説にはじめて出ようとして、しきいをまたぐときに、ラジオで追放されたことを知った。

なぜ追放されたかというと、戦時中に三方ヵ原村というのは―いま浜松市三方ヵ原町ですが、航空通信隊だとか、爆撃隊だとかができて、木をみな切られて雨が降ると大洪水に

れはおもしろい、きみたちのやっていることは、そのまま小説になる。ぼくに金はないが、まもなくイエスの友会というぼくのやっている団体の全国大会をやる。それに来て話をしてみろ、そうすると道が開けるかもしれぬ。」その夏御殿場で開かれたイエスの友会で話をして、議長の杉山元治郎先生の提案で、わたしどもが新しい土地を買うための一坪献金運動というのをやるということが決議されて、全国イエスの友会から土地を買う金が、当時千五、六百円だったと思うんですが、集まった。その金にさらに借金をして、現在の三方ヵ原の土地二万一千坪を買った。そして苦心惨憺して、そこへ引っ越しました。

かくして引っ越したんですが、賀川豊彦先生が、よせばいいのに主婦の友の記者に、「浜松に行ってみろ、すばらしいキリスト教青年たちの肺病救済運動がある」という話をされ、それが昭和一二年ですが、主婦の友に載ったわけですよ。せっかく、かくして引っ越したのがばれてしまって、また迫害が起こって、また惨憺たる結果になりましたよ。そして、もうせいもこんも尽き果てた。ことにその雑誌を見て、全国いたるところから肺病患者が来るわけです。「貧しい結核患者の楽園、浜松市外三方ヵ原聖隷保養農園」というキャッチフレーズでしょう。驚いたことには、当時主婦の友というのはよく売れていたので、南洋諸島から来る、樺太から来る、満州から来る、朝鮮から来る。それでこんどはまたひどい貧乏になってしまいましてね。

その連中は浜松に来るだけの汽車賃持ってくるでしょう。そして玄関に坐り込んで帰らないですよね。もう入れるところがないと言っても帰らない。強いて断われば、自殺すると言う。しょうがないから入れてしまう。

天皇陛下のお墨つき

全く困ってしまいまして、昭和一四年の暮になって、もう全く借金だらけで、米を買いに行くところも、野菜や魚を買いに行くところもない。親類、友人ことごとく返すあてのない借金をしている。わたしは二週間も飯を食わないということになりまして、一二月の二四日の夜になって、刀折れ矢尽きて、家内とふたりで相談をして、このままやっていると、逆に患者を飢え死にさせるからやめようということになりまして、涙のお祈りをした。「長い間無一物のわたしどもが、たくさんの貧しい患者をお世話して、そのほとんど全部の人が信仰を得、あるいは天に帰った。そのことを深く感謝をします。しかしここに来て、もう明日の米もありません。もう幾日もそういう日が続いている。神さまがここでやめろということだと考えます。やめるよりほかに道がなくなってしまいました、ここでやめます。」涙のお祈りをして立ち上がって二時間ばかりすると、村の駐在所の巡査が自転車で来まして、「明日九時までに県庁に出てくれ。」「そうですか、なんですか。」「なんだかよくわかりません。そういう電話が県庁からありました。」それからまた三時間ばかりするとまた巡査がきて「明日は必ず九時までに県庁に出てくれ。」また夜中に巡査が走ってきて、「礼服を着て出てくるようにという電話があった」という。

次の朝、親戚に行って着物を借りて県庁に行ってみました。そうすると係官が、「たいへんだ、ご下賜金だ。」「どなたからのご下賜金ですか。」「天皇陛下のご下賜金だ。」そこでご下賜金五千円を下付されまして、いまの金にすると百五十万円か二百万円という金でしょう。包みのうえに天皇陛下と書いてありました。それで一〇年続いた迫害がなくなった。それから、ようやく仕事が軌道にのりまして、ことに天皇陛下のご下賜金だったものですから、浜松市長や警察署長が協力しまして、はじめて病院らしいりっぱな建物を建てました。それからご承知の戦争がひどくなった。

教会堂を防空壕に

いよいよ空襲がはじまる。わたしどもは浜松市松城町というところに小さい教会堂を建てていた。カルヴィンのキリスト教綱要第四編に、貧しい者よりも教会堂を愛してはいけないという実例がたくさん書いてある。そして、いまの教会というのはまちがっている。それは初代の教会というものは収入はだいたい四つに分けて、その四分の一をもって教会

ニッセは外に出ていって、ほんとうに困っている貧乏な人たちを助けたり、病院で働いたりしています。いま最大の働き場は社会福祉法人十字の園。これは、日本ではじめての、病気を持った老人を収容する、老人ホームです。いま三一名います。そのうち三分の二は、相当の病気を持っている。さらにその半分、つまり一〇名ばかりが、いびたれでおむつでいっさいをやっている。これは厚生省でもこの間見て、日本で一つきりの仕事だろうということです。

つまり病気を持った老人たちは、一般の老人ホームでは受け入れないわけです。しかし、これこそかわいそうな人たちです。それゆえに、ほかで受け入れない人々を、キリスト教徒の手でやるということでやっております。

また教会では、さらに労働者のための労働福音学校を毎年、これで五、六年やっております。それから、そのほかに看護婦ミッションというものをやって、准看護婦学園をやって、これは定員四〇名。ここで看護婦に対する伝道、クリスチャンの看護婦をつくる。こういうふうな仕事が全部総合されて、一つの有機体となっているわけですね。この事実を見ますと、いま教会の伝道がなかなか進まないということがいっぽうではあり、またいっぽうでは社会的責任を負うべきだという考え方が非常に世界的に強くなっておりますが、それにたいする一つの示唆であると思う。わたしども教会は種まきからはじめて二五年か三〇年の間に、無一物の者たちが集まってどこからもほとんど援助を受けないで、いちばん最初だけ植村先生のやっておられた伝道会社の応援をちょっと受けましたが、あとは全く独立。それで二五年、三〇年の間に東海教区随一の教会をつくりあげたんですから。

ひとりの人を大事にする政治

編集部　先生が当面、国会でやろうとしていらっしゃることはどういうことですか。

長谷川　いまは予算委員をしております。しかし、わたしの専門は社会保障制度で、わたしは民主主義の政治は、ひとりの生命をほんとうに大事にすることだというキリスト教の信念に立っています。わたしが政治に出ている限りは、いつもそのことの実現のために努力しています。

編集部　やはり予算関係とか、自民党との関係とか、なかなか思った通りには通らないのでしょうか。

長谷川　資本主義社会というものは、社会保障というものを徹底してやらないもので す。やはり、日本を支配しているものは大資本。大資本は資本主義の法則に従って動いているのであって、ひとりの人をほんとうに大事にするということを動機にして動いているのではありません。利潤追求ということが、いっさいの政策の動機なんです。また同様に、それが根本になりますから、日本の政治は資本主義であるかぎり、ほんとうの民主主義にならない。なるほど社会保障制度をわれわれ戦って徐々に前進させていますが、しかし、われわれに言わせれば、ある程度のごまかし的なものにしかすぎないと思いますね。だから、これをほんとうにひとりの人間が、全世界よりも尊いんだという考え方にかえるということは、容易なことではありません。

しかし、アメリカにまいりましても、あるいはイギリスにまいりましても、デンマーク、スエーデン、イタリア、ドイツにまいりましても、その点はよほど違いますよ。同じ資本主義でも北欧、西欧などは必ずしも資本主義ともいい切れないでしょう。アメリカでも、実体は必ずしも資本主義とはいい切れませんね。資本主義と社会主義との合いの子のようです。社会保障なんかもなかなか徹底していま す。その点はやはり人間観の相違じゃないでしょうか。やはり、わたしは根本的には宗教の違いだと思いますね。非常にひとりの人を大事にするという、聖書から出てくる、そういうものが、やはり日本国民にはほんとうに理解されないというところに、根本があるんじゃないか。だから資本主義の悪いところは、世界の歴史の大勢に押されてずいぶん変わってきておりますが、根本はなかなかそう変わらんところがあるんじゃないでしょうかね。

なる。高台ですよ。その三方ヶ原が洪水になってしまう。農家の半分以上が浸水し、畑は冠水して、ジャガイモ、サツマイモは腐ってしまう。それを救うために村長がきて、これを救うのはあなたよりほかにないから—わたしは赤だといって、そのころきらわれていたが—と無理やり頼まれて、村の翼壮団長になった。そこで、在郷軍人や青年を動員して、村で大きな排水路をつくった。三本大きなのをつくることにして、まず一本掘った。そのお尻が部隊にはいった。部隊にも排水路がある。測量すると地形上そこへはいらざるを得ない。わたしのほうは部隊の排水路の四倍の大きさがある。それで大雨が降ると、わたしどものほうからいった水が部隊に氾濫する。そこでわたしは、憲兵隊に捕まった。それにも屈せず、あくまで議論して、わたしのほうが勝った。これ以上掘ってはいかんということで釈放された。それで、とにかく村の洪水は救われたんです。いまでも村の人は喜んでいますが……。それでわたしは、その翼壮団長をやっただけで追放された。

　しかし、この追放が、わたしにとってはまたありがたい。それまでは貧しい肺病患者を養なって、もう惨憺たる貧乏をした。ところが生活保護法をつくった。貧乏のどん底の肺病患者は、とにかく国でみることになった。ですから、国から診療費がくる。いっぽう、わたしのところは先に修道院をつくって、みんな無報酬だ。だから金が余っちゃう。

　それで、次から次へと病院のりっぱなものをつくって、たくさんの患者を入れた。そして、都築正雄という東大教授—日赤中央病院長で、原爆患者を診た—が海軍少将か中将ですから、当時東大教授を追放された。それを頼んできて、わたしは昭和二五年に結核は外科治療になると見抜いて、都築さんが三年間毎月通ってきまして、わたしの病院は静岡県でいちばんいい結核外科治療の病院になった。そしてたくさんの人を助けた。

　その間に教会もどんどん大きくなっていって、東海教区でいちばん大きい教会になってしまった。それから昭和二六年に追放解除になって、静岡県知事選に急に出て、落選をして、次の昭和二七年の総選挙からずっと五回続けてやってきたんです。

神の栄光のために生きる

　でも、わたしの信念というのは、キリスト教というものの真理は、イエス・キリストが十字架にかかってわれわれの罪のために死にたもうた。これを信じて受け入れるということだけで、われわれの救いは完全である。われわれが永遠の道を賜わることはまちがいない。それは、いっさいの人間のわざによらない。それだから、その神の恵みを受けたら、神の恵みによって新たに生まれたものは、いっさいを神の栄光のために生きるべきだ。これは教会の中だけではない。社会生活、政治生活、学問、経済生活、いっさいのものを神の栄光のためにしなければならぬという考え方。したがって、そこではわれわれの負いゆくものは愛である。それがわたしが政治をやり、社会事業をいまなおいっしょうけんめいやっている理由です。

　そのことがわたしの属しているいまの遠州教会というものを、われわれ微力な労働青年だけが集まって、東海教区最大のものにした理由であるとわたしは考えている。これはわたしだけの力でやったわけではありません。これは松本美実牧師はじめみんなでやったんです。みんな同じ考え方でやったし、いまも同じ考え方です。

　いまは結核の病院のほうが三三〇ベッド、さらにいま一億ばかりで、総合病院を浜松市に建築中です。そのほかに結核のアフターケアをやり、いま三一、三人を収容しています。それから保育園。病院の看護婦さんたちの子供をはじめ、母子所帯のおかあさんが肺病になったという子供を集めている。あるいは、付近の貧農の子供たちが、農繁期によく野だめに落ちて死にます。そのために、その子供たちを収容する農繁期托児所。

　そのほかにディアコニッセの浜松母の家をつくって、そして日本人のディアコニッセを養成している。ドイツからもディアコニッセの人がひとりきている。そしてこのディアコ

第四には、失敗や罪に対して悔改めるという、まじめな宗教心がないでしょう。

第五には、弥次、喜多両人に個性がない、人格がない。この作品では、弥次さんが喜多さんになっても、喜多さんが弥次さんになっても、さしつかえない。生きた人間としての個性がないから、何を言っても責任をもてない人間です。すなわち、あってもなくてもよい人間で、ただこっけいな話にそえた人形であります。

第六には、このふたりの失敗は、色気と食い気との二つであります。本能的な下品なことのみに関する失敗であります。人間のもっている美しい面における失敗は、この作品からは見られません。

第七に、弥次さんと喜多さんとは、お江戸日本橋から大阪まで、なんのためにゆくのか。物見遊山の旅ですが、どうしてもこれをしなければ、きょうのおまんまが、たべられないという、使命とか、生きる意味とか、これによって生きるという信条をもって、旅をしているのではありません。

ですから、生きた人生の切実さを書いてないゆえ、ほんとうにおもしろくはありません。もっとも徳川幕府のきゅうくつな社会から、ぬけ出すための、ため息をつく、その効果は当時としては、あったのでしょうし、現在も底辺に生きる人々をこっけいによってひとときの間、救う気安めを与えることに役立ちはしましょう。けれどもだれも、これによって、生きる力は与えられません。

わたしが、これをくどくどしく書きましたのは、「信じて生きること」が、人間のあたりまえの生きかたであって、その軌道からはずれると、とんでもないまちがいがおこることを、極端な比較によって、知っていただきたかったからです。

2 貴重な自分

山本有三の『路傍の石』に出てくる主人公の名は吾一です。先生が彼に、おまえという人間は世界にたったひとりしかないぞ、吾一とは、世界に吾れただひとりしかいないというわけだ、という意味を話すところがありますが、わたしはこれを映画で見て、たいへん感じたことがありました。

生物学の上から考えても、何十億の精子と何十万の卵子の中から選ばれて、ここに自分が生まれ出ている。わたしはこれを偶然だとは、思えない。そうして自分が、ともかくも人間として生きている。この生きているわたしは、自分を信じて生きるくふうをしているわたしである。

そのくふうは、本能的に自分をかわいがっている。自分を守るくふうをしている。同時にまちがった生き方をしないようにと考えもし、努力もしている。

ひと言で言えば、自分を大事にして生きているわけである。ところが、自分の中に、自分に調子を合わす自分と、自分の言い分に従わない自分、言いなりになるやつと、そうでなくて、自分に命令しかかる自分とがあることがわかる。

「おまえは偶然の産物だぞ。おさるから進化したんだぞ、さるまねをしろ、酒をのめ、はしたないことをやれ、かまやしないぞ。偉そうなことを言ったってけっきょくは欲の皮のつっぱった人間だ、おていさいはやめてしまえ。人にめいわくをかけず、自分もしたいことをしておればそれでよいじゃないか、人間の寿命の平均が六五になろうが七〇になろうが、どうせ死ぬんだ。『食うて寝て牛にならばや桃の花』これがいちばん楽じゃないか。」と、こういうような声が内から、聞こえてくる。

その声に従うと、立っていた自分が、どたと倒れて横になって寝ころんでいるような感じになる。すこし言いすぎるかもしれないが、ぶたみたいにドブの中で、ゆったりと寝て、そのままあたりのものを食っているように思われて、なんとなしにはりあいのない自分、自分でないような自分だと感ずるようになるのです。

「ちがうんだぞ。おまえは二十数億の世界の



＜キリスト教のいろは＞　＜第一一回＞

信じて生きること

島村亀鶴

1　軌道からはずれると……

信じて生きること、

何を信じて生きる、自分か、他人か、神さまか、それをどう信ずるのか？

何も信じないでも生きられるのじゃありませんか？といわれるかもしれない。

信じないでも生きられる。それはそうでしょうが、何かを、だれかを、信じないでは、生きられない。自分だけを信じて、他の人を信じないでいると、きちがいになります。松沢病院には、そういう人がたくさんいます。これらの人は、自分さえもどこにあるか、知らないかもしれません。

人生というものは、どうにでも生きられるものです。しかし、あたりまえな（当然な）生き方と、そうでない不自然な生き方とがあります。

人を信じまた神を信じて生きるということは、人間の長い歴史から得た知恵ですし、これが、あたりまえの生き方です。ことさらに我を張って、不自然な生き方をする必要はありません。不自然な生き方には、どことなく危なげがあり、人間としてのほんとうの味わいがなくなります。

ある古本を読んでいますと、東海道五十三次の道中旅行の弥次さん喜多さんのことが出ていました。チャンバラ映画で今日でも喝采を博していますが、あれははじめから、終りまで、コッケイで通しています。

この『膝栗毛』を書いた十返舎一九は死ぬとき、棺の中に花火を仕掛けておいて、焼けるトタンに花火がばくはつし、人々をアッと言わせたそうで、その辞世の歌は

この世をばどりやおいとまに線香のけむり
となりてハイさようなら

というのでした。

ずいぶん人生を茶化し、人を食った俗物であったようです。

彼の書いた弥次郎兵衛と喜多八の、人生道中記は、江戸から大阪までの間を、おもしろおかしく、過ごしています。しかしこれは表面、おもしろく書いてありますが、ちっとも、ほんとうにおもしろくないところが、いくつもあります。

なぜかと言いますと、この人生道中は、不自然、あたりまえでないからであります。

何があたりまえでないかと言いますと、第一に笑いばかりの道中であるからです。

曽我廼家五郎氏が、人間はオギャアと泣いて出て、死ぬときも泣き別れをする。生まれて死ぬるまでの間も悲しいことばかりで、泣いている。この泣いている人間を笑わせるのは、むずかしいことです、と言ったとか。

人生は泣いてばかりいるわけでもないが、それかといって、膝栗毛のように笑ってばかりはおられない。第二に、まじめなこと、義憤を感ずること、道徳的なところが欠けていますでしょう。第三には、ほんとに人を愛する情が、しみじみ出ていない、ことに犠牲などは、弥次、喜多両人の中から出てきていないのです。

でした。

これは同じ地上に住んでいる者は、みな同じ神を信仰している兄弟であるとの、信仰に基づいての行為です。美しい社会生活がこうして行なわれていたのです。

わたしの知っているひとりの牧師の話ですが、その教会の会堂をたてるとき、献金の予約をしていた青年がなくなった、ところがその親友が、自分の結婚費を半分ぐらい減らして、あとの半分をなくなった友人の献金として捧げたとのことでした。

わたしはキリスト者の友情は、天までつづいている、死んだ者も、今こちらで生きているわたしたちも、同じく兄弟である。その信仰によって生きる姿の美しさを、しみじみと感じありがたいことだと思ったのです。

4　ともに生きる場所

キリストを信じているわたしたちは、バラバラで生きているのではありません。信仰のセンターと同時に、生活のセンターとして、教会をもっています。

教会は救われて、キリストを信じて生きる者の道場です。学校です。キリストの召集を受けた者の集会です。これは悪とたたかう兵隊の兵営でもあり、また傷ついた人の野戦病院でもあります。また暗い世に対しては、黄金の燈台でもあります。

聖書には、信仰者のことを、羊といっています。羊は群生して生活することを好みます。群れをはずれると、迷える羊になります。

無教会を唱える人があります。それでも集会をしているようで、指導者もあり、定期に集まりをしているようです。「無教会という教会」であるといってよいかもしれません。いずれにせよ、ともに祈り、ともに学び、ともに神をさんびし、ともに神のために働くことは、人間の情であり、キリストの命令でもあります。

それから勝手気ままに、信じているというのでなく、すべての人がいっしょに信じている、それも現在の世界の人だけでなく、二千年の人々が、同じ信仰を告白している、そういう信仰告白というものを、教会はもっているのです。

信仰告白をギリシャ語でホモ・ロギヤ、ラテン語でコンフェシｮといいますが、両方ともに意味は、「ともに言う」で、異口同音に告白するわけです。

それは神につき、キリストにつき、聖霊につき、教会、救い、などのことについて、わたしたちはこう信じますと、聖書を基礎として内容を定めて、告白しているわけです。これは二千年も前の基督教会の人々から、現在まで伝わっているもので、いわば基督教会の合いことばといってよいでしょう。

みなさんが聖書を全部読むのはむずかしいでしょう。そのとき聖書の要約はなにかと問われますと、信仰告白、ことに使徒信条をみますと、信仰の中心がわかります。

次に正しい信仰と、まちがった信仰とを区別する尺度となり、伝道するための共同の基盤ともなり、また洗礼を授けるときの規準となり、信者の信仰生活を訓練するためにも、信仰告白はたいせつな役目をしているわけです。

戦争の最中に、キリスト教の信仰はなんであるか、それを示せ、と軍部が文部省を通して要求したとき、教団から使徒信条を提出しました。それには「生ける者と死ねる者をさばくためにキリストが、再び来たりたもう」の一句がありました。

「天皇をもキリストが審判するのか」と軍部や文部省の人が問うたらどうするか、「審判する」と答えよう。それで牢へぶち込まれてもかまわぬと、当事者が言ったことを覚えています。

教会は神のことばを保ち、これをみずから生活し、これを伝えるためにある。あなたがともにここで信じて生きることを会得されますように。

（次回は**「これまでの総まとめ」**）

人間のうちで、たったひとりしかないんだよ。ばかでもチョンでもよい。おまえは神さまに選ばれて出て来た人間だ。すべき仕事、おまえがこの世ですべきことがあるから生まれたのだ。おまえが助けなければ、親切なことばと顔を見せてやらねばならぬ人があるのだ。それがたったひとりでもよい、おまえはその人のために、神から使わされているのだ。

おまえはいくら損をしても、やってはならぬことがあるんだぞ。いくら恥ずかしくてもわるいことをして隠してはいけないぞ、すぐ悔改めるんだよ。いくら我をはってもだめだよ、聖書の言い分に絶対に従わねば、それがどんなに苦しくても、そうすべきだぞ！」

こういうように高飛車に自分を、おさえかかる声があるんですね。なにくそと反抗するんだが、いつもその声に従わないと、自分が追究されるのです。

わたしは数年前に、北海道の野付牛、いまの北見市にゆきました。伝道を終ってから、唐笠何蝶先生がその主宰する「阿寒」誌の人人といっしょに、わたしを馬市見物につれて行ってくださったことがありました。はじめて馬市を見て、二十句ばかりつくったのでしたが、

神の眼をぬすみ馬市見て来たり

というのがその中にあります。これは北海道へ伝道に来て、おまえは馬市を見ているのか！　という声が、時々わたしの心にひびきましたので、そのときの実感をそのまま句にしてみたのです。

ともかくも、この自分は神の子だ、選ばれて生きている。わるいことをしては神さまに申しわけない、神を信じて生きる自分を大事にしなければならぬ、とこういうようになりますと、生き甲斐を感ずる自分になり、これがほんとの自分だ、まともな自分だと信じられるようになります。自分のえこひいきや、うぬぼれでなく、わたしたちはみな、こういうふうに思うのではないでしょうか。

わたしはその意味から言いまして、人間は偽善がまともで、偽悪はウソだと思います。神がある以上、偽善がほんとうの人間のたどる道であろうと思うのです。偽善を志すことは、悲しいこと（原罪のゆえに）ですが、偽悪は、偽善よりも神に遠い。偽善を志すうちに、うそから出たまこと、真善が生まれてくるのです。これは神が善でいましたもうという信仰が土台になっていて、はじめていわれることですけれども。

3　他人の値うち

自分を大事にする人、自分の人格を大事に考える人は、他人の値うちをたいせつにする。

民主主義の根本は、人格の尊重にありますが、他の人格の価値を知らない人が、どうして民主主義を行なえましょうか。

自分も他人も同様、神の子だと信ずることによって、民主主義を高めていくことができましょう。

他人を見たら泥棒と思い、この餓鬼、こん畜生などと考えていては、とても信じて生きる社会はききません。兄弟は他人のはじまり、金銭は親子でも他人、こんなような考えが社会に通用していては楽々と生きられません。

信を失っては、お互に生きてゆけません。

自分も他人も、世界の人は、みな神によって生まれてきている、兄弟であるとわたしたちは、信じています。

前大戦のとき、中立国のアルメニヤ人が虐殺されたことがありました。そのときこれに同情し、義憤したグラットストーンは、「これはわが兄弟のことではないか」と叫んで、英国の議会を動かして、救援しました。

神を父と信じ、世界の人々は兄弟であるとの信仰に生きているからこそ、グラットストーンは、そのように叫んだのでした。

みなさんは有名なミレーの落穂拾いの画をご承知でしょう。あれは旧約聖書のレビ記一九章九〜一〇にある教えを描いたもので、田畑の収穫のとき、麦でもブドウでも、全部を刈り取って自分の家にもっていかない。その一部をわざと残して、貧しい人やヤモメたちの食料に供えよとの、神の命令に従ったもの



＜信仰に生きる　11＞

傷つけど、ここに泉あり

——傷病兵と生きる一婦人の心——

明るい午さがり

秋の午後の陽ざしは明るい。それが二一六坪のこの家の隅から隅までを包んでいる。明るい照り返しを受けた屋内では、そんな秋の空気と陽の光をひっそりと味わっているかのように、何人かの男女が黙々と仕事の手を動かしている。

中央のやや広い作業場では、二〇名ほどの人が、積み上げられた印刷物を、各自が二つ折りにして、何やら宣伝用のリーフレットにしている。配布されるばかりになったそれが一枚一枚、それぞれの人の横脇に重ねられていく。二〇名ほどの人が、静かに、機械のようにそれを続けている。かすれ合う紙のひそやかな音、手の動き、陽の光……単調な、けだるい眠気がやってきそうな午後だ。だが、そこには、一種ふしぎな空気がただよっている。けだるい単調さとは、たまたまここをのぞいた人がつかのまに抱く単なる感じにすぎない。外から見ては単調とも思える、休みなく続けられるその動きには、少し目をとめるならば、思いがけない真剣さがこめられていることがわかるからだ。

そう言えば、三〇分もそこに立っていてもほとんど私語する者はいない。黙々と続くのは、機械のように正確な手の動き、紙の音、

観光ブーム

　敬天荘なんてウヤウヤシイのがあるからそんな気になったのだろうが、別府にある旅館の名まえを、もし順に説教題につけたとすると、ざっと四、五年はゆうに種切れにならないのではないかと思う。教会の隣りも前も旅館だ。また最近すぐ近くに鉄筋四階の旅テルとやらが完成した。まだあちこち大ホテルが目下新築中である。それらすべての旅館やデラックスなホテルの部屋、また名所旧跡めぐりの貸切りバスは、来年の正月休みの分まで、九月半ばですでに全部予約ズミだという。これを観光ブームというのだろう。暇と金のある人がこんなにも多いのかと驚く。しかしみんな無理してるんだなって気になってくる。最近は積立方式で安く行ける団体観光が多くなってきたので、旅に出かけやすくなったいっぽう、かなり無理をして出かける人が多いのではなかろうか。

　今も隣りの旅館で手拍子よろしく「アリガタヤ、アリガタヤ、アリガタヤ、アリガタヤ、金がなければくよくよします……」とうたっているのが聞えるが、察するに観光ブームに乗せられている人たちは、帰宅後の金のくめんに心を使いながら酒を飲んでいるのかもわからない。歴史の危険な曲り角のかもし出す不安ムードに包まれた、うすっぺらな観光ブームをみながら、どこかで何かが狂っているように思うのは、わたしだけではないだろう。みんな行くからわたしもボクもと、けなげな思いで出かける人々の心の底には、案外虚無感が潜んでいるのではなかろうか。



　七月に京都にいる、わたしのおばあちゃんがなんとか会のご老人たちといっしょにやって来た。関西汽船の瀬戸内海観光便で来るというので、その夜、桟橋に出迎えた。そこでわたしはまったく困惑してしまったのである。というのは、なんとか会の人たちは皆おそろいの老人くさいユカタを着こんで降りてきたからだ。おばあさんが多いのだが、同じものを着ておられては、みんなの顔が同じに見えても仕方がない。目を皿のようにして探しながら、いた、いたと近づくと似ているようでちがう。わたしは、そのうちに疲れてしまった。

　が、ありがたいことに、わたしの短気の爆発する前におばあちゃんが悠々と現われたのである。しかも、おばあちゃんは、ふたりの友とともにちゃんと洋服を着てでだ。ヤレヤレ。ところがその後、わたしはおばあちゃんの友人ふたりに（そのひとりはかつてわたしが二十余年隣りに住んでいた隣りのおばさんであり、もうひとりはおばあちゃんのお姉さんだが）、わたしがあまりりっぱになっていたので（？）、ホテルのボーイにまちがえられたというフロクがついたのである。わたしは苦笑しながら観光ブームにはどこかに非人格化の傾向が潜んでいるのではないかと牧師くさくもひとり思ったりした。

　レジャー時代の観光といってもほとんどの場合、それぞれの地方の隠れたよいところは見逃がして行くようにと仕組まれた、お定まりのコースをバスでつっ走って、ああシンドということで終る。スピード時代にふさわしいといえばそれまでだが、小学生の見学ではないのだから、ここらで何か一くふうあっていい。いや、一億総白痴化体制の下では、こんなのがいちばんお手ごろなのかもわからない。

　だが、せめて「なんでも見てやろう」ぐらいの心臓で観光したいものだ。たとい金がなくても自分なりに収穫のある観光を。でなければ、観光旅行も旅の疲れという新しい重荷を買いに出かける浪費に過ぎなくなってしまわないだろうか。

（西村幸郎・別府野口教会牧師）



（婦人服部―甘いおしゃべりはない）

たずして、ついにその＜大事業＞にたえられず、みずから命を絶った作家が戦後あった。だが、ここには、そのようななげきをだれよりも深く身に負いながら、しかもその＜息もたえだえの大事業＞を果敢に生きぬいている人びとの群れがいるのだ。ここにみなぎるものは、生きることのひたむきさであり、同時にたたかいつつ活路を見いだしている者たちのもつ明るさなのだ。

　どこに、どんな悲しみがあったか。どこにどんな絶望があったか。どこに意味なく捨て置かれた人生があったか――いま、貧しい不完全な身を、せいいっぱい動かして、きょうのささやかな生産をよろこぶこのところに、人間をほろぼすどんななげきがあるのだろう。すでにひとつの＜大事業＞を克服しつつある者たちが、生きることのひとときひとときに、くみとるささやかな満足のほかに、どんな理想的な生きかたがあるというのだろう。

　すべてが透明に静まっている秋の午さがり――明るい陽の光、二一六坪のこの家と、この家の住人を包むみちたりたよろこび……

隠れた胸の思い

　羽山和江さんは、ときどき、家のなかを見まわるともなしに歩きながら、深い感慨に沈むことがある。ありきたりの感傷などではない。文字どおり、一日一日の＜大事業＞に打ちかってきた、長いたたかいと忍耐の、人知れぬ思いである。女の身でなにができるか……そんなことで、現実はどれだけ変わるか……羽山さんに向けられた批難や嘲笑は数多かった。それも、世間の人たちだけでなく、なにより生きる重さに打ちひしがれた、あの傷ついた人たちがそう言ったのだ。なかには、なんと言われようとも、テコでも動こうとしない人さえあった。

「おれたちはネ、あっさりと世間から捨てられたからには、もうけっして他人さまの親切ごかしのおなさけはいただくまいと思ってるのだよ。大の男といっちゃナンだが、まあ大の男であるおれたちが、なにもいまさらおまえさんみたいな人のおなさけにすがらなくたって……」

　大腿部両足切断、片目義眼の元軍人が、片いっぽうの目を白く光らせて、ふてくされたように言いもした。

「先生には、わたしの気持ちなんかわかりはしないんだわ。生活さえよければいいってものじゃないの。結婚だってしたいわ、自分の家庭を持ってみたいわ……」

　左足を小児マヒでやられているある若い女性は、そう言って涙を隠すようにして羽山さんに背を向けた。金輪際、自分の胸のうちは開いて見せまいとするように……。

　だが、さまざまの批難、中傷、不信、嘲笑、裏切りの重なりのなかで、羽山さんがそうい

秋の空気、午後の陽ざし……

ふと、だれかが席を立った。用をたしに部屋を出るらしい。だが、作業台を離れて二、三歩前へ動いたその姿は、大きく不安定に揺れて、板張りの床に冷たい足音を響かせる。犠足――仕事の器用さに反して、数倍もの努力を顔にあらわしながら、それが引きずられていくのだ。

しかし、だれひとりふり返るわけではない。好奇の目を向けるわけでもない。すべてが、なにごともなかったように、静かに黙々と…

気がつけば、すわって仕事を続けている者も、何人か足でない足を持った者、腰から下が力なくしおれてしまっている者、松葉づえを作業台の下に置いている者――この人たちは、一様に傷ついているのだ。

隣りの作業室では、布切れの間に埋もれるようにして床にすわりこんだ四、五人の人たちが、ここもハサミの音だけを時折りさせて静かに紳士服を製作中だ。しかし、部屋の隅に置かれたアイロンを取るためには、そこまで両手ではって行く者、ときどき口を曲げるようにして、不器用に針の手を動かしている者――その奥隣りの小さな作業場では、ふたりの青年が、机に向かってなにやら一心に刻んでいる。五センチ角ほどの白い木片が、ノミの手早い動きで見る見る削られ、そしてきれいに細工されたブローチができ上がる。彩色されて、裏側にピンをつければ完成品だ。彫刻のたくみさといい、スピードといい、相当の熟練した技術にちがいない。

だが、そのひとりの青年は、自由になるのは両手だけ、歩行はあまり自由ではない。もうひとりの青年は、全身が脳性マヒでおかされている。わずかに自由になる右手だけでノミを持ち、小さな木片を押さえて細工をほどこす。このふたりに、いったい時間というものがあるのかどうか、ただコツコツと木切れをきざみつけるまま、まさにわき目もふらずの真剣さだ。

中庭をへだてた別棟の作業場からは、なにやら打ちつけるかん高い音がする。広い作業場のなかは、材料や完成品が山と積まれ、そして、その一角で、五、六人の男たちが、これも一言もなく作業中だ。最近よく売れる新型の謄写印刷機の組立てだが、それを各自できるところにしたがって組立て段階を受け持ち、分業式に協力して製品を仕上げているのだ。ここだけは、クギを打ちつけるツチの音、ネジを取りつける金属と金属のふれ合う音など、ほかにないにぎやかさはあるのだが、しかし、ここもまた真剣な共同作業――そしていすに腰かけている男たちは、いずれもしなびた足を投げ出したり、動きの悪い手に木工具をにぎっているのだ。

（松葉づえついてアイロンかけ）



窓ごしに、まだうつむいたまま彫り続けている「木彫工芸部」のふたりが見える。その向こうには、リーフレットの折りを同じ調子でやっている「簡易作業部」の人たち――この人たちは、残らず傷ついているのだ。

だが、ここにあるのは、なんという真剣さだろう。各人が身にあまる運命の重荷を負いながら、ここにはまたなんという静かなおちつきと明るさがあることだろう。

＜生きている事、生きている事、ああ、それは、何という息もたえだえの大事業であろうか＞

そう自分の作品に書きつけてから数年もた

人としての不幸の意識——そう言ったらキザだろうか。しかし、なんとなく、人生の暗さ、わびしさに身を包まれて、その日その日を格別の期待なしに生きている羽山さんには、それだけに、自分の不幸に負けたくない、なんとかして人並に生きることによろこびを感じていきたいという思いが強く燃え上がるのだった。

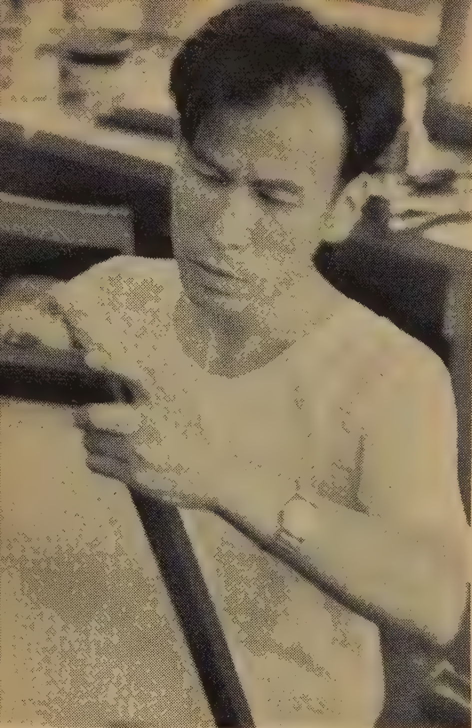
「さっそく教会へ行って、信者になってくれ」

息を引きとるまでそう言い続けた父親のことばが、今になって羽山さんを動かした。

〈自分だけの不幸な思いに沈んでいないで教会へ行ってみよう。そして、自分と同じ不幸な人のために何かをしよう……」

若い女の身で、不自由な身を引きずって外出する苦しさも忍ばなければならなかった。人一倍の時間をかけて、杉並若林町の自宅から、渋谷宮益坂にある**キリスト教会**へはじめてでかけた。

「人のためになりたい気持ちもたいせつです。しかし、まずあなた自身が、しっかりとした生きる土台を見つけておかないと、どんなことをやっても、砂の上に家を立てる人のようなものです。あなたは自分の人生をしっかりとした岩の上に建てることがたいせつです。つまり信仰によって生きるということ……」



（謄写印刷器の念入りな組立）

出てきた牧師は羽山さんの純な願いよりも羽山さん自身の尊さを説くのだった。

だが、こんなあるにかいなき身の、どこにぜひ生きなければならないほどの積極的な理由があるというのか。治療は限界に達し、この動かない不具の身が自分の一生の運命となりつつあるとき、どうしてこんな自分が生き続けることに意味があるのか。今は、善意をもって不幸な人のために働きたいという思い以外、ほかになにものも信じられないではないか……ときには、身もだえするようないらだちが羽山さんの身内を切り裂いた。

そんな教会生活の明け暮れがあったある日——羽山さんの目が新約聖書の中ほどのページにぴたりと吸い寄せられた。

《人をみな偽り者とすとも、神を真実(まこと)とすべし》

そのころはまだ、文語の聖書が読まれていた。そのなかのロマ書三章四節のことばだった。

真実——不幸を身に負い、なげきを噛みしめ、暗中を七転八倒する者に、新約聖書全体にくり返し説かれる、深い愛に裏打ちされた神の真実は、どんなに慰めに満ちた光であったろう。

人はパンだけで生きる者ではない——そうキリストは言った。まさしく、パンだけではないのだ。生きた人間そのものへ深くくい入る生きた愛……人を生かす力があるとすればそれ以外にはないのではないか……

真実一路

真実一路——思えば長い歩みではあった。

う人たちに言えることは、つねにひとつだった。それは、言ってみれば、あなたの＜息もたえだえの大事業＞は、またわたしにとってもそっくり同じ形で＜大事業＞であるということだ。それゆえに、たえだえであっても、この息を、このいのちを、たやすことがあってはならないということだ。

今になって、この家と、この事業の起こりについて羽山さんにたずねる人はきっとこう言う。「やはりキリストの精神で、身体障害者のためにつくそうという決心でおはじめになったわけですか？」と。

しかし、もしそうであったなら、羽山さんのはたらきは白い目や冷たい背を向けられたままであったろう。そして、多くの傷ついた者たちが互いにいたわり合って、きょうを生きているこの家も生まれはしなかったろう。

大きな業績やはたらきの底には、つねにただひとつの単純な理由がある。羽山さんは美しい理由づけはしない。身体障害者収容授産施設「泉の家」はどうして生まれたか？ それはどのような風雪にたえて育ってきたか？ 答えはひとつだ。「わたしも自分の体が不自由だったから……」

宿命を負って

昭和八年三月九日、と、それはもう一生を決定したほどのできごとだから、よくおぼえている。それは羽山さんの第一三回誕生日だった。前日、女学校の学期末試験が終って、解放されたうれしい日であるはずだった。

その朝、誕生日のお祝いを当てこんで、胸はずませて起きると、ノドが妙に痛かった。頭がクラクラして、また床に伏してしまった。熱をはかると、水銀線が四〇度の目盛をこえていた。エソ性ジフテリア――千人に一人も助からないと言われた悪性の病気だった。

一ヵ月後、ようやく死の峠はこえた。しかし、高熱のためか、もうそのときは、羽山さんの運動機能は破壊されてしまっていた。右手はほとんど動かず、左足も歩行不能に近かった。

「これは、一時的なショックで起こったマヒですから、そうですね、年ごろになるころには直るでしょう――」

医師の一言は、羽山さんには大きな慰めでありささえでもあった。幼い心で、その〝年ごろ〟を待つうちはよかった。問題は、それがいよいよ羽山さんの身におとずれたときだった。一七才、一八才、一九才――いろいろ加えられる治療の手もむなしく、羽山さんの体に残された傷はそのままだった。

＜わたしは、もうこれっきりで、直らないのかもしれない……＞

そんな思いがジワジワと胸にきた。このことを、本人以上にさとっていたのは両親であったろう。昭和一四年に、軍人だった父が病床で死んだ。キリスト教を外国の宗教として受けつけなかったこの人が、最後の遺言でこう言った。

「キリスト教など信ずるのはまちがっていると思って、おまえのために人がすすめてくれてもわしは許さなかったが、これはわしのまちがいだった。わしはおまえになにも残してやれん。そのかわりに信仰を財産としてこれから進んでくれ……」

こうして、羽山さんの心の旅路ははじまったのだった。そこには、不自由なわが娘に寄せる母の愛もあった。それは羽山さんにも身にしみてわかった。しかし、それだけでは満足できない世界が羽山さんの心には開けていたのだ。



（左手だけでブローチの彫刻）



（製作品も販売する小店も隣接）

人泉会の設立、そして、障害者のホームであるだけでなく、積極的に一般障害者の職業更生施設となる必要から、三二年一二月には社会福祉法人の認可を受け、同時に泉会授産所としての発足、設備の拡張、男子寮、女子寮の建築……このめまぐるしい歩みを次々とたどってみても、羽山さんの胸にある数多くの思い出を言いつくすことはできまい。この歩みを外から見れば、それは輝かしい発展の跡を示している。しかし、羽山さんの歩みは、けっして安易なものではなかった。人知れず涙とともにふみしめたイバラの道であったのだ。

しかし、それもいまはすべてよしである。傷痍軍人の多くは更生した。いまは全国から来た五〇名近くの一般障害者が、それぞれの力にしたがって、それぞれの生産にたずさわっている。ひとりひとりは、それぞれの社会の片隅で、生きる手だてなく身を隠していた者たちだ。それがいま、自分の手でものを作り、自分の手で細々と暮していけるよろこびを味わっているのだ。

七転八起よ、幸あれ

秋の午後の陽ざしは明るい。それが、四一五坪の敷地に並ぶ三つの建物を、まるでいつくしむかのように静かに包む。いずれもささやかながら、作業所、収容室(男子・女子寮)相談室、食堂、浴場、ホールのどれもが、ささやかなりにきょうをよろこんでいる。そして、紳士服部、婦人服部、手工芸部、木彫工芸部、簡易作業部のいずれかに属するひとりひとりは、それぞれ動かしがたい各自のわくづけられた人生を背負いながら、それでもみずからの手できょうを生きぬいている。

自分の手で生きるということのなんでもないことが、どんなに魅力あるよろこばしいことであるか、そして、どんな悲しみやなげきがあったとしても、それに負けず、それとたたかって、この生を生きぬくということが、どんなに苦しくもすばらしいものであるかをこの人たちは知っている。羽山さんの胸にくる感慨はそれだ。みんな、みんな、せいいっぱい生きている。せいいっぱいのところで、みんなが無言ではげまし合ってきょうをともにしている……

かつて、生活に疲れきって、しかたなしにその日その日を生きている女がいた。あすになんの期待もなく、きょうもまた家事に必要な水を汲みに、のろのろと泉のほとりへやってきた――

≪イエスは女に答えて言われた、「この水を飲む者はだれでも、またかわくであろう。しかし、わたしが与える水を飲む者は、いつまでも、かわくことがないばかりか、わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠の命に至る水が、わきあがるであろう」≫（ヨハネによる福音書四章一三、一四節）

羽山さんは、この家を「泉の家」と名づけた。パンだけではダメのように、ただの水であってはならないのだ。かわくことのない命の水こそ、すべての傷ついた者たちの心を真にうるおすのだから……

日曜になると、午前中、羽山さんは、施設長である上に牧師さんになる。むしろ、それのほうが、羽山さんの本来の姿かもしれない

自分がつねに真実であり続けたという意味ではない。羽山さんを生かし、守り、導き、こんにち、この家をあらしめたおかた——イエス・キリストの父なる神こそ、むかしもいまも変わりなく生きてはたらく、そのことをいうのだ。それをいま、しみじみと身に実感するがゆえに、この家を、たまさかの暇をみては隅々まで歩くたび、羽山さんは深い感慨に沈むのだ。

あの牧師——浅野順一氏——から洗礼を受け、終戦直前から直後にかけて神学校に学び、そこを卒業した羽山さんは、キリストの愛を人びとに説く伝道者として、もう一度新しく〈不幸な人たち〉のもとへ向かったのだった。そのためには、ある社会施設で、ケース・ワーカーとして五年間の修練を積んだ。そして、その経験をもとに、いよいよ羽山さんが素手で立ち上がったのが昭和二八年、それが現在の世田谷区大蔵町の「泉の家」の出発となった。

そのころ、大蔵町のその付近には、元陸軍病院であった国立大蔵病院のほか、大ぜいの傷痍軍人が住みついている厚生園とよばれる一角があった。それは、なんの保障もなくほうり出され、わずかに街頭や車内募金によって命を保っている白衣の人がひしめいている忘れられた一角だった。人づてにこの場所を聞いた羽山さんは、男ばかりがやたらに多いそこをおとずれたのだ。実情を知るため、少しの歩行でも痛み出す体を引きずっては、二回、三回と通った。

いらぬおセッカイ、女のくせにナマイキだ——いろいろな白眼視のなかを、ひとりひとりのフトコロにとび込むようにして、彼らの胸奥深く隠された悩み苦しみに耳を傾けた。そして、互いの共感は他の共感をよび、こうして自然に更生相談所開設の事業となった。

相談所 —といっても、大蔵病院の一室を一時借用してのものであった——が設けられてから、まもなくのことであったろうか、厚生園内にあった共同ぶろが経済上の行きづまりから閉鎖となった。困った人々は、一〇分ほど離れた銭湯まで通わねばならなかった。しかし、障害者にとって、その一〇分は普通人の倍ほどの距離をもっていた。銭湯でもいい顔はしなかった。犠足ばかりが数本、脱衣場に並ぶ風景も、つらかったのはむしろ障害者自身だった。この肩身のせまい入浴を、なんとか解決したい——えんりょ気がねなく、ゆっくりできる小さなおふろ——この願いの先頭に立った羽山さんは、ついに、そのころ手をのべてくれるようになった後援者たちにその資金調達を訴えた。しかも、ちょうどそのころ、借間で開いていた相談所が、期限つきで立退きという事態に追いこまれた。浴場設置運動は、反転して、浴場と相談所を合わせた障害者の家設立の夢となった。

——ここまでが「泉の家」誕生のいきさつだ。そして、これからのちに、ずいぶんいろいろなことがあった。困難な土地購入の終ったのが三〇年一一月、翌三一年には、財団法

本を読みましょう

——求道者のために——

ベルリン事件や核実験再開など最近のニュースは容易ならぬ事態の切迫を伝えています。こういう時代の中で、キリスト者であるとはどういうことなのかをひしひしと考えさせられるきょうこのごろです。

そういうとき、ボンヘッファーの『現代信仰問答』（新教出版社・一〇〇円）は、わたしたちに非常に大きなそして深い示唆を与えてくれます。著者はナチ抬頭の初めから、その悪魔的性格を指摘して警告するほどみことばに照した時代の動きに鋭敏でした。その著者がナチ政府のさまざまな圧迫のもとにありながら、「この危機の時代の中で、キリスト教信仰とは今日なにを意味するか」を確かめようと書いた第二信仰問答と、学窓を巣立ったばかりのころ、北ベルリンの貧民街で受け持たされた五〇名の粗野な少年たちと、生活をともにしながら、その一つ一つの魂にふれて、対話をかわそうとした試みの中から生み出した第一信仰問答の二つから本書はできています。



この本を読んで圧倒されることは、全巻に脈打っている伝統的な福音主義教会の信仰告白の精神の豊かさと壮大さとです。著者はその鋭い感覚でとらえた時代の危機の種々相に対して、福音主義教会の信仰がいかに適切に、力強く答え得るかを示してくれます。

これに比べて瀬尾要造氏の『放蕩息子』（昌美出版・一二〇円）はまことにあっさりとした内容のものです。イエスの例話を一四ほど集めて講解したものですが、ことさらふりかぶったかまえも、新しい思想もないかわり、淡々と語る要を得た講解に、いつか読者もまきこまれて、あの古きよき時代の敬虔な雰囲気にひたされてしまう本です。このそうぞうしい、テンポの早い時代にあって、いっぽうにこういう本の持つ価値をも見直してゆく必要があるようにも思われます。

脳の腫瘍で夭折した竹脇真理君の日記と書簡を編集した『勇ましく高尚な生涯』（いのちのことば社・一三〇円）は、竹脇君が高校の聖研で導かれ、父の不慮の死という事件に耐えたのち、みずから病に倒れて召されるまでの日記が主としてのっていますが、同君の罪との戦い、伝道への意欲などいかにも水々しい少年の心の動きがわたしたちを魅了してくれます。しかし、難を言えば、後半にはいるに従って、いろいろのことが固定した考えで見られるようになり、同時に同君の人となりも、告白されるキリストそのかたも十分出て来なくなることです。同君の負った重荷を思えば同情に耐えませんが高校時代に伝道といい、信仰ということをあまりに狭く、そして高い調子でうたい上げることの是非についても考えさせられることがあります。同君のよき、熱き信仰に学ぶとともに、この点についても、家庭で読書会をして話し合うことも有益でしょう。

以上の三冊はそれぞれ異なった信仰の傾向を現わしておりますが最後に紹介する石島三郎氏の『山上の垂訓』（日基教団出版部・二〇〇円）は、こうした信仰上の多様性が豊かに一つにされている実例を見ることができるうれしい本の一つです。第一部は石島氏の神学的講解、第二部は石島氏と信徒たちとの聖句ごとの座談会で、座談会の出席者はその都度、教会も年令も職業も違う人々が選ばれています。座談会は石島氏の巧妙な司会である程度自由に、それぞれその人となりを現わして、話し合いが進められてゆきますが、同じことばにくい違った理解をしながら一致してると満足している人や、自分の言いたいことだけ言って人のことばは別段受け入れたとも思えない人などもはいって、真に多様です。しかし読み進むうちに、その中のだれひとり、この交わりにおいて、否定されていないことに気づかされます。皆がそれなりに信仰に生かされている実例がそこにあるのです。そしてそれを与えるものこそ、第一部の講解をささえている、神の恩寵の自由への信仰にあるということができましょう。

（尾藤秀房・日基教団 向河原教会伝道師）

が。しかし、羽山さんには本来も非本来もありはしない。羽山和江その人が、一丸となってすべてのものにぶつかるのだ。いっさいの作業を終えた日曜の朝、羽山さんの口からは心のこもった澄んだ声がはずみながら出る。その若々しい聖書の話には、この人を生かしているあの命の泉が、脈々とあふれているようだ。

五時半、作業終了のベルが鳴る。松葉づえの者、そうでない者、各人が明るい顔でじつにのびのびと食堂へやってくる。ここでは、かつてどれだけせまくしたかしれない肩身が自由に解放されて、どれほどの明るさがあることだろう。

外部団体との接渉はすべて羽山さんの役だから、あまりこの家におちついているわけにはいかない。みんなといっしょに食事をとることもめずらしい。その羽山さんが、不自由なしぐさで食器をとり、左手ではしを使う。歩くところを見ても、いままた食事する姿を見ても、おや、こんなに悪かったのかと思うほど障害の重さが目につく。一キロも歩くと、足の痛みがひどくなるというこの人は、きょうは朝から資金繰りのため出歩いていたはずだ。どんな疲労がこの人の体にのしかかっているかしれない。だが、その顔には、はっとするほど美しい微笑が浮かんでいる。脳性マヒで全身をおかされている二〇才になるA君が、アテトーゼ（不随意運動）に体を動かされながら、満面笑いを浮かべてゆっくり言う。

「ぜんぜい(先生)、ぎょうがえってぎまじた。ありがどあんした」

この家にはいってまもないA君は、ホームシックにかかって、ちょっといなかの家に行ってきたというのだ。

「そう、よかったわね、たのしかった? またしっかりおやんなさいね」

「あい、わがりまじだ……」

そこには、母と子のようなあたたかいものがあった。

そのむかし、羽山さんが女学校一年のとき支那事変で負傷した傷痍軍人が、もの乞いのようにゴムひもなど売っている姿を見て「もしか、わたしが大きくなったら、こういう人のために一生をなくして、安心して暮せる家を作ってあげたい」と作文に書いたことを、羽山さんはいまになって意味深く思い起こすらしい。そのささやかな夢は、みずからの血と涙のもとに、いまこうしたあたたかい家庭として実現しているのだ。そこには、人がみな味わう恋のよろこびも、結婚のしあわせもない。しかし、ここには、それ以上のものがある。自分の人生を、ただ一回の人生を、淳く受けとって、負けずおごらずひたむきに生きている人の姿が……

たいせつなことは、自分で自分を捨てないということだ。どんなことがあっても自分で自分の人生に、見切りをつけないということだ。そして、さらにたいせつなことは、見切りをつけたい人生を新しく生きるよろこびで満たしてくれる《命の泉》がきょうもわきあふれているということだ。

この家の応接室の壁に、目をむいたダルマがすっくと起き上がった絵を入れた色紙が一枚かかっている。そして、そこには筆太にこう書き添えてあった。いわく、「七転八起」と。

それは、どこまでも「七転八起」なのであって、けっして「七転八倒」ではなかった。



（この道ははるけくも——応接室で）

するけど、相手が国鉄ともなると、キセルの問題など、罪悪感がピンとこない。

金木　キセルをかえってハナにかけて、じまんばなししている。(笑) うちの若いものなんか、ひとの学割りもらって使ったり。

倉持　わたし、洋裁学校へ行ってたころ、卒業した一年前の友だちから、学生証をもう一枚つくってくれって、たのまれました。映画みるのにも不自由だからって。親友なんで、感情を害するのイヤでしたけど、ことわりました。もし見つかったら、その友だちがかわいそうですから……。



石島　しかし、そのとき、いちばんピンときたのは、バレたら自分がこまる、という気持ちじゃないの？(笑)

倉持　ええ、ほんとはそうですね。

笈川　わたし、心配なんです、良心的に考えますと。うちの娘たちなど、平気で、おたがいにパスを使いあっています。わたしたちの子供のころは、ケジメがきびしかったですが、このごろは、わるいことをするの平気みたいですね。

石島　小さなこと、いちいち、とやこう言うことはないかもしれないが、その小さなことが、大きな汚職やワイロにつながるとなると、ちょっとこわいな。

金木　いつも、「われ聖なれば、なんじらも聖なれ」ということばを思います。どんな小さなことでも、まっすぐ正しくやってゆけと教えられますね。

現代気質(かたぎ)

笈川　わたしのウチでは、日曜日に、みんな教会へ行きたがるんです、だれかがルス番しなきゃならないのに。ふだんいそがしい母親をだしてあげようって気持ちになってくれないんですね。

石島　それは、めずらしい。ふつうなら、ルス番志願のほうが多い。ルス番して、テレビでも見たほうがいいってんで。(笑)

笈川　もうすこし、こっちのことを考えてくれても、と思いますね。T先生が、よく、友のためにいのちをすてる、ということをきくと感激しながら、母親からトウフ買ってきてとたのまれるとイヤだと言う、とおっしゃいますが、そんなところですね。

高木　よく、オヤジに、教会へ行ってるのになんだ、と言われます。むかしの人と、ぼくらとは考えがちがうし、さらに、ぼくらのあとの人たちはまたちがう。母親がおカズ買ってきてというと、それはおかあさんの仕事だから、おかあさんがやればいい、というふうに、判断の基準がちがってる。

金木　すべて、そうなってる感じがします。うちのものたちでも、自分はこれだけ配達すればそれでいいとか、女中は、わたしの仕事は、これだけ、といったふうに。

石島　むしろ、それがいいんじゃないかな。だいじなのは、根本的に、正しいこと・まちがったことへの感覚の問題でしょう。

節(せつ)をまもる

石島　戦後だったか、ヤミのものを食べずに死んだ判事のかたがありましたね。

高木　先日、うちの教会の高校生たちと話しあいましたら、いっぽうでは、ヤミをしないで死んだ人はりっぱだと言う。ところが、ある人は――死んじまったんじゃ意味ない。そのときはヤミを食ってでも生きて、あとで、そのいのちをひとのために役だてたらいい――という意見をだしました。

笈川　踏絵(ふみえ)なんかも、そのときは踏んでも、生きのびて、伝道のためにガンばるのがいい、という人もいますね。

石島　踏絵なんて、ただの絵じゃないか、といっちまえば、ふんだってなんでもない。しかし、あの戦争のときも、われわれは、いろいろリクツつけて、抵抗しなかった。

大きな盗み

倉持　無邪気にやってるけど盗みになっているようなことと、意識的にやった警察ザタになるような罪と、どちらも、けっきょく

盗んではならない

（司会）石島三郎

【出席者】

金木貞夫（61）菓子問屋
笈川文子（48）主婦
高木克祐（28）郵便局員
倉持幸枝（22）会社員

【聖句】

「盗んだ者は、今後、盗んではならない。むしろ、貧しい人々に分け与えるようになるために、自分の手で正当な働きをしなさい。」（エペソ人への手紙四章二八節）

キセル

石島　おくれちゃって、すみません。これなんかも、みなさんから、時間を盗んだことですね。＜盗む＞にも、いろいろある。

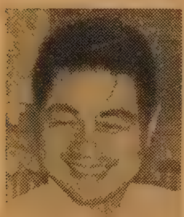
金木　十日ばかり前のことですが、わたし、友人を、一〇円の切符で板橋から赤羽までおくって、帰りに、その切符で、板橋でおりたんです。三〇円かえさなくちゃ、と思いながら、そのままになっている。光に照らしてみると、いけないことですね。結果としては、盗んだことになります。

高木　クリスチャンの友人が、キセルをやったら、そいつの奥さんが、カンカンに怒りましてね。ぼくも、たいしたことじゃないと思ってるんですが……。

金木　世のなかの人は、平気でしょうが、わたしたちは光の子ですから……。

石島　すると高木君は光の子じゃない。（笑）

倉持　わたしも、受洗前には、キセルやりましたけど、いまは気がとがめますね。



高木　こないだ池袋で、自動販売機に一〇円入れたら、切符がでてこない。列つくっていた乗客が怒って、駅員をつるしあげましてね、料金ばかり上げやがってと…。キセルの底には、料金が高すぎるという、そういう気持ちもあるんじゃないですか。

石島　高木さんとこだって、ひどいよ。郵送料の値上げなんか、たいへんなものだ。それに遅配で、ふつうじゃまにあわないってんで、速達にする。だからって、郵便のほうはキセルができない。（笑）

錯覚？

笈川　いつか、横浜駅で、釜飯買ったんですが、五〇円だしたつもりなのに、五〇円おツリくれました。百円とまちがえたらしい。だしたのは五〇円だったような気がするのですが、おツリもらってしまいました。なにか良心にとがめられますね。

石島　だからって、駅弁屋さんに、しらべてもらったりしていたら、汽車がでちゃう。向こうとしたら、しらべてる時間に、一つでも多く売ったほうがいいだろうな。（笑）

金木　商売してますとね、いま奥さんの言われたようなこと、お得意とのあいだに、年百年中ありますね。目の錯覚だったんだろうと考えるほかないですね。

石島　ぼくたち、えてして、高くとられたときは、文句つけるけど、少ないときは知らん顔している。（笑）

罪悪感

高木　ほそぼそとやってる個人経営の小さな会社なんかだと、損かけちゃ悪いって気が

金木 うちの教会は、めぐまれていて、そういうことはありませんね。ことに婦人会はよくやってます。一度見にきてください。

笈川 わたしも、高木さんのおっしゃることと感じます。みんないい服きてまして。ところが、T教会に行ってから、牧師みずから靴下もはかないで、親密さを感じるようになりました。

高木 牧師も牧師ですが、信徒のありかたですね。働く人たちが、まずしくても自分の力で、教会形成に参加するということですね。そうでないと、カネのある連中がやるんだ、ということになる。

金木 わたしの教会は、場所も、ゆたかでない人たちの多いとこで、牧師も会員もフダン着のままです。みんなで教会を支えて、会計も、毎月、五、六千円あまるぐらい。

石島 ここに「正当な働きをせよ」とありますが、失業の問題がからんできますね。

金木 いまは、むしろ求人難ですから、失業者はないでしょう。

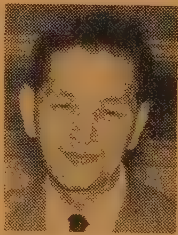
高木 いや、いますね。炭坑労働者なんか、深刻でしょう。中年で失業すると、雑役夫ぐらいしかないそうです。

石島 大学の新卒でも、文科系のなんか、たいへんですよ。

倉持 のぞむ職場はなかなかないし……。

高木 夜間の大学生、高校の定時制なんか、完全にとりのこされていますね。

教会へ



金木 わたしのとこ、日曜は休みですが、使っているものたち、なかなか教会へ行きませんね。女の人は行くけど男はダメです。思うに、なにか盗むようなことをしてるもんで、教会へ行けないんですね。

石島 でも、悪い人間だからこそ教会へ行くってこともある。

金木 それがほんとでしょうが……。

高木 悪いことを感じられるようなら、むしろ、近いですね。ひとつ感じることは、金木さんは使う立場、使われるものとのあいだに相互不信があるんじゃないでしょうか。たとえば、課長連があつまると、あいつは働かないと言い、われわれは、課長がなんだと考える、というような……。

金木 わたしは、課長にあたりますが、そういうこともあるかもしれませんね。しかし、高い映画のほうへ行って、やすい教会のほうへ来ないのは、刺されるからでしょう。

高木 教会へきて刺されれば、しあわせで、なにも刺されるものがない教会では、つまらなくなるでしょう。

倉持 わたしなども、自分がイヤであればあるほど教会へ行くようになり、わたしの信仰は、迫ってくるものが強いほど、目ざめてきたと思います。

分けあたえる

石島 「まずしい人びとに分けあたえるために働け」とありますが……。

笈川 金銭的にだけでなく、精神的な奉仕も考えられますね。

金木 盗む、取る、というのを、逆にあたえるほうに変えろ、という……。

石島 どうも、ぼくなんか、ケチでね。自分のことで手いっぱいみたいに考えて……。

金木 自分を愛するように、ほかの人をも、というイエスさまの気持ち、わかりますね。石島先生は、よく和服めされるようですが、わたしのタンスのなかの着ないままになってる着物、先生にさしあげなくちゃ。

石島 たいへんいいお話です。(笑)しかし、ただ自分が分けるだけでは、貧しさの問題は解決しない。

高木 社会保障がちゃんとなされなけりゃ。

石島 みんなが、〈正当な働き〉をすることができ、ちゃんと暮していける。そういう世のなかになるよう、つとめましょう。ともかく、〈盗むな〉ということでは、個人的な非行や徒食だけでなく、賃銀問題、労使の関係、利潤追求、商行為、いろいろなことが問題になってきますね。

(次回は「悪いことばを語るな」)

は盗みでしょうが、神の前でも、おなじことになるんでしょうか。

高木 この社会機構のなかで、大きな盗みがおこなわれていますね。われわれから、キセルみたいなことで、五〇円、百円と盗まれているような者が、じつは、かえって、われわれから、でかい盗みをやってるんじゃないか、というようなこと……。

石島 正当な盗み……。(笑)資本主義の機構のなかで、大きく、ゴッソリと……。

高木 たとえば、ひとりを殺せば殺人罪、ところが、戦争でたくさん殺せばクンショウもらう、といったふうに。

ギャンブル(かけごと)

高木 ぼくは郵便局で預金をあつかってますが、公金横領は、高令者に多くて、そのウラにあるのは、酒と女ですね。現金書留の抜きとりなんてのは、だいたい年少者です。どれも、生活にこまってやるというのはありませんね。

石島 すると、組合としては、給料が安くて生活にこまるから、こういうことがおこるんだ、とは言えなくなるね。

金木 公金横領は、もう、病気になっちゃうんですな。酒、女、ことにカケごとがいけない。社会から、ああいう施設をなくさなきゃならんですね。

石島 そのとおりですが、人間には、カケの本能があるようですね。カケの好きなヤツは、友人に、「きょうの柏戸と大鵬と、どっち勝つか。晩メシかけよう」って、電話かけたりする。(笑)

高木 ギャンブルは社会悪です。だいたい、みんな、健康な意識はもってても、だれもが免疫になってるわけじゃないので、ずるずるとひきこまれる。

働く喜び

石島 げんざいの給料生活がみみっちいんでギャンブルのアブクぜにが魅力になる。

高木 たからクジなんか、最高五百万円。それに、マスコミの力ですね。週刊誌なぞ、わかい歌手なんかがデラックスな家や車をもってるのを、英雄にしたてて記事にするもんで、みんながそれにあこがれる。

倉持 わたしは、そんな気持ち持ちません。わたし、前には、学力に優越感もってたんですが、それがすっかり打ちのめされてダメになって悩んだ。しばらくして、生きる自信を得て、アルバイトしておカネいただきました。それまでは、おカネといえば、いつでも自由にウチからもらっていた。それで、自分で得たおカネがうれしくて、働ける自信がでました。それからは、はなやかなものにあこがれるより、働く喜びを感じるようになってきました。

笈川 さいきん、ある映画みましたら、ある人が停年で退職して、不自由ないくらしをしているのに、することがなくて生きがいがない、と言うんですね。わたしたち主婦はずいぶん働いていますが、給料もらってるわけじゃない。ときには、もらったほうがいい、と思うこともあるくらい。さいきんは、主婦は第二の職業といわれますが、主人には主人に、子どもには子どもに、それぞれやってもらって、かしこく働かなければ、と思いますね。



倉持 兄がふたりいますが、上のほうは農家のアトとりで、下のは銀行員です。上の兄は農業にコンプレックスもってて、すごく弟に反感もってるんです。その気持ちは、わからないんじゃないですけど……。

労働の問題

高木 日本人には、労働をいやしむ気風があって、それが、教会のなかにもはたらいている。ある勤労青年が、教会へ行くのが気がひける、みんなすてきな服きてるから、と言ってました。役員選挙でも、地位や財力でえらぶ傾向があります。

ろ束縛に向かっての自由です。しかし、このような、われわれの内面における、絶えざる決断によって他者を愛していこうとする動的な活動の自由こそ、真の意味での自由とよばるべきはずです。なぜなら、それこそ、霊を肉にかかわらせ、肉を霊にかかわらせるという、あの人間が真の人間になるという課題を遂行する精神の自由、にほかならぬからなのです。

以上のように人間における自由は、いっぽうではリバティとしての束縛からの〈解放の自由〉であるとともに、いっぽうでは、フリーダムとしての束縛に向かっての〈限定の自由〉であるという、方向を異にした二義的なものを内に含む自由であります。

2　激しい魂

自由の主体であるわれわれは、自己のこのような二つの自由をどのように受け取るものでしょうか。おそらく、はじめの束縛からの解放としての自由に対しては共感と喜びを感じ、またあとの束縛に向かっての自己限定としての自由に対しては、反感と悲しみを感じるに違いありません。そうすると、自由の主体であるわれわれは、自己の自由に対して共感を感じつつ反感を感じ、あるいは反感を感じつつ共感を感じるものだということができます。そして不安は実にこのような、方向を逆にする自由の二側面の裂け目から出てきたものとして、ケルケゴールが言ったように、自由の主体が自己のそのような自由の二側面にむかって感じる、「共感的な反感、反感的な共感」であったのです。よく日常の言いまわしで不安のことを「甘い不安」などとよぶのは、そのような事情をあらわしているものだといえましょう。しかし、われわれは自己の自由の中に存在する、かかる互いに矛盾・否定する共感的な〈解放への意志〉と反感的な〈束縛への意志〉が強く自覚されればされるだけ、その間に深い裂け目をのぞきこむことになり、ちょうど高い所から下をのぞいた人が〈めまい〉に襲われたときのように、なにかにすがりつこうとして今までと同じ場所にいるに堪え得なくなるものなのです。まことに不安の状態はいつまでも持続することが許されません。ちょうど、近づいてきた火事を見張所の上に立って見ている人が、その見張所にしばらくはいることができても、そこにいたたまれずにやがて必ず下に降りてしまうように、不安に襲われた人間は必ず現在の自己を否定して、自己を変化させてくれる対象に向かって飛躍せざるを得なくなるものなのです。そして、この不安のゆえに別の自己に飛躍しようとする自由の主体が抱くエネルギーこそ、われわれが〈情熱〉とよぶものにほかならなかったのです。それは、解放と束縛という、われわれにおける自由の矛盾というものを自覚することが強ければ強いほど、——したがってわれわれが不安に強く襲われれば襲われるほど、激烈なものになるものなのです。その不安が自由という人間存在の根本から出てきたような深いものであればあるだけ、彼は彼の生活全体の内容と、現実の全意義とを、現在の自己を変化させてくれるように思える対象に向かって激烈に、情熱的に集中するでしょう。その意味でまことにパスカルが言ったように、大いなる魂とは〈激しい魂〉のことなのであります。ふつう、われわれは、資本をさまざまな株に投資しておいて、いっぽうで損をすれば、他方でもうけようとする資本家のように、人生を賢明に生きています。あれにもこれにも気をくばって、そつなく生きているわけですが、そういうところに情熱などあろうはずはありません。情熱というものは〈あれも・これも〉雑多なものに心が分散しているところに起きるものではなく、〈あれか・これか〉現実の全実在をただ一つのものに集中し、それを選択しようとする緊張の中にのみ生起するのです。しかも、あとで述べられるように、情熱というものは、自己の願いを貫くために自己を滅ぼすような条件が存在するところに、かえって生ずるものなのであります。これはふつうに考えればおかしなことです。なぜかと言えば、

恋愛論・第六回



続・不安と情熱

高木幹太

1　自由の二義性

＜束縛された自由＞が不安である、と前回に述べましたが、ここではそのことをもう少し違った角度から検討してみましょう。考えてみると＜束縛された自由＞ということは、人間の自由が方向を逆にする二義的なものを含み持っている自由である、ということにほかなりません。周知のように＜自由＞ということばは、日本語、ドイツ語、フランス語では一つしかありませんが、英語には同じく自由と訳されていても、ニュアンスの違った二つのことばが存在しています。その第一はリバティ (liberty) で、これはラテン語のリベロー (libero)、すなわち「解放する」の意味の動詞から作られたことばでありました。昔、ギリシャやローマでは人間をどれいとして、牛や馬のように使っていましたが、プラトン、アリストテレスのような哲学者でさえ、少数の選ばれた人間をささえるために、多数のそのようなどれいが必要であると、まるでそのことがあたりまえのように考えていました。ローマの哲学者のキケロなどは『どれいを何年間で使い殺しにするのがいちばんよいか』という論文を書き、七年間で使い殺しにするのがいちばんよいという結論を出しているそうです。今から考えれば、正気の沙汰でないと思われるこういう論文が堂々と通用していたのですから、当時が、いかにひどい状態であったかがわかりますが、――こういう＜どれい＞の身分にある者が、その身分から解き放たれる、というときにリベローということばを使ったのであります。したがって、リバティというときの＜自由＞は、法律的な意味の強い、なにかある抑圧の状態からの解放の自由ということができましょう。

　ところで、英語にはもう一つの自由と訳されることば、すなわちフリーダム (freedom) があります。これは、ハーバート・リードによれば古代英語のフレオン (freon)、さらにサンスクリットのプリ (pri)、すなわち「愛する」という意味のことばから由来したものでした。愛する、というのですから、それは他者に自分の心を開き、自分を捧げるための自由を意味します。ですからよくいわれるように、リバティが＜……からの自由＞とよばれているのに対して、この自由は＜……への自由＞とよばれています。フレンド (友) という英語が、このフリーダムと同じ語根のフレオン (愛する) から由来しているのも、そのことを暗示するものです。よく、自由ということを＜……からの自由＞とのみ思いこみ、のびのびしてなにをやろうと好き勝手だというふうな、静的な一種の状態性として考えやすいのですが、このような、＜……への自由＞として他者に向かって自覚的に自分を捧げようとする、動的な活動性の側面が自由の中にあることをわれわれは忘れてはなりません。思うに他者を愛し他者に自分を捧げるということの自由は、他者の束縛の中に自分を投げ出す自由として、あの、リバティのような束縛からの解放の自由とは正反対の、むし

3　障害と情熱

だが、どうしてあのカルメンの場合のように、情熱は、われわれが自己を滅ぼすものを、あえて欲するようなそういう逆説の場面から生ずるのでしょうか。それはほかでもありません。前回にも述べたように、われわれの自由（したがってまだ不安や情熱）というものは、自己の自由をさまたげるものに出会うときにかえって逆に目ざめるものであったからなのです。たとえば、われわれの自由に対して、障害をなすものを以下三つあげてみて、それがいかにしてわれわれの自由・不安・情熱をよびさますかを見てみましょう。

Ⅰ、まず第一に＜知的障害＞。ここにひとりの清純な処女がいるとしましょう。ものをいう眉、もの問いたげな唇、神秘にみちた額、もつれた巻髪、長いまつげ、軽い歩きぶり、渇いた人が水を求めるような耳の傾け方、細そりした姿、たおやかな形、豊かな胸、小さな足、きれいな手……。かくして彼女は、それらを所有せぬわれわれ男性の知的自由を刺戟し、不安がらせ、情熱をよびさますでしょう。もちろん、男性が女性との愛の合一によって、大きな自己を獲得したと思ったとたんに、自己として生きないで、＜種族＞のために自分が生きることになること、つまり、霊の高みに昇ったと思われる恋愛の法悦は、実は子供を産むための準備をすることに過ぎないのだということを、われわれはあらかじめ知ってはいます。「女性との消極的な関係は男の中に無限なものをよびさます。しかし女性との積極的な関係を結べば、男はますます有限なものとなる」とケルケゴールは、ビクトル・エレミタの口を借りて言っていますが（『人生行路の諸段階』）、しかし、そういう皮肉な認識はおそらくなんの役にも立たないに違いありません。なぜなら、彼女は依然として、わたしにとって知的障害を与える知られざるものとして、したがってわたしの知らんとする自由を刺戟し、不安がらせ、情熱をよびさます対象だからなのです。

Ⅱ、それから第二に＜運命的障害＞。たとえば旧約聖書の外典に『トビア書』というのがありますが、この中に以下のような話が出てきます。若きトビアは、ラグエルとハンナとの娘サラと結婚しようと思ったのですが、この娘には悲しい事情がありました。というのは彼女は、以前に七人の男と婚約したのですが、彼らはすべて結婚の夜に死んでしまったのです。だが、ひとり子であるにもかかわらず、トビアは八人目の婿として、あえてサラに求婚をいたします。ケルケゴールはこのトビアの行為をたたえて、「だいたんで、勇気あり、騎士らしきふるまいであった。」と言ってから、「だが、彼と同様に行為する勇気を持たぬような男は腰抜けであって、愛のなんであるかも、おれは男だということの意味もわきまえぬ人間である。」と申しています（『おそれとおののき』）。トビアにとって、サラを選び愛する自由が運命的に困難であればあるだけ、その自由は逆に刺戟され、それが彼の不安と情熱をかきたてる結果になったといえましょう。

Ⅲ、最後に＜律法的障害＞。たとえば、律法は、＜……すべからず＞と命ずれば命ずるだけ、それは、かえって心理的に＜汝は……する自由を持っている＞ということを裏から示唆し、刺戟する結果になり、反対の方向に人を情熱的に赴かしめるようになってしまうものです。それはちょうど「こちらに来ちゃだめだよ」と子供に言うと反対にこちらに来ることのできる自由にその子が目ざめ、かえって情熱的にこちらに来たがるようになるのと似ています。はじめグレーチヒェンを欲情の対象としてしか見做さなかったファウスト博士が、彼女の部屋に忍びこんで、その処女らしい清潔な移り香に打たれ、その結果、彼女を欲情の対象とせぬよう律法的に自己を律すれば律するだけ、彼女を情熱的に恋するようになったのも、その間の事情を示しているでしょう。

かくして、知的、運命的、律法的にわれわれを否定し、障害を与えようとするものが、かえって、そのような障害の存在せぬ所にはなかったような、われわれの不安を目ざめさせ、われわれを情熱に駆りたてるものであったのです。恋愛はこのような人間の自由・不安・情熱と深い連関を持つのであります。

（次回は「欲情と恋愛」）

自己があることを願望するあまり、その自己を滅ぼしてしまうことになるならば、世間で言うように、それは〈もとも子も〉なくすることになるからです。だがそれをわきまえた上で、なお情熱というものは、その自己に否定を与え、自己を滅ぼすものをあえて欲するものであったのです。それを欲することが原因となって、欲している主体が滅びるという矛盾を、情熱は肯定するのです。だが、このような矛盾を肯定する勇気としての情熱のみが、真に歴史的・創造的な行為を生む母胎になるでしょう。同一なものの繰り返しや習慣的なものではなく、真に思いがけないもの・新しいもの、すなわち創造的なものは情熱の中にしか生まれることができないのです。

理性的ではないが逆説的な、このような情熱の持つ感動を見事に描いた文学作品の一つに、メリメの『カルメン』があります。わたしはカルメンを読むことを好みます。

カルメンはジプシーの女ですが、彼女が登場する有名な個所は、セビリヤのたばこ工場の女工である彼女が、その工場の衛兵勤務をしているドン・ホセとはじめて出会うところです。男たちがはやしたてる中を、カルメンがあかしやの花束をかかえ、口にもその一輪をくわえて、あちこちと流し目をおくりながらやってくると、わざとショールをひろげて肩を見せ腰をふりながら歩いてくる彼女に、男たちは下品なお世辞をあびせかけます。すると、そのとき真鍮の針金でくさりを作っているホセを見てカルメンは、「ちょいと兄さん。そのくさりをちょうだいな」と声をかける。ホセをからかうためにそう言ったのです。純真なホセが赤くなるのを見ると、おもしろがってみんなといっしょになって彼女は彼を笑いものにしていたが、やがて口にくわえていたあかしやの花を、親指でじょうずにはじいてホセの眉間に投げつけ、人もなげな笑いを残して行ってしまいます。この個所はビゼーのオペラでも有名ですから、われわれは、その光景を想像することができるでしょう。ホセは板のように固くなって、じっと立っていますが、カルメンが工場の中にはいってしまうと、仲間の者に気づかれないように、足もとに落ちているあかしやの花をそっとひろって、たいせつに上着の中にしまいこむのです。そして、このことを発端として彼はカルメンとの間に、文字どおり身を焼く恐ろしい恋をするようになり、最後にカルメンを刺し殺し、いろいろ犯した罪のゆえに絞首刑になってしまいます。

もちろん、このような情熱はきわめて問題的ですが、しかし、自分がいったんこうと思ったら、自分のその思いに対して、いっさいを賭けるカルメンやホセを、わたしは美しいものに思わずにおれません。カルメンは最後にホセを棄てて、闘牛師のルーカスを恋します。そして、それは恐ろしい恋でありました。ホセがどんなにおどしても身を投げ出して哀願しても、「できない相談よ。おまえさんなどまっぴらだ」と答えるので、ホセがカーッとなって短刀を抜く。彼は彼女が恐ろしくなって、赦しを求めることを期待してそうするのですが、彼女が「だめ！ だめ！」と言って、彼が与えた指輪を抜きとって投げ捨ててしまうので、思わずその短刀でカルメンを突き刺してしまうのです。――闘牛師を恋すれば、ホセが短刀をかざしている中でもそれを恐れぬカルメン、恋した女を変心のため突き殺して、自分で滅びを選ぶホセ。どちらも恐ろしい情熱ではありませんか。恋をするにしても、計算ずくでやっているような現代人とはだいぶ違うようです。思うに合理的で、理屈をこねてばかりいるこざかしい人間ばかりが多くなっている、したがって情熱を失った現代に、この『カルメン』は実に示唆的ではありませんか。ニーチェはこのオペラのカルメンを熱愛した人でありました。『ツアラツストラ』第三部の「後の舞の歌」に出ている、

小さき手に汝が鳴らすただ二度のカスタネット。――はや我が足は舞いに狂って歩み出す。

ということばなどは、カルメンを連想したものだといわれております。

気でいられる人々が、医学の進歩や、栄養の改善によって急激にふえる傾向にあります。それらの人々が、その期間をどう過ごすかが大きな問題というわけです。米国などでもこれは大きな問題で、老人期を「新しいフロンティア」などとよんでいる人がいます。

さてあなたは健康にも恵まれ、まだまだ十分働ける余力を持っておられ、いわゆる脾肉の嘆をかこっておられるわけです。あなたのようなかたがたは、いまではずいぶん多いと思います。教会生活を熱心にされていることはたいへんけっこうで、だれにもうしろ指をさされる筋合いはありません。よく、「あなたは、金と暇があるから教会に行けるんでしょう」などと、他人を教会に誘ったりすると言われるものですが、そのことは、たとえ一応肯定したとしても、そのことによって、教会に出席することの意義は少しもそこなわれることにはなりません。むしろ、老後の人生を神のご用に献げるということですから、これまでできなかった分をしっかりやっていただきたいと思います。

もし、あなたが教会で冷遇されていると考えておられるのでしたら、たいへん不幸なことです。教会も若い人が多いと、とかくそっちのほうに注意が向けられがちで、老年組はきわめて消極的な取り扱いをされるようになり、どちらも同じ神の子であることが忘れられたりすることがないとはいえません。

米国で見た、あるいなか町の教会の礼拝では、礼拝のクワイヤのメンバーがほとんど五十代、六十代の男女で、あまりじょうずではないけれども、いっしょうけんめいに白髪の頭をふりふり聖歌をうたっていましたが、なかなかほほえましく、うれしい光景でしたし、また他の教会では「働き蜂の会」というグループを老人連中が作り、いろいろな奉仕をしておりました。教会でも自分から片すみのほうにひっこんでしまわずに、同じ年配の人が集まって奉仕や勉強の機会を作ったらよいと思います。年配の人でなくては得られない英知や働きの場もあるのです。

しかしなんといっても老年には老年の自然なあり方というものがあり、無理に年令の進行に逆行しようとすると、いわゆる、年寄りのひや水になりましょう。老年期になると、青少年期につちかわれたその人の人生観や性格がきわだって現われ、また中年期にはおおいかくされていた小児的性格がとび出してきたりします。この老年期こそある意味で、その人の真価がためされる時ではないでしょうか。

ある学者は老年期の特質は「簡素化」にあるといっています。若い時はあれもこれもと持てるだけのものを持とうとしますが、老年期になると、物心両面にわたってほんとうに持たねばならないものだけを持つようになるというのです。もしあなたが神のかかわりにおいて、ほんとうになくてはならないものをいよいよ深く把握するとき、そこには長い生涯を経てきた人のみに与えられる静かな、深い人生の英知といえるようなものがあらわれ、若い人々に対しても、大きな教えと励ましとなるのではないでしょうか。健脚じいさんとよばれて人々を驚かせてきた一老人が、その体力の衰えを感じて自殺したというニュースがありましたが、すすむ年令に不自然に抵抗し、若さを誇っても、決してそれがほんとうの人生のあり方にならないことを教えているように思いました。恵まれた後生涯を十二分に生かし、よき信仰生活を営まれますよう、より頼むべきものに真により頼むことの、よき結実の日々であられますようにいのります。

（青山学院大学講師・牧会心理学専攻）

人生相談室

老後に思うこと

（回答者）気仙三一



【問】わたしは六〇才、三人の子女を育てあげ現在は長男と同居し、ふたりの孫の世話でわたしなりに忙しい日々を送っております。主人とは五年前に死別しましたが、退職金その他のたくわえから、月々わずかでもわたしの手に、自分の身のまわりのものを買いととのえたり、孫になにか買ってやるくらいのこづかいがはいりますので、まずまず恵まれた老後の生活と言えると思います。

健康はいまのところ上々で、家事も嫁に負けないくらいやってのけるくらいです。教会は中年までは家事に追われたり、主人があまりわたしが教会へ出るのを好みませんでしたため、出席がむずかしく、時々特別の集会に出る程度でしたが、いまでは自由に出られるようになりましたから、毎日曜礼拝には出席し、教会の仕事もお手伝いしたり、また、婦人会のご用などもいたしたいと思っていますが、わたしの教会には若い人が多く、なにか年寄りのわたしの出る幕ではないような気がして遠慮させられますし、ひがみかもしれませんが、わたしのような老人には、あまり教会のかたがたも関心をお持ちにはならないような気がするのです。それに、あまり日曜毎に教会に通ったり、集会に人をさそったりすると、近隣の人など「あの人はゆとりがあるのであんなことができるんだ」などと言っているらしいのです。それで今は日曜は礼拝に出るだけですぐ失礼して帰ります。それではいけない、とは思うのですけれども、いろいろなことで年をとると、考えさせられることの多い日々です。若い人たちに対してもわたしなりに意見もあり、考えもあって時々口に出すのですけれども、おかあさんは古い時代の人だから、というひと言で片づけられると寂しい思いがします。

【答】おっしゃるとおり、あなたは恵まれた生活を送っていらっしゃいますね。なかなか老後の生活を物心ともに恵まれて過ごすということは、むずかしいことなのです。その点で、とにかく物質的にだけでも、老後の生活が不安のないように社会保障が行きとどいているヨーロッパのある国々はたいへんうらやましいことです。日本も以前にくらべると、だんだんよくなっていますけれども、皆安心して老人期を迎える日は、まだまだ程遠いようです。ところが今日の新しい問題は、老人期がたいへん延びたことなのです。もちろんそれはけっこうなことなのですが、定年退職したり隠居したりしてから二〇年ぐらいは元

ほんとうはあいさつのひとつもしたい気持はないわけではありません。でも、今度は、誰にも会いませんでした。ひとりで広島を歩いてみたかった。そんなお父さんの気持、君にもわかってもらえるかしら——。

II

倫平君。お父さんは、九時過ぎ宿を出て、荷物を駅にあずけると、すぐに平和公園に行きました。そうして、まず最初に、原爆資料館を訪ねました。長崎では観ていたのですが、広島の資料館は、どうしたことかまだ観ていなかったのです。資料館のひとつひとつについては、いまここで書くわけにもいかないから、帰ってから、写真や文献によってもっとくわしく説明してあげてもいいと思います。東京駅で君からたのまれた、モスコー大学に行っているS君に送るための絵はがきや資料は忘れないで買ったから安心してください。お父さんはそういう小さい友情のわざをうれしく思います。そういう小さいわざをつみ重ねていくことが、ほんとうに平和を守るために大切なことです。

資料のひとつとして、婦人用の小さい腕時計が二つ陳列されていました。お父さんは、焼けただれたその腕時計の前を、しばらく立ち去ることができませんでした。時計はまさしく、原爆がさくれつした時間を、はっきりと示しているのです。午前八時一五分、お父さんはその時計を腕につけていた女性のことをしばらく想像の世界で追いもとめました。

平和への
人間のちからを信じて
下さい
　しみとおるような
　小さな骨の
　ささやきが
人間の
平和へのちからを信じて
下さい

こんな原爆の詩がありました。あの腕時計をのこして、原爆に死んでいった、その女性の小さい骨が、しみとおるようなささやきで、お父さんの胸の奥に、平和へのちからを信じてください、とささやいてくれるのでした。まだそんな年でもないと思うのに、ちかごろは、そんなときお父さんは、つい眼がしらがあつくなってしまうのです。お父さんのそんな姿を想像してくれることができますか。ふと、峠三吉の詩の一節を想い起すのです。

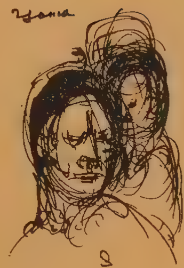
あの閃光が忘れえようか
瞬時に街頭の三万は消え
圧しつぶされた暗闇の底で
五万の悲鳴は絶え

渦巻くきいろい煙がうすれると
ビルディングは裂け、橋は崩れ
満員電車はそのまま焦げ
涯しない瓦礫と燃えさしの堆積であった
広島
やがてボロ切れのような皮膚を垂れた
両手を胸に
くずれた脳漿を踏み
焼け焦げた布を腰にまとって
泣きながら群れ歩いた裸体の行列

石地蔵のように散乱した練兵場の屍体
つながれた筏へ這いより折り重った河岸
の群も
灼けつく日ざしの下でしだいに屍体とか
わり
夕空をつく火光の中に
下敷きのまま生きていた母や弟の町のあ
たりも
焼けうつり
兵器廠の床の糞尿のうえに

原爆の傷は今日もうずく

佐古純一郎



I

倫平君。出発のときは重い荷物を持って、東京駅まで送ってくれてありがとう。東京駅のプラットフォームで握手して君と別れてから、お父さんはアンドレ・ジイドの『一粒の麦もし死なずば』を読みふけり、時の過ぎるのも知らないくらいでした。今朝四時半ごろに広島に着いたのですが、少し早すぎるので、駅前の小さい旅館で九時までぐっすり眠りました。

今度の講演旅行には広島は予定にはいっていなかったのですが、お父さんが、わざわざ広島に下車したのはお父さんなりの考えがあったのです。第二原水協の運動にお父さんが参加したというニュースのことで、いろいろと君にも心配をかけたわけですが、そのことは別として、お父さんは、いまの平和運動のすすめかたにも疑問がないわけではありません。とくに核実験が再開されてから、いたるところで、平和運動に分裂が起ってきていることは、君も知っていることだと思います。

そんなとき、お父さんは、この旅行の一日をさいて、広島の原爆の傷あとを、ひとりでたずねながら、静かに考えてみたかったのです。平和運動に対するお父さんの参加のしかたについて、もういちどひとりで考えてみたかったのです。

だから、広島では誰にも連絡をとらなかったし、誰をも訪ねないことにしたのです。広島YMCAのKさんや、広島大学のM君や、広島女学院のFさんや、この広島にもずいぶんたくさんの友人や知人がいるのですから、

この碑文を、最初に広島に来て読んだとき、それはもう四年くらい前だったかと思うのですが、お父さんは、なにか釈然としないものを感じたのです。ボロ切れのように、ばらばらにちぎられて死んでいったこれらの人々にいったい、安らかに眠るということを、かんたんに慰めのことばとしても投げかけられるものだろうか、そんなことを考えたりしたのです。いま、静かにひとりでこの碑の前に立つお父さんには、素直に、この碑文の意味がわかってくるようです。これらの人々に、安らかに眠ってもらえるかどうかは、わたしたち次第なのだと思えてきたからです。もう二度と原爆の、そうして戦争そのものの過ちを繰返してはならない、そのような真実をかけることなしに、この碑文を原爆の犠牲者たちにささげることはできないのです。平和に対してわたしたちの心がゆるむとき、何度でも、わたしたちは、この碑の前に帰ってくるべきです。原爆資料館で、あのなまなましい被爆者の姿にうたれて、その足をこの碑の前にはこぶとき、誰が、平和を守ろうという決意を新たにしない者がいるでしょうか。

倫平君、お父さんは、君や直之君が、来年の春、無事に進学をすませたら、二人で、この広島に来ることを望みます。そのくらいの費用はお父さんにも用意できないわけではないのですから。そうして、現代において学問をするということは、どういうことなのかをもういちど、しっかり、ここで考えてほしいと思います。お父さんは、君たちが、何よりもまず、平和のために闘ってくれる学徒になってほしいと願います。お父さんには、もうできないことがあるのです。君たちはお父さんをのりこえて、平和の創造に前進してほしい。口さきだけの平和主義者でなく、ほんとうに平和をつくる人になってほしい。ただ、八月六日だけに、年中行事として、この碑の前に集まるのでなく、ひとりで、この碑の前に立ってほしい。そこから、「われら何をなすべきか」を決断してほしい。そんなことを、しきりにお父さんは考えるのでした。

IV

平和公園をあとにして、お父さんは、べつにこれといったためあてもなく、広島の街をひとりでぶらぶらと歩きました。街の表面を見るかぎりでは、原爆の傷あとというようなものが、鮮明に感じられるわけではありません。けれども、お父さんは街を歩きながら考えました。これらの家々の、一歩内側にはいって行ったら、きっと、原爆の傷が、きょうも、ここかしこでうずいているにちがいないと。そんなことを想いながら、ふと気がついてみたら、何か原爆に関する記念の掲示が目につきました。住友銀行の玄関でした。こんなところに、何が？　と立ちどまって近よってみました。ちょっと見たところでは、どういうことなのか、判断しにくいのですが、説明によりますと、ちょうど原爆がさくれつしたとき、誰かが、その銀行の入口のところに腰を下ろしていたらしく、その人影が、原爆の強い光線で、コンクリートに焼きつけられているのでした。買った写真集のなかに、その写真も収められていますから帰ってから、説明しましょう。

時間があったら、もっともっと遠くにまで出かけて行って、あの日、被爆者たちが、ぞろぞろ、ぞろぞろと行列をつくって避難した悲しみの行進のあとを偲んでみたかったし、原爆病院などにも、たずねたいと思いましたが、夜の集会の予定されている岩国に行く約束の時間があったので、かならずしも、願いが達しられたわけではありませんでした。しかし、最初に書いたように、お父さんは、ゆるされたこの機会に、広島の街をひとりで、あてもなく歩きながら平和運動に参加する自分の気持や態度について、もういちど静かに考えてみたかったのです。そうして、そのような願いだけははたされたと思っています。

もちろん、いまここで、お父さんは、その

のがれ横たわった女学生らの
大鼓腹の、片眼つぶれの、半身あかむけ
の、丸坊主の
誰がたれとも分らぬ一群の上に朝日がさ
せば
すでに動くものなく
異臭のよどんだなかで
金ダライにとぶ蠅の羽音だけ

三十万の全市をしめた
あの静寂が忘れえようか
そのしずけさの中で
帰らなかった妻や子のしろい眼窩が
俺たちの心魂をたち割って
込めたねがいを
忘れえようか！

『八月六日』と題するこの峠三吉の詩を想いながら、資料館にかかげられている被爆者たちの凄惨な写真を、つぎつぎと観ていくうちに、お父さんの腹の底から、ムラムラとこみあげてきた怒りは、それはもうヒューマニズムというようなまやさしいものではありませんでした。女だか男だかわからないような顔、大人だか子供だかわからないような人間、泣くことも悲しむことも、すでにできなくなって、ただもう、虚脱したような状態で横たわっている体。お父さんは、ふと、太田洋子の『人間襤褸』という小説のことを想い出しました。襤褸、そうです、まるで人間が、ぼろ切れのようになってしまっているのです。太田洋子のその小説のなかに、こんな一節がありました。

「これ、加治多保子さん？」

杉太は息をとめ、菊江の膝に掻き乱した髪をのせている女の姿を見た。菊江はうなずいて見せたが、口を利かなかった。

杉太は、加治多保子の錯乱した姿を、なお眼をこらして見据えた。紺絣の上着の胸が幅広く裂けている。裂け目から乳房の形をしたどす黒い、どろどろの血と肉の塊りが、胸の方に垂れ下っていた。杉太は初め、多保子の胸に吹き出ている異様なものが、千切れた乳房だということがのみ込めなかった。抉り取られた肉房のあとには、暗い血潮の穴があいていた。胸の上に飛び出ている右の乳房は、もはや女の乳房ではなかった。片方の乳房は、栗いろの円みをもってピンと張りつめ、南天の実の形の、ぷつりとした乳首でほの赤く締まっていた。

原爆資料館で、被爆した女性たちの数々の写真をみているうちに、こんな小説の文章が、そのまま実景として、お父さんの眼の前に再現されてくるようでした。ここには、誇張などなにひとつありません。人間襤褸とはこんな姿のことをいうのでしょう。もちろん、あれから十六年経ったいまの広島の街々で、人間襤褸を実感することは、非現実的なことかもしれません。街を歩く人々にとって、それはむしろ永遠に忘却の渕に沈めたい悪夢なのかもしれません。それにもかかわらず、わたしたちはそれを忘れてはいけないのです。そういう意味からも、君なども、いちどは太田洋子の『人間襤褸』や『半人間』という作品を読んでおいてほしいと、お父さんは望みます。

Ⅲ

原爆資料館を出ると、お父さんは、原爆慰霊碑の前に歩んで行きました。他には、誰もいませんでしたが、静かに黙禱をささげながら、お父さんは、また新たに平和への誓いを自分に対してかたく結んだことでした。

安らかに眠って下さい
過ちは
繰返しませぬから



《信教の自由を守るために　2》

神社の寄付について

宮崎　彰

秋が深まると日本全国、オマツリ一色になります。最近、祭礼の寄付が大きな社会問題となりました。九月二日、警察庁は「祭礼その他地方行事等における紛争事案の防止について」というかめしい通達を全国の県警と方面部長に発令しました。翌三日の各新聞はこれについて一斉に報道しましたから、ご承知のかたが多いでしょう。

この通達の背景として、二つのことが考えられます。第一は社会党が一九五八年以来、何度か議会に提出してきた「寄付募集規制法案」であり、第二は創価学会の活動です。

一、これはイ、最近、「赤い羽根」のほか寄付の種類が増え、半ば税金化している、ロ、貧富の差に関わりなく、五〇円、百円という戸別割当が町内会などを通して強制されている、ハ、使途内容が明確でない、などの理由から立案されました。神社関係者は自民党関係者を通して強力な反対運動を展開し、残念ながらいまだに議案は成立していません。

二、創価学会は信教の自由をまもるため所属議員を通じて活発な運動を展開しています。イ、三月二三日、参議院予算委員会で、当会所属の辻武寿議員は「神社仏閣に対する寄付強制は間接的暴力である」と安井国家公安委員長と柏村警察庁長官を詰問し、当局の厳正な取り締まりを要望しました。ロ、八月三一日、参議院地方行政委員会で、同会所属の中尾辰義議員は、前記辻議員の質問に対して、どのような措置がなされたかを追求して、当局をタジタジとさせました。

そこで警察庁は、質問会二日目、いろいろなケースを示しながら、取り締まりの方針を指示することになったわけです。ところが、取り締まりの根拠となるべき罰則を伴なった寄付取締定例を設置しているのは、ナント東京、福岡、徳島の三都県だけなのです。これら三都県における昨年一年間の寄付強要条令違反検挙数は三七七件、三日に一件という割合です。また大阪、茨城、埼玉の三府県は、せっかく募金の届出や経理の公開を規定しながら、寄付強要の罰則を欠くためザル定例となっています。この他、東京都および一三県が押し売り防止定例をもっていますが、神宮の太麻やオフダの押し売りを禁じているのはごく少数です。泣き寝入りをしている人が全国でどのくらいいるかわかりません。当局は仕方なく軽犯罪法で処罰しようとしていますから、罰則を伴なった定例ができるよう各県会に働きかける必要があります。しかし、みなさんひとりひとりが、自分の信仰を表明して、寄付をはっきり断わることがいちばんたいせつなことでしょう。

明治のはじめキリスト教は埋葬拒否など、ちょうど、今日の創価学会と同様の迫害を受けながら、その伝道路線を全国に伸ばしてゆきました。しかし、日本精神が強調されるとともに、イセ神宮の太麻や神社参拝、さらには境内の掃除にまで狩り出されました。また非国民とよばれたくないため、祭礼の寄付もしました。自然、信教の自由が保証されている現在でも、惰性から寄付を続けている人たちがいますが、このような悪習は一刻も早く止めるべきではないでしょうか。これは十戒の第一番目を犯すことです。よく町内親睦のための寄付は伝道の一方法だなどという人がいます。彼は、信仰と親睦とを混同しています。神社への寄付を拒絶し、神棚や仏壇を棄てながら伝道に成功している創価学会の真剣さを見習うべきです。この点、『福音と世界』の七月号をぜひお読みください。長崎の岡牧師の手記はあなたの闘いのよき励ましとなるでしょう。寄付強要や脅迫の事例がありましたら、さっそくお知らせください。しかるべき措置をとりたいと思います。ご健闘を祈ります。

（日本聖書神学校教師）

ことをくわしく君に知らせようとは思いません。今後、少しずつ実践に移してゆくことでまた君にもわかってもらいたいと思っています。だけど、お父さんは、やはり、自分に与えられている、ペンを通して、少しでも平和への願いを訴えてゆくことが、平和運動に参加する道ではないかと、考えました。原水禁の組織の中で、何か、目ざましい運動をするということは、お父さんには、やはりふさわしいことではないようだし、また、それだけが平和を守る運動ではないように思います。もっと具体的にいえば、いろいろと、芸術の世界にきざまれてきた原爆の傷あとがあるわけですが、そういうものを、できるだけこくめいに見て、お父さんなりのペンにたくして、原爆の恐ろしさや、生きようとする人のいのちのとおとさを、訴えてみたいと思うのです。そういう静かないとなみをとおして、お父さんの、平和運動への参加が、あるいは、開かれてくるのではなかろうか、そんなことが、しきりに想われるのでした。東京に帰ってから、もっと、ちみつに考えてみて、来年あたりの、お父さんの大事な仕事のひとつにしたいと思ったりしています。

V

ソ連やアメリカが、核実験を再開したことで、平和の問題が、さらに切実なものになってきました。ソ連が悪いのか、アメリカが悪いのか、この間も、君とずいぶん議論したことだったが、どちらが悪いかということに問題の重点をおくべき性質のものではないのかもしれません。どちらが悪いかということで、わたしたちが互いに敵意を抱いて、二つの陣営にわかれてしまうことは悲しいことです。お父さんは、そういう平和運動のすすめかたからは、もう手をひきたいと思っています。そのことは、かならずしも、ソ連も悪い、アメリカも悪いという、両成敗の理論をとるということでもありません。今度の核実験を、どうしたら、わたしたちは、核兵器の全面廃止の方向に少しでも有利に転回してゆけるだろうか、お父さんは、そのことにむしろ心を注ぎたいと思います。全面的軍縮、いやもっとはっきり、軍備の全廃に向かって、いまはもう、ドン・キホーテのようにちょとつすべきときです。

倫平君。お父さんは、君や直之君を、どんなことがあっても、もういちど、戦場に送りたくありません。そうして君や直之君が、誰よりもまず、もう戦争はしません、と誓ってほしいのです。そういう誓いが、きっと、君や直之君を、政治に無関心でない学徒にさせてくれるだろうと期待します。もっとも、直之君は、まだ中学を終るところだから、こんなことを期待するのも少し早いかもしれません。しかし、君は少なくとも来年はもう大学です。高校時代から、君は、比較的関心が強かったので、そのことでは、お父さんは内心うれしく思ってきました。その関心を、大学に進学したら、もっと強く育ててほしい。

君も、もう、来年は成人を迎えるのですから、りっぱな主権者です。政治への無関心は主権の放棄であり、社会悪だと、お父さんは考えているのです。君が積極的な学徒になってくれることを、お父さんは、どんなにか願っていることでしょう。わかってくれたまえ。旅さきの広島から、こんな手紙を君に書いたのも、もういちど、平和への決断をお父さんは、君や直之君といっしょに、たしかなものにしたかったからです。今日から、二週間、お父さんは、岩国、大竹、徳山、光、下松などをめぐって、さらに、大阪、和歌山の十数ヵ所の教会を訪ねます。旅の間、さらに、ひとりで静かに考えてみるつもりです。帰ってから、また、平和の問題について、いろいろと語り合いましょう。お父さんは、そのことを楽しみにしています。元気で勉強してくれたまえ。

て、真実な報道をぬりつぶしつつある最近の新聞界の、それみたかと言わんばかりのソ連批難は、わたしそれのほうが問題だと思うんです。大事な声明文の全文も読まないで、ただ平和の名だけで、そういうジャーナリズムのシリ馬に乗って、反対反対を叫ぶのは、問題の本質をみないですね。たとえば、ソ連が完全禁止協定を叫んでいるときでさえ、フランスはサハラ砂漠で、広島の数倍の原爆実験を続けてきているんです。NEATO加盟諸国へのアメリカのテコ入れもあるじゃありませんか。数の上でもこれまでのアメリカの核実験回数は一七〇数回、ソ連は五〇数回です。だのに、どうしてソ連に対してだけさわぎ立てるんでしょう。さわぎ立てさせることによって、自衛隊に核武装させ、沖縄に原爆をたくわえ、日本を原水爆基地としようとしている身近かな戦争製造人から目を離させようとしている者がいることに気をつけなければいけません。ただ現象的な実験再開に反対するだけの観念的平和論でなく、完全軍縮から軍備徹廃への提案を妨害し続けているものはだれか、平和の敵がだれかを見きわめることがたいせつです。そのためには、声明文をよく読み、ソ連の実験を前向きに見ることです。現象にとらわれてそれだけを問題にすると、うしろ向きになりますから……声明文の一節を読みましょう。〝ソ連政府は、世界の軍備全廃の構想を具体化し、核兵器がもはや人類の生活をおびやかさないようにするための努力を何倍にもつよめることを、世界各国の国民と政府に呼びかけるものである〟。」

　実験それ自体の悪を認めながら、問題をさらに深く掘りさげて、どこまでも具体的現実的な見きわめと行動が必要、そうでないと反対運動はどんなに熱心でもマトはずれになってしまうというのが氏の意見である。

　つぎはキリスト新聞社・教文館社長武藤富男氏（五七才）の実際的な説明——

「わたし、右腕のヒジに一〇数年来の湿疹があり、たえずかゆくて困っていたので、先日ある診療所へ行き、クスリをぬってもらった。ところが、これがひどい炎症を起こして、ヒジから手のほうまで腫れあがってしまった。これはエライことになったと心配していたら、その炎症がおさまると同時に湿疹はきれいに癒ってしまったんですね。ソ連の核実験再開もそれと同じことではないでしょうか。実験それ自体は悪です。世界的炎症です。だが、そのことによって全面的軍備撤廃が実現するなら、その炎症はよい結果を生みます。神はかかる悪をも用いて、世界に真の平和をもたらすとは考えられないでしょうかね？

　とにかく、みんながあのソ連政府の声明を熟読してないです。わたしはよく読んで、フルシチョフの真意を理解しましたね。声明を読まないために、ソ連の真意に対する疑惑が世界平和の実現をさまたげていますよ。なるほど、ソ連の態度についての疑惑はあります。たとえば、日ソ不可侵条約があるのに、これを二〇年八月に破ったのはソ連の不信行為です。しかし、これを破らせたのはだれかというと、前の年のヤルタ会談で、アメリカがソ連を対日戦線にさそいこんでる、だから、法律用語で言えばソ連は正犯だがアメリカは教唆者だということになる。〝教唆ハ正犯ニ準ズ〟というのが刑法の大原則ですからね。国家というものは個人よりも背徳的なものですよ。アメリカのほうがいくらかソ連よりはよいがね。だからといって、一つの国家の言うことをすべて信頼しないのはよくない。ことに全人類の運命に関することですから、軍備全廃についてはソ連はウソは言っていないと思いますね。だから、平和運動は実験反対にばかりうき身をやつしていると、ネライがはずれますよ。いまは軍備全廃せよというソ連の提唱に協力することがもっとも現実的なことで、また効果があります。世界はその時期にきています。キリスト教平和運動は軍備撤廃運動までふみきっていくべきです。」

　——ともあれ、世界に軍備があるかぎり、核兵器の問題はたえないだろう。それだけに以上三氏の見解を手びきとして、われわれは今後もこれを考え続けねばなるまい。

核実験をどうする

――教界三氏に聞く今後の問題――



八月三〇日、モスクワから出た宣言が、世界の人々をあッと言わせた。寝耳に水……晴天のヘキレキ……オドロキモモノキ……いろいろな意味で、まき起こった動揺は大きかった。言うまでもなく、ソ連の「核実験再開宣言」である。

どうやら、世界中の人間が、この「核」については敏感になっているようだ。それだけに、モスクワからの波は大きかったと言えようが、いったい、まき起こされた波とか動揺とかはどう始末をつけたらいいものか、問題は波の大きさや「核」の力ではなくして、これをどう受けとり、これにどう対処していくかなのだ。

そこで訪ねたのが教界著名の三氏――さてその受けとりかたと対処のしかたは……

まず、平和団体である日本友和会（ＦＯＲ）の書記関屋正彦氏（五七才）の卒直なご感想――

「とにかく、あの実験再開についてわたしが言いたい第一のことは、ソ連は実験をやらないと言っておきながら、フルシチョフのその舌の根が乾かないうちにやったんですから、これは許せない不信行為だということです。そこにどんな事情があるとしてもですよ。国際関係でもなんでも、いちばんたいせつなことは信用ですからね。これをふみにじるというのはクリスチャンとしてもどうもね……。約束を自分たちのつごうでどんどん変えてしまうのですからね。ソ連は信じられないです。もちろん、約束を破るのはソ連ばかりではないでしょう、ほかにもあるでしょう、あるでしょうけれども、今度のやりかたはいけません。

第二に、わたしたちは、軍事的核実験はいかなる事情があろうとも絶対反対です。ですから、アメリカでは、害のないように実験室内でやるようなのがありますが、それも軍事的実験であるかぎり反対です。

とにかく、約束しておきながら事情が変わればどんなことでもするということで、けっきょくソ連という国はアテにならないんだという不信感をあたえられましたね。要するに実験再開と続行には絶対反対していかなければ……そのためには世論が高まることです。」

関屋氏のゲンメツ感は、おそらく多くの一般人の胸にも流れているだろう。だからこそ絶対反対の強い確信が生まれてもこよう。

つぎに日本基督教会荻窪北教会牧師・松尾喜代司氏（六三才）のご意見――

「わたし、このことでひじょうに腹を立てているのは、実験実施のさい発表されたソ連政府の声明ですね、あれを日本の新聞はほとんどとりあげなかったということです。やっと載せた一、二のものでさえ、かんじんのところをカットして、要約だけなんです。これはじつに不合理です。というのは、あの声明を読めば、なぜ実験をはじめなければならなかったか、これを通してソ連は世界全体になにを呼びかけているかがはっきりとわかるからです。今、声明文の説明はしませんが、有能な政治記者や、社会部記者を地方局に配転し



子の青い顔が、死んだおくさんにそっくりだったからです。

——そんな、ばかなことが！——

博士は、頭をぶるんとふって、診察にかかりました。女の子は、足が折れているのでした。博士は、ありあわせのぼうきれをさがして折れた足にあて、ほうたいをまきました。ところが、どうしたというのでしょう。まいてもまいても、ほうたいは、ひとりでにゆるんでしまうのです。

「いつのまに、わたしはこんなに、ぶきようになったんだ？」

博士のつぶやきに、そばで見ていた母親はおろおろとさけびだしました。

「先生も、やっぱり人間のお医者さまですのね。どうしたらいいのでしょう？ ユリの花のお医者さまは、どこにいらっしゃるのでしょう？」

「ユリ？」

びっくりして見なおすと、女の子はいつのまにか、くきの折れたヤマユリの花にかわっていました。

「ユリの花の医者——ユリの花の医者——そうだ、たしかにいたはずだ。待っていなさい。わたしがさがして来るから。」

その時、博士は目がさめました。表の戸を、はげしくたたく音がしていました。博士は、とこから起きあがって出て行きました。

5

戸をあけると、それは、意外にもひるまの植木屋でした。

「えらい医者さまと聞いたのは、だんなのことでしただか？」

植木屋の老人も、おどろき顔で言いました。

「わたしは医者だが、なんだね？」

「わしといっしょのやどにとまった人が、急病になりましたです。ほかの医者さまへも行きましただが、どこでもことわられました。町でもいちばんきたない、きちんやどですだで。」

「行こう。」

博士は、何年ぶりかで、かばんをさげて外へ出ました。やどは近くでした。はらいたを起こして苦しんでいた旅の男は、一本の注射でけろっとなおってしまいました。

「やっぱし医者さまでないとなあ。わしは木や草の病気なら、ちっとはなおせるが、人間のこととなると、年がいもなく、さわぐばかりですだよ。」

年とった植木屋は、歯のない口をあけてわらいました。博士はとつぜん、ひざをたたいてさけびました。



タックバウエル博士とおさな友だち

文 大井三重子
絵 市川禎男

4

その晩、博士はゆめを見ました。それは、こんなゆめでした。

——博士は、しんさつ室にすわって、本を読んでいました。と、表の戸を、どんどんとたたく音がしました。戸口に立っていたのは見たことのない女でした。

「むすめが、けがをいたしまして——。すぐおいでいただきたいのですが。」

博士は、ちょっとのあいだ、答をわすれていました。女のからだから、むせぶばかりに強いユリの花のかおりが、ただよっていたからです。

「わたしは年をとって、診察も、治療もしないことにしているのだが、ほかの病院に行ってもらえないかね。」

われに返って博士が答えると、女は、かむりをふって言いました。

「だめなのでございます。町中のお医者さまにみていただいたのですが、どうすることもできないのです。どうぞ、いらっしゃってくださいませ、先生。」

タックバウエル博士にとって、それは、いくど聞いたかしれないことばでした。博士の心に、ふと、とくいな気持ちがわいてきました。

「よし、行ってあげよう。」

博士は外に出ました。青い月夜でした。女は、いそぎ足で、先に立ちました。

——こんな町は来たこともない。それに、だんだんあたりがさびしくなるようじゃないか？——博士は、首をかたむけました。

「もうすぐでございます。」

女は、博士の心を読みでもしたように言いました。

いつのまにか博士は、草深い野原に立っていました。目の前の小川も、左手の森も、博士には見おぼえのあるものでした。

「これは、わたしの故郷だ！ こどものころ、かけまわって遊んだ、村の野原だ！」

思わず博士はさけびました。その時、女はあゆみをとめて言いました。

「この子でございますの。みてやってくださいませ。」

足もとの草の上に、ひとりの小さな女の子が横たわっていました。身をかがめた博士は、びっくりしました。目をとじている女の

ル博士が、大きなトランクをさげて、あらわれました。

「おあいにくだが、見送りではないのだよ。ラフコ。——友だちがいに、わたしもいっしょに連れて行ってもらいたいのさ。じゃまかね？」

「あんたも行ってみるかね？　そうかい、そうかい。夏の山はええからな。ゆっくり遊んでくとええだ。神童のタックバウエルが来た言って、みんなよろこぶぞ。」

「わたしはもう、ずっと村に住むつもりだよ。ラフコ。」

「なんだと？」

「きみは木や草の病気をなおす。わたしは人間の病気をなおす。どうだね？」

「へえ？　なんぼすばらしいことだか！　でも、ええのかね？　あんなりっぱな家があるだのに。」

「あの病院には、いくらでもあとをつぐ医者があるさ。——ラフコ、きみは、折れたユリをなおした時、ほんとにうれしそうな顔をしたね？」

「それは、ユリがよろこんでるだからよ。ユリがよろこべば、わしもうれしいだよ。」

「わたしも、それをやってみたくなったのさ。病人がよろこんだだから、わしもうれしいだよ。——というぐあいにね。」

タックバウエル博士は、めずらしく、しぶいわらいをもらしました。

きりのあちらから、汽車のきてきが、尾を引いて聞こえて来ました。

（おわり）



「ラフコじゃないか！」

植木屋は、きょとんとしました。

「わすれたかね？　村の小学校でいっしょだったタックバウエルだよ。」

植木屋は口をあんぐりあけ、それから、くびふり人形のようにうなずいて、博士の首にしがみつきました。

「級長のタックバウエルだか？　はんとだ、ほんとだあ。――旅のとちゅうで友だちに会うなんとは、――おう、おう、おう。」

ラフコは、ないたりわらったりしました。いつもビリから一番だった、ぐずのラフコに友だちとよばれて、博士は、のどのおくが、こそがゆいような感じがしました。いつになく、ふるさとの野原などをゆめに見たのも、ひるま、ラフコの国なまりを耳にしたせいだったかと、博士は思いあたりました。

「旅というと、どこかへ行くのかね？」

「村へ帰るだよ。年をとると、国がこいしくなるでなあ。」

「では、きみも、よそでくらしていたのだね？」

「むすこが三つの時に、連れてみやこへ出ただよ。にょうぼに死なれて、村でくらすのは、さむしくてならなんだし、それに、むすこだけは、ちゃんとした学校へ行かしたかったで。あんたも知っとるとおり、村には医者さまがおらんで、病人が出た時は、えろう困る。わしゃあ、字もろくに読めんらくだいぼうずで、どうしようもないだが、むすこが医者さまになって村に住めば、みなのしゅうも助かろうと思うてなあ。」

「で、医者になったのか？」

「むすこかい？　なった。なったはなっただが、とほうもない大ばかで、山ん中の医者なんぞ、いやだとぬかしおる。みやこの研究所で、バイキンとやらの研究をするのじゃ、言うてなあ。――わしににず頭のええやつで、大学も一番で出おったが、村へ帰らんのでは、なんのためにくろうしてあいつをそだてたのやら、わからん。まったくオッチョコチョイの大ばかやろうめで。」

「それはちがうよ。ラフコ。わかい頭のいい医者が研究をして行くからこそ、医学は行きづまらずにすむのだ。きみのむすこが、一生がいのしごとに、細キンの研究をえらんだのなら、よろこんでやるべきだよ。」

「へえ、そんなもんかね？　あいつ、都会かぶれで山の村をけぎらいしやがるんではねえだかね？　そりゃあたしかに、どえらい山ん中だが、それでも生まれた所はええからなあ。わし、ようやっとここまで来て、夕方の汽車に乗るはずだったが、あんたとこのユリの手入れで乗りおくれただよ。それも、えかった、乗りおくれたおかげで、あんたに会えたもんなあ。こんなとこだが、むかしの話でもして行かねえかね。わし、あすの朝七時にたつで。」

「七時に？　いや、そうしてはいられない。用があるのでね。」

タックバウエル博士は、ラフコがしきりととめるのをふり切って、やど屋を出ました。

6

あくる朝、町には、こいきりがたちこめていました。植木屋のラフコは、つぶれたぼうしをかむって、プラットホームに立っていました。

「ラフコ。」

よびかけられて、植木屋はふり返りました、きりの中を、黒いかげが、こちらに近づいて来るのが見えました。

「タックバウエルか！　見送りに来てくれただかね。」

ラフコは、よろこびの声をあげてかけよりました。タックバウエ

だが、彼は相変らず疲れている様子でいった。
「ここは、そこの交番で、福祉といえばすぐ教えてくれたはずですよ」
私も、そうしたのだ。しかしさんざん迷った揚句の果てである。たしかに私は、一度はこの事務所の近くまで来て、タバコ屋で聞いていたのだが、そのタバコ屋は、この福祉事務所を知らなかったのだ。
「じゃ、本所の地図でも書いてあげましょう」と中年男は、思い直したように机へ戻って腰を下した。
私は、その彼へたずねた。
「手続きをとって許可になるまでどのくらいかかるんでしょう？」
「法定は十四日となっていますが、ひと月かときによればふた月かかると思っていただかなければならないでしょうね。何しろ事情をくわしく調べなければならないし、このごろは申請がとくに多くなっていますのでね」
私は、だまっていた。ショックを受けていたからである。それでもやがてやっとたずねた。
「特別の事情がある場合には、もっと早くなる、という取り計らいは……」
「その特別の事情の方ばかりなんですよ、ここへ来られる人たちは」と男は事もなげに答えた。
私は、書いてもらった略図を、役にもたたないものでももらうような情ない気持で受取った。むろん私は、ちゃんと礼をいった。私は、愛想のいい人間だからだ。しかしドアを出ようとして、もう一度彼へ頭を下げたときは、彼は私なんかに気にとめているふうもなく、机の上の書類へ憂欝そうな眼を落していただけであった。私は歩きながら心に呟いていた。
『はじめから自分だって手続きをすれば今日明日にも医療保護が受けられるとは思っていなかったんだ』
だが、たとえ順子に医療保護を受けられるようになっても順子の病気には間に合わないだろうという気がしていた。すると突然、私は息苦しくなった。私は、しゃがみ込んだ。耳がつんぼになるほど真後から、自動車の警笛がいらだたしそうに連続して鳴らされていた。振り返ると、そのせまい道一杯にトラックがやって来ていて、私へ蔽いかぶさるようにとまっているのだ。私は、立上って軒下へ身をよけた。通りすがりにトラックの運転手が、窓から首を出してバカヤロウとどなった。
『なるほど』と私は考えた。
しかし何故なるほどなのか、私にははっきりわかっていなかったのだ。私は、胸を押えながら、歩き出した。幼稚園のそれらしい小さな空地が見えたからだ。私は、門のところへたどりつくと、その石の門柱を背にしてふたたびしゃがみ込んでいた。呼吸の困難はひどくなり、胸骨をその下部の方から何かが引裂こうとでもしているような激痛が襲っていた。額から油汗がにじみ出ていた。何が起ったのか、やはり私にはさっぱりわからなかった。青と赤の縞模様の大きなゴムボールがその私の足許へころげて来た。みると、胸に名札をつけた坊っちゃん刈りの頭の園児が、私に恐れでも感じたように近寄れずにいるのだった。私は、ボールをとって彼の方へころがせてやった。次の一瞬、私は、自分の意識の遠くなって行くのを感じた。

夜警番の日記(11)



椎名麟三

11　また一つの限界

私が、やっとその福祉事務所をたずねあてたとき、ある感じに打たれて、その見すぼらしい入口のドアを眺めながら、ちょっと足をとめずにはいられなかった。この世のなかにおける福祉的な事業というものは、どうしてその建物からして余計者のような感じをもっているのだろうと思ったからである。私の工場にも福祉施設として共済組合があるが、本工場の方にある自転車置場の一部を改造した物置と間ちがいやすい場所におかれているのだ。そしてその事務所のドアを押して入ったとき、さらにその余計ものの感じが一層強くした。うす暗い上にせまくて、ただ一人机に向っていた中年男の姿も、冴えない感じだったからである。全くうらぶれた土地家屋の周旋屋の事務所といった感じなのだ。彼は、私を見ると、立上って来て、応接用らしいテーブルのところまで出て来た。私は、医療保護についてお願いに来たのだと、それでも幾分どぎまぎしながらいった。彼は、私よりずっと長身だったせいもあった。だが、彼は、順子の住所をたずねると、三日も飯を食っていないといった元気のない声でいった。

「それでしたら本所の方へ行って下さい」

「本署?」と私は思わず頓狂な声を出した。

しかし所員は別におどろいたふうもなく答えたのだった。

「花島町にありますよ。都電で行けばいいですね。ちょっとわかりにくいかも知れませんが」

「ここも相当わかりにくかったですよ」と私は愛想笑いをうかべた。

むろん、私は、それだけで口をつぐんだ。こんなところで口に出して祈ろうとしていた私自身がはずかしかったからだ。そして私はいままでそのはずかしさを心のなかに大切にして来たのである。そして私は工場の人々に対してだけでなく、キリスト者でない人々に対しても、祈りを口に出すことによって自分を区別したくなかったし、また区別されたくもなかったからだ。私は、人々と一緒にいるところの一人の人間でありたかったし、いささか愛想はいいとしても、人々にとって平凡な五十男でありたかったからである。むろんこんなはずかしさについて、教会のなかで喋ったとしたら、私のはずかしさを不信仰のしるしとして教会の人々の軽蔑と反撃をくうことは必定だった。しかし私にとっては、このようなはずかしさを感じることができるからこそ、いままで工場の人々と仲好くやって行くことができたのだといっていいのだった。しかもまた、そのはずかしさによって、キリストからあたえられている恵みを自分に生きたものと感ずることができたのである。だが、もし誰かが、私をキリスト者である故に、はずかしい存在として笑うならば、私はその人々に対しては、ユーモアをもってだが、誇って見せることができるだろう。いいかえれば私のはずかしさこそ、同時に私の誇りにほかならなかったからである。

「斎藤さん！」と看護婦が私を受付口から呼んだ、「診察室へ入って下さい」

四十すぎの、頭が角刈に見えるような医者だった。彼は、はじめから私に対して患者としての興味を失っているようだった。彼は、既往症や先の発作などについて次々と事務的な質問をしたと思うと診察台へ横にならせた。そして血圧をはかったかと思うと、

「心電図をとりますか？」

といった。それが必要ならば、そうしてもらうべきだった。私の手首や足首に電線がつながれ、やがて心電図の器械がじいじいと音を立てはじめた。そして心臓の周囲に電線のついた吸盤が次々と位置がかえられた。やがて器械から波状を印されて出て来たテープを見ていた角刈のように見える医者は、死者でも見るような眼付で、私の顔を見下しながらいったのである。

「家はどこですか？」

「江東の方です」

「タクシイにでものって用心して帰って下さい。都電なんかで帰ったら死んでしまいますよ、また発作を起して。帰ったらすぐ近所のお医者さんにかかって、絶対安静にしていなければ駄目ですね」

私は、礼をいった。礼をいわなければならなかったからだ。私と入れちがいに私の次へやって来た患者が呼び入れられた。若い男だった。私は、診察室を出て、受付口で待った。金を払わなければならなかった。受付口に看護婦の姿が見えた。

「いくらですか？」と私はたずねた。

「千八百円です」と看護婦は答えた。

私は、財布を洗いざらいにした。千四百円ほどしかなかった。私は、それを受付口へならべ、それへ自分の身分証明書をそえた。

「四百円足りませんので、その身分証明書をわたしておきますから……」

看護婦は、私の言葉を聞きおえもしないで、受付口から姿を消した。やがて受付口へ戻って来た彼女は、安堵したようにいった。

「それじゃ、これお預りしておきますから、足りない分は、家のお

だが、まもなく私は、立上って歩きはじめていたのである。激痛がうすらいで来たからだ。だが、まだ耳はひどく遠い感じで、あたりの様子も夢のなかの世界のような非現実的な鮮やかさをおびていた。それでも私は、眼の前の乾物屋へ入って行くと、その主人らしい四十男にこうたずねることができたのだった。

「この近くに内科のお医者さんありませんか」

私は危険な心臓病である狭心症の発作かも知れないという気がしていたからであった。私の部屋の隣りにいる老人が、その病気で呆気なく死んだばかりなので、その病状がそれとひどく似ていることに気付いていたからである。私は、教えられた医者の家へ向って急いだ。このときの私を白状しなければならないのだが、その私にとって、十二時から工場でひらかれる組合の緊急総会のことや順子のことや死への不安はもちろん、恥しいことだが私の信じている信仰のことさえも思いうかんでいなかったということだ。

その医者の家の待合室には、中年と若い二人の女が待っていた。私は、小さな受付口をあけた。人の気配はなく、棚にごてごてならんでいる大きな薬瓶が見えた。いかにも医業の商売屋という感じだった。私は、その受付口が伝声管の口でもあるかのように口をあてながらいった。

「お願いします」

すると小柄な看護婦が入って来るのが見えた。今度は、彼女がその小さな受付口から顔の一部分をのぞかせた。正確にいえば、眼を中心として額の一部分と丸い鼻の先をである。私は、その眼へいった。

「狭心症の発作を起したらしいので、それで……」

「保険証をおもちですか？」

「家において来たんです。身分証明書はもっていますから、後から……」

「ご近所の方ですか？」

「いいえ。江東の方なんです」

「保険証をもって来て下さい。でないと、健康保険での診療はできないんです」

「いま、千円あまりしか持ち合せがないんですが」と待合室にいる二人の婦人にある抵抗を感じながらもいった。「それで一応の救急の処置はしてもらえないでしょうか？」

看護婦は、不服そうな声でとがめるようにいった。

「ご病気は何なんです？」

「だから狭心症というもんじゃないかと思うんですが」

「それはたしかなんですか？」

「たしかかどうかは……」と私はいいよどんだ。

私の頭の錯乱を感じた。騒ぐ必要もないことを騒いでいるという気がしたからである。すると看護婦がいった。

「先生におうかがいして来ます」

私は、受付口でぼんやり待った。やがて看護婦が戻って来ていった。

「じゃ、お待ちになっていて下さい」

長椅子の真中に坐っていた中年婦人が、私のためにその端へ寄ってくれた。私は、頭を下げてその空いた一方の端へおずおず腰を下した。しかしその婦人はすぐけげんそうに私の方を見たのだった。

『神様……』と私は思わず口走っていたからだった。

「ぼくはもっていねえよ」
私は、坐り込んでしまった。すると傍の組合員たちの方は、一斉に立上りはじめたのである。私は、傍の工員を見上げた。工員は興奮した声で私へいった。
「聞いてなかったのかい、じいさん。明日のストライキの部署を職種別にきめるんだ」
吉田も、やっと腰を上げて、尻の土を払いはじめた。気がつくと吉田は、あわれむような眼で私を見下していたのだ。彼は、私と眼が合うと、ふいに感情のない声でいったのだった。
「そこで待っていな。ぼくが誰からか借りて来てやるよ」
そして彼は、人ごみのなかを縫って一人の男へ近付いて行った。それは資材課の社員だった。やがて彼は、引返して来ると、折りたたんだ千円札を私へだまってわたした。だがひろげて見ると、それは二枚もあった。
「給料が入ったら返してやれよ。でないとぼくは知らねえぜ」
そして吉田は、疲れたような様子で本工場の門を出て行ったのであった。おそらく倉庫係の詰所へ帰るためにちがいなかった。しかし私は、あるショックを受けていた。私は、たしかに教会の人々と一つになっているはずであったが、その誰かに対して金を借りようなんていまのいままで思いついたことがなかったということに気付いたからであった。私は、空地のあちこちにグループをつくって集りはじめている人々の後を通って工場を出た。そしてここの工場の人々の殆んどがそこにかかっている医者の家へ向って、用心しながらも歩き出していたのであった。しかしその私は、あさはかにも、その医者の診断が、あの医者とはちがって、きびしいものでないことを心ひそかに願っていたのであった。

（つづく）

方にでもとどけて下さい」

私は、表へ出た。十円硬貨が財布に二枚残っているきりだった。むろん私は、タクシイで帰るためにあの払いのうちから二百円ぐらいとっておくことはできたのだ。しかし私は、できればその残っている二十円の金も払っておきたいくらいだったのである。だが、私はやはりそれをとっておいていたのだ。都電に乗るためにだ。だが、都電の停留所に立っているときに、またもあの発作が起って来たのだった。むろん私は、しゃがんだ。電車を待っている人も私のほかに二、三人いたのだが、私はどうしてか自分のしゃがんでいる理由を知られたくない気がして、右の手で用もない靴の紐をいじりながらその激痛に耐えていた。しかしそれが五分も十分もつづいたら、傍の人々も私の異状に感づいたかも知れなかった。だが、ありがたいことに今度は、先刻の発作より時間は短く、一、二分ですぎたのだ。だからやって来た都電が、思いのほか空いていたことに私は心からのありがたさを感じたのである。しかし私は、都電に揺られているうちに、このままどっか遠くへ運ばれて行く気がしはじめていたのだった。まるで自分の住んでいるところが急になくなってしまったようにだ。その私の胸は、氷のような冷たさを感じていた。心臓の衰弱のためでなく、明らかに死への恐怖のためであった。それにもかかわらず私は、一方ではどうしても死ぬ気がしない気もしていたのであった。

私は、自分のアパートのある停留所で降りずにそのまま工場まで乗って行った。私にはもはや七円しか金がなかったからである。やっとついた工場の塀には、もう賃上げ要求のビラがべたべた張られていた。私は、本工場の方の門へ入った。守衛が入口のところでぼんやり手持無沙汰に立っていた。彼は、私を見るとどうしてかてれたような笑いをうかべた。彼は、あるいは微妙な立場へ立たされているのかも知れなかった。私もその彼へ、愛想のいい笑いをかえした。彼も私と同じ年の五十だったのだ。彼はいった。

「みんな鍛工場の前に集ってるよ」

半製品の大きな鉄のかたまりが、赤錆びたまま鍛工場の入口の両側にごろごろおかれていて、その前の空地には、四、五百人の工員たちが腰を下していた。私は、その人々の後へしゃがんだ。若い三十前の組織部の委員が、赤錆びた型から鋳出したままの二トンあまりの鋼材の上に上っていた。その彼は、顔を真赤にしながら叫んでいたのであった。

「われわれは、労働者としての生活権をどこまでも守らなければならない。そのためにはわれわれは、この会社側の挑戦に対して死を賭してもたたかい抜かなければならないのであります」

拍手が起った。私は、やっと倉庫係の吉田の姿を見付けた。彼は退屈そうに坐り込んでうつむいたまま、膝と膝との間の地面へ、落書でもしているようだった。その彼の姿は、ふだんのこの世には何の興味ももっていないといったあのニヒリスチックな彼の姿と少しもかわってはいなかった。だが、私は、まるで私の職場のなかで一番頼みやすい人間であるかのように、ほっとした気持になって、彼の傍へ行ってしゃがんだ。

「吉田さん」と私は思わず哀願の調子になっていった、「千円ほど貸していただけませんか。いまほんとに七円しかもっていないんです。それだのにどっか悪いらしいんで」

吉田は、疑うように私を見た。それからにべもなくいった。

読者の声

★ご投稿を歓迎します。
★薄謝を呈上します。
★住所、氏名、職業、年令をご明記ください。

強く生きよう!

主のみ名を心から讃美いたします。

毎月送られてくる『月刊キリスト』感謝して愛読いたしております。

広い角度から生きたことばが編集されて信仰の導き手として、また多くの未信者への求道書としての働きが大であることを信じます。

日曜礼拝につどうことのできない(理容という職業のために)わたしは、この『月刊キリスト』の〃伝道説教〃にいつでも感激いたしております。それにまた〃信仰に生きる〃はすばらしいです。二月号の江口氏の生活記、仕事終りのひととき、ほんとに涙を流して読みました。キリストにあって、その信仰を持つことの強さ、苦しい中にあっても美しいものであります。

十月号に〃証し〃なさった盛岡の大窪さん、若き信仰生活にあって、世と戦うことはむずかしく、しかも苦しいものです。わたしも体験いたしました。主を待ち望みましょう。そして互いに強く生きましょう。わたしも郷里は岩手です。心の貧しい多くの人のために祈り、福音を伝えましょう。持場・立場がちがっても、キリストにある幸いを感謝いたしましょう。

集会に出ることの少ない、そのために信仰の友の少ないわたしであります。読者のお便りいただけましたら幸いであります。御誌の上に恵み豊かにありますように。

(横浜市港北区太尾町二六〇横山方・菅原昭男・理容師・24才)

クリスマスを返して!

今年もまたクリスマスがやって来ます。ぼくは世間の人全部に、「クリスマスを教会へ返してください」と叫びたいのです。ぼくも幼いころは、サンタクロースの存在を信じていました。そしてクリスマス・プレゼントのみをあてにしていました。クリスマスはプレゼントをもらう日と決めこんでいたからです。しかし、すでにクリスチャンのぼくには、イエスさまの誕生を祝うたいせつな日であります。一カ月も前から劇の練習をしたりしています。

それなのに、日本のクリスマスはどうでしょう。酒に酔いつぶれ、夜遅くまで町でさわぎ歩く。ぼくはこんなおとなたちへ言いたいのです。「こんな利用をするクリスマスなら、教会へ返してください」と。教会で静かにイエスさまを祝うだけで十分です。イエスさまを知らない人にまでも、祝っていただきたくありません。

ぼくは今年こそは、誠のクリスマスが迎えられるよう願うものですが、皆さまはいかが。

(船橋市・青柳一郎・高校生・16才)

相手のためになる真実

「真実を語れ」の座談会を読み、深く反省させられました。世間のせまい療養所にあって、いかに真実がたいせつであるか考えさせられます。患者は感受性が強く、うっかりしたことを言うと、とんでもないことになりがちです。それが、つまずきの原因ともなりかねないのです。三年間の療養生活で、それがマイナスにならずに、のちにプラスになっているのがわかったのです。そこに、神のみわざが実現したのです。ある日わたしは、前に真実でないことを言った人と時間をかけて、話しあったのです。はじめは、なかなかこちらの言うことを聞いてくれませんでしたが、だんだんと、相手は理解をもって聞いてくれるようになりました。わたしは、この座談会でとりあげている、エペソ人への手紙四章二五節のことばを、相手の人に伝えまして、いかにこのことばが重要であるかを教えました。それから、時があればその人に、個人的に伝道してついに信仰の実がみのったのです。もちろん、真実を語るということは、この座談会で田中さんが言っていられるように相手のためになるように、言うのが真実だということです。誠実を自分なりに、せいいっぱいもって、世の中を生きていくことがたいせつであることも語られてあり、自分の教えと同じだったことを喜び、かつ、そう願ってやまないのです。

(滋賀県・高島郡・今井療養所内・高橋義・30才)

キリスト教読書月間行事

一〇月は、キリスト教読書月間にあたります。できるだけ多くの人が、できるだけ多くまた深く、キリスト教書を読むよう、運動を展開する月間です。

本事業部では、左の行事を行ないますので、愛読者の皆さまのご協力をお願いいたします。

講演会

◇仙台 10月25日夕 高木 幹太氏
連絡先・仙台YMCA
(電②七五三三)

◇東京 11月6日夕 佐古純一郎氏
11月13日夕 高見沢潤子氏
11月20日夕 椎名 麟三氏
北森 嘉蔵氏
駿河台 東京YWCAにて
連絡先・本事業部
(電(561)五五四九)

◇名古屋 10月30日夕 佐古純一郎氏
11月6日夕 椎名 麟三氏
11月13日夕 高木 幹太氏
連絡先・名古屋YMCA
(電(32)一六四七)

◇京都 10月31日夕 佐古純一郎氏
11月7日夕 椎名 麟三氏
11月14日夕 高木 幹太氏
連絡先・京都YMCA
(電(23)四三八八)

◇大阪 11月1日夕 佐古純一郎氏
11月8日夕 椎名 麟三氏
11月15日夕 高木 幹太氏
連絡先・大阪YMCA
(電(44)〇八九二―六)

◇神戸 11月2日夕 佐古純一郎氏
11月9日夕 椎名 麟三氏
11月16日夕 高木 幹太氏
連絡先・神戸YMCA
(電③〇一二三)

◇姫路 11月10日夕 椎名 麟三氏
連絡先・姫路YMCA
(電(22)六五一五)

○『月刊キリスト』10月号または11月号ご持参のかたは、聴講料が半額になります。ただし、入場無料のところもあります。

『月刊キリスト』は、各都市の有名書店にあります。

○講演会終了後、『月刊キリスト』愛読者会を開きます。ただし、連続講演会の所は、最終日。

「読者のすすめ」 無料配布

小さなトラクト「読者のすすめ」を希望の教会、団体に無料でさしあげます。教会で、学校で、文書伝道用に使ってください。

このトラクトには、子供向き、婦人向き、青年向き、求道者向き、教会役員向きの良書が紹介してあります。

希望部数をはがきで、本事業部まで申しこんでください。

書評募集

キリスト教読書月間(今年は一〇月一日―三一日)にあたり左記の要領にて、読者各位から書評を募集します。ふるって、ご応募くださいますよう、お願い申し上げます。

1、**対象の書類・雑誌は**、左の出版社の今年一月以降の刊行物に限ります。日本基督教団出版部、日本基督教協議会・文書事業部、新教出版社、教文館、聖文舎、キリスト新聞社、YMCA同盟出版部

2、原稿は本文一〇〇〇字以内

3、**当選作品五篇**にたいしては、各社の書物が買える**図書券**(一〇〇〇円分)を贈呈。

4、**締切日**は一〇月一〇日。

5、**発表は**、『興文』一一月号、『キリスト新聞』など。

東京都中央区銀座四ノ二
日本基督教協議会文書事業部

編集後記

◇札幌の講演会を皮きりに、キリスト教読書月間の諸行事が、はじまりました。

◇「キリスト教の本を一冊も読まないで、クリスチャンになるひとは、おそらくひとりもいないでしょうし、また、クリスチャンで、月に一冊もキリスト教書を読まないというひとも、まためずらしいのではないか」と、本事業部で無料配布しているトラクトには、書かれています。しかし、実際はどうでしょうか。一月に一冊はおろか、一年に一冊も、キリスト教書を読まないクリスチャンが、かなりあるのではないでしょうか。

◇クリスチャンでさえ、そうなのですから、クリスチャンでないひとがキリスト教書を読む機会は、きわめて少ないと言わなければなりますまい。どうしたら、クリスチャンでない人に、キリスト教書を読んでもらうか。「文書伝道」の大きな課題のひとつです。

◇大分県の原田郁雄さんから、読書週間にふさわしいお便りをいただきました。くわしくは、次号にお知らせしますが、だいたい、次のような趣旨です。

「信仰生活十年になるが、無為だった自分が恥ずかしい。はでなことはできないが、なにかしたい。思いついたのが、『月刊キリスト』を友人たちに贈ることだ。まず、八人の友人に、半年、送ってほしい。さらに、自分と同じようにしたい人がいることだろう。そのグループをつくったらどうか」

現在、原田さんのように、『月刊キリスト』を、友人たちに贈っていらっしゃるかたが、編集部で、わかっているだけでも、三〇人ばかりあります。

◇『月刊キリスト』にかぎらず、良いキリスト教書、キリスト教雑誌を余裕があれば贈ってください。せめて読むよう、すすめてください。読書をすすめることは、キリスト者にふさわしい贈りものだと思います。

◇椎名さんは、持病の心臓病が再発し、ご不快のなかを、ご寄稿くださり、また、講演旅行に出てくださいました。「死ぬのが、こわくなくなったからね」とユーモアたっぷりに言われて恐縮かつ心配しています。

◇今月の表紙は「ヨナ物語」です。旧約聖書ヨナ書一章をご覧ください。

クリスマス特大号　予告

わたしの見た明治、大正、昭和の日本
（東京女子大学・日本聾唖学校創立者）（駐日アメリカ大使厳父）
オーガスト・ライシャワー博士

グラビア・北欧のクリスマス
デンマーク・フィンランド・スエーデン・ノルウェー

日本人の精神構造における罪と赦し（対談）　亀井勝一郎　佐古純一郎

＜わが信仰の生涯＞
（白洋舎創立者）（「詩者の味わい」著者）
＜信仰に生きる＞　五十嵐健治

シュバイツアーとともに
——白十字会野村実博士とその周辺——

＜巻頭随想＞
小崎道雄、篠田一人、関屋綾子

＜伝道説教＞クリスマス　岸　千年

クリスマス（英　米）　尾崎　安

（ドイツ）の詩　田口義弘

ヘンデル「救世主（メサイア）」物語　原　恵

家庭クリスマス（礼拝）　新見　宏
（遊びかた）　高橋四郎

クリスマス童話　北畠八穂

＜小説＞
夜警番の日記　椎名麟三

＜信教の自由を守るために＞
元号・国旗・国歌　宮崎　彰

＜社会を見る目＞
株価の大暴落

月刊キリスト

昭和三六年十月二五日　印刷
昭和三六年十一月一日　発行

編集人　高戸　要
発行人　浜崎次郎
発行所　日本基督教協議会
文書事業部
東京都中央区銀座四ノ二
振替　口座・東京一一六七九
電話(561)六一三一・八四四六

発売所　教文館
東京都中央区銀座四ノ二
毎日新聞販売店
東京都中央区有楽町一ノ二

印刷所　株式会社　恒陽社印刷所

直接、ご購読になりたいかたは、発行所まで、お申しこみください。

一部　六〇円（〒六円）
半年　三六〇円（〒共）
一年　七〇〇円（〒共）
三弗（海外）

— KIRISUTO The Christian Home Journal.
Vol. 13. No. 11 November 1961
Japan Commission on Christian Literature Tokyo

昭和二十四年二月三日第三種郵便物認可
昭和三十六年十一月一日発行（毎月一回一日発行）
月刊 キリスト 十一月号
定価 六〇円
NCC文書事業部



IBM 2879
製版・印刷・恒陽社